その女、小悪魔につき――。

九曜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その女、小悪魔につき――。

【Ｎコード】
Ｎ７９３０Ｑ

【作者名】
九曜

【あらすじ】
この学校で彼女の名を知らない生徒はいない。大人っぽく、美人で、いつも微笑みを絶やさない完璧人間。勿論、僕はそんな高嶺の花に興味はない。ただ彼女とその周囲を観察して楽しむだけ。――でも、それは一本の電話からはじまった。平和と退屈と本を愛する彼と、天使の微笑みで彼に言い寄る彼女の、鬼ごっこのようなラブコメディ。

第1話

階段状になった大教室の中、空いた席に僕らは固まって陣取り、先生がくるまで無駄話を続ける。

「お前ね、友達と一緒にいるときくらい本読むのやめたら？」

「ちゃんと話には参加してるさ」

僕こと藤間真（ふじま・しん）は、読んでいる本から顔も上げずに答えた。

「それに丁度おもしろいところなんだ。今日中に読んでしまいたい」

「あいかわらず活字中毒だねぇ」

友人はため息混じりにそう零す。

本好きは否定しないが、僕としてはそこまで中毒ではないつもりなのだが――そう思いながらページをめくる。

と、

「見ろよ。きたぞ」

友人のひとりが話の流れを切り、ひかえめなボリュームの声で皆に告げた。

別に僕は周りを無視して本に没頭したいわけでもないので、見ろと言われれば見る。顔を上げれば、教室中央の扉から女子生徒のグループが入ってきたところだった。

（そうか。この授業は、あの人がいたんだったな）

注目すべきは、その中心にいる人物。

長い黒髪を揺らして歩く彼女の名は、槙坂涼（まきさか・りょう）という。学年は僕よりひとつ上の3年生だが、ブレザーの制服を脱いで私服を着れば大学のほうに紛れ込んでも違和感がないくらい大人っぽい。そして、何よりも美人であった。

ここ、明慧学院大学附属高校は単位制が導入されていて、生徒がそれぞれ前期と後期のはじめに履修する授業を好きに選ぶことができる。なので、科目によってはこれからはじまる授業のように、別の学年でも一緒に受けたりすることもある。

そして、槙坂涼が受ける授業は、決まって大教室になるのだという。なぜなら、彼女目当てで同じ授業を希望する生徒が、性別を問わず、学年も問わず、腐るほどいるからだ。おかげで各学期の最初には、彼女がどの科目を希望しているのかを知ろうと皆躍起になり、嘘、本当、ダミー含めていろんな情報が飛び交う。直筆の履修届けのコピーともなると、ン万円で取り引きされるとか何とか。……ご苦労なことだ。

「今日も素敵だなぁ、槙坂さん」

「そうだね」

僕は友人の夢見心地の感想に、テキトーに相槌を打つ。

気がつけば教室内の喧騒のトーンが落ちていた。皆、僕たちと同じようにそれまでのおしゃべりをやめ、そちらに注目して何ごとかを囁き合っているのだろう。

この教室は前半分が平面で、後ろ半分が階段状になっている。真ん中の扉から入ってきた槙坂先輩は教室の中央を横断する広い通路を歩くことになり、さながらファッションショーのモデルのように視線を集めていた。後ろ寄りに座っている僕も、数段下を歩く彼女を目で追っている。

「相変わらず無関心丸出しの返事だな。ああいうお姉様とつき合いたいと思わないわけ？」

「思わないね。聞いた話、勉強もできるんだろ？　そんな完璧人間とつき合っても大変なだけさ。それに僕たちみたいな年下を相手にすると思うか？」

少なくとも女の子を見て騒いでいるような子どもなど相手にしないだろう。すでに大学生とつき合ってるなんて噂もあるし。

「確かになさそうだな」

「だろ？　よって、僕はあの人に興味はないね」

そう言い切って、再び本に目を落とす。

――と、そのときだった。

槙坂先輩がこちらを見た気がした。誰も気づかない、向けられた

僕にしかわからない、目だけを動かした視線。僕は思わず、一度は伏せた顔をまた上げる。だが、そのときにはもう彼女はこちらを見てはいなかった。いや、もとより本当に『気がした』だけだったのかもしれない。

槙坂先輩はすでに僕と最接近する座標を過ぎ、遠ざかっていく運動に入っていた。

「……」

僕はその背中を黙って見送る。

やがて彼女を含めたグループが空いた席に座ると、もっと関係を深めたい男どもがゴアイサツに群がりはじめた。……熱心なものだな。

僕はしばらく遠目からその様子を眺めていた。

さて、そんな起きたか起こらなかったかもわからないような出来事も忘れた数日後のこと。

机の上に置いた携帯電話が振動し、低い音を鳴らした。

本を読むのをやめ、それを手に取る。サブディスプレィを見れば、０９０ではじまる知らない番号が表示されていた。僕のアドレス帳にはない番号。よって送信者の名前もなし。誰かが僕の番号を勝手に人におしえたのだろうか。

僕は無慈悲にＨＬＤボタンを押して、静かになった端末を机の上に戻した。

「出なくていいのかよ？」

ここは小教室。普通の高校のように机が４０ほど並べられていて、並んで座った友人が言う。

「知らない番号だったからね。３回かかってきたら出てやるさ」

「三顧の礼かよ」

そんなにいいものじゃない。単に誰からかかってきたかわからない電話に出たくないだけ。そう言おうとしたが、ちょうど先生が入ってきて、僕たちの会話は中断を余儀なくされた。

「次の授業は、と……」
見なくても覚えているのだが、念のためロッカーの扉の裏に貼りつけた時間割り表を確認する。
３１０２教室。
講義棟３の１階、２号室。
大教室、つまり次は槙坂先輩のいる授業か。例の如く騒がしいのだろうな。
平和と退屈と本を愛する僕は、ため息をひとつ。それからテキストとノートを取り出し、ロッカーに鍵をかけてから目的の場所へと向かった。
教室に入ると、すでに槙坂先輩がきていることはひと目でわかった。
前のほうの一角で人だかりができている。いつものようにゴアイサツしたい人たちが群がっているのだろう。本人の姿は見えないが、あの人垣の向こうに槙坂先輩がいるに違いない。聞いたところによると、そんな状況でも彼女は微笑みを絶やさず、誰とでも話をしてくれるのだという。
僕はそれを横目で見ながら逆方向、すなわち教室の後ろへ足を向ける。
歩幅の合わない階段を数段上がって、４列目の通路側に座った。この授業は一緒に受ける知り合いがおらず、遠慮なく本が読める。そう思ってテキストとともに持ってきた文庫本を開こうとしたとき、例の人だかりに動きがあった。
中から槙坂先輩が出てくる。申し訳なさそうに皆に謝りながら輪を抜け、向かう先は――、
（こっちにくる、のか……？）
まさか。
だが、予想通り、且つ、思いもよらないことに、彼女は僕のもとへとやってきた。先輩が僕のそばに立った瞬間、教室内が静まり返

る。
「こんにちは。藤間真くんよね？」
発する言葉も見つからず、ただ見上げるだけの僕に、槙坂先輩は大人っぽく微笑みながら問うた。落ち着いた感じの声だ。
「……」
警戒。
なぜあの槙坂涼が？
「違った？　できれば何か言ってほしいのだけど」
「あ、ああ……」
僕はようやく我に返った。
「僕に何か用でしょうか」
だがしかし、槙坂先輩はその質問には答えない。
「あなた、意外と用心深いのね」
「……」
警戒心が顔に出たのだろうか、代わりにそんなことを言われてしまう。
と、そこで教室内にチャイムの音が鳴り響いた。休み時間終了。
「残念、時間切れだわ。じゃあ、またね」
そうして彼女はくるりと踵を返し、優雅に去っていった。
これが槙坂涼と僕の、ファーストコンタクト。さっぱりわけがわからなかった。
なお、この後の授業は四方八方から視線を感じる、非常に居心地の悪いものだったことをつけ加えておく。

翌日、
「ケータイがない……」
そう気がついたのは、3限目が終わった直後のことだった。
「どうした？」

スラックスのポケットを探りまくっている僕を見て、友人が聞いてくる。彼はすでにテキスト類をまとめていた。これから昼休み、早く食堂に行きたいのだろう。
「いや、ケータイがないんだ」
「失くしたのか？」
「みたいだ」
家から持って出たのは確かだ。その記憶はある。だが、どの時点までであって、いつからなかったか、その境が定かではない。
「まずいな……」
つぶやく。
多機能すぎて半分も使いこなせていない機能の中には、金の代わりになるようなものもある。まずは学務課に行ってみるか。落としものとして届けられているかもしれない。
そう方針を決めたとき、
『2年の藤間真さん。お伝えしたいことがありますので、学務課までお越しください。繰り返します――』
校内放送だった。
その丁寧、且つ、事務的な口調は、先生のものではなく、学校事務の人のものだろう。お伝えしたいことというのが方便なのはすぐにわかった。どうやら僕の携帯電話は学務課が預かっているらしい。
「ちょっと行ってくる」
友人に断り、一路、学務課へと向かう。
予想通り、行った先では落としものを預かっていることを告げられた。学生証で本人確認をし、携帯電話を受け取る。
さっそく電源を入れ、端末をチェック。特におかしな点はないし、怪しい通話記録もないようだ。後は財布としての機能だが、学校で落として昼には返ってきたのだ。使われている心配はないと見ていいだろう。
ほっと安堵――した瞬間、着信メロディが鳴り、かなりどきっとさせられた。誰だ、こんなタイミングで。心の中でお門違いの文句

を言いながらサブディスプレイを見ると、そこにはこうあった。

槙坂涼――

「！？」

その名前を見て、心臓が止まるかと思った。

なぜ？

なぜ彼女のアドレスがメモリィに登録されている？　そんなはずはない。質の悪い冗談だ。そう思いたいが、しかし、事実として液晶はその文字列を映し出している。

「……もしもし」

通話ボタンを押し、出る。

『ああ、よかった。今度はちゃんと出てくれたのね』

「……」

今度は？

『それにさっき放送が流れたばかりで、まだ取りにいってないかもと心配だったの』

すぐに僕の頭の中で話がつながった。

「……聞きたいことがあるのですが」

『そう、丁度いいわ。今からお昼よね？　学食で待ってて。わたしもすぐにいくわ』

何から何までとんでもないことを言っている槙坂先輩の声は、とても楽しげな調子に聞こえた。いったい今、彼女はどんな顔をしているのだろう。いつも絶やさない、あの大人っぽい微笑を浮かべているのだろうか。

『あ、そうそう』

と、思い出したように。

『ひとつプレゼントがあるの』

「プレゼント？」
『ええ。よかったらピクチャフォルダを見てみて』
そう言うだけ言って通話は切れた。
おかまいなしに沈黙した端末をしばらく呆然と見つめた後、僕は言われた通りピクチャフォルダを開いた。
「ああ、こういう顔か……」
フォルダの中には今日作成されたばかりのファイルがひとつ。カメラ機能を使った自分撮り写真だ。

フレームの中ではあの槙坂涼が、いたずらっぽい笑みを浮かべていた。

きっとそれはまだ誰も知らない顔に違いない。彼女がこんな表情もするのだと、いったい誰が想像するだろうか。
「まいったな……」
知らず僕はつぶやいていた。
（あの人に興味なんてなかったはずなのにな）
そのはずなのに。
「興味が出てきてしまったじゃないか」

第2話

槙坂涼に指示された通り学生食堂に行く。尤も、もとより昼食を食べに行くつもりではあったが。

食堂に入るとすぐのところに、自動販売機が4、5機並んでいて、僕はそれを見てある事件のことを思い出した。

それは去年、夏も終わって涼しくなりはじめた頃のこと。ある日、自販機全機に『故障中』の貼り紙が貼られていたのだ。皆、文句を言いながらその前を通り過ぎていた。――ところが、だ。自販機はどれも故障などしていなくて、僕が「これぜんぶ使えるみたいだけど？」と言うと、皆ようやくその事実に気がついたのだった。一気に自販機に群がる光景は、今でもはっきり覚えている。……にしても、ひどいいたずらをする奴もいたものだ。

さて、食堂を見回すと、まだ槙坂先輩はきていないようだった。あの人がいるとすぐわかるし、電話で言っていた「わたしもすぐにいくわ」という台詞は多少遅れるという意味合いを含んでいるようにも思える。

仕方ないので、僕は先にランチを買ってくることにした。

迷ったときの日替わりランチ。

考えなくてもメニューのほうで勝手に変わってくれるし、少ないながらも選択肢がある。毎日の昼食がマンネリ気味になってきたときに便利だ。ランチコーナーで、ライスとサラダ、本日のメインディッシュから一品、それにスープとをトレイに乗せて、テーブルへと向かう。

「おーい、藤間ー」

手を上げて僕の名前を呼ぶのは、さっき別れたばかりの友人だ。違う授業を受けていた別の友人と合流して、4人ほどの集団になっている。

「ケータイ見つかった？」

そばまでいくと、まずそう訊かれた。気にしてくれていたらしい。
「ああ、学務に届けられてたよ」
「そりゃよかった」
まったくだ。問題はあんなところに届けられることになった経緯のほうだが。
「で、なに突っ立ってんの？　座れよ」
友人は僕に促す。いつも一緒に食べているから、僕がいつまでも立ったままでいるのが不思議なのだろう。
「いや、今日はちょっと人と約束が……」
と、言ったところで食堂の空気が変わった。
出入り口は今の僕の向きからは背後に位置する。だが、振り返らなくても、何が起きたかはわかる。槙坂涼が入ってきたに違いない。彼女が現れるとどうしても目がいってしまうし、皆その動向が気になるのだ。
振り返れば、案の定。
そして、今日は珍しくひとりだった。……まぁ、当然といえば当然か。槙坂先輩はすぐに僕を見つけ、真っ直ぐにこちらにやってきた。
「改めてこんにちは、藤間くん」
「どーも」
例のいたずらっぽい笑みはどこへやら、年上らしい穏やかな微笑を見せる彼女。対する僕は、多少の警戒心があるせいか、ぶっきら棒。
先輩は僕と友人たちを交互に見た。
「お友達？」
「――の類似品だね」
せっかくそんな友達甲斐のないことを言ってやったのに、当の本人たちは槙坂涼がすぐ近くにいることで、それどころではないらしい。
「ちょ、藤間。お前、約束ってまさか……」

「ああ、そういうことらしいな」
尤も、こうなるに至る過程で、僕の意志がほとんど介在していないがな。
不意に友人が勢いよく立ち上がった。
「よ、よかったら俺もご一緒させてもらえませんか。俺、藤間君と親友でっ」
誰が親友だ。あと藤間君言うな気持ち悪い。
「ごめんなさい、今日は彼と大事な話があるの。遠慮してもらえると嬉しいわ」
だが、槙坂先輩は例の微笑でもってやわらかくそれを断る。しかも、さりげなく周りにも聞こえるボリュームで発音して、俺も俺もと待ち構えていた連中まで牽制してみせた。……なるほど。この手合いのあしらい方はしっかり心得ているらしい。
「は、はい。喜んでご遠慮します！」
何語だ、それは。
「ありがとう。……じゃあ、藤間くん。あっちのあいてる席にいきましょう？」
そう言って彼女は歩き出す。
「おい、藤間。あとでどんなこと話したかおしえろよ」
「……」
後に続く僕は友人のその言葉を背中で聞いたが、あえて無視することにした。
席を移る間、僕らはずっと周りから見られていた。しかし、それは好奇や羨望の視線とは違って、呆然と見送る種類のものだった。なぜ槙坂涼と僕の組み合わせなのか、まったく理解できないのだろう。無論、僕だって理解できない。
槙坂先輩はこういうことには慣れているのか、どんな視線であれ気にした様子はない。やれやれ、僕はできることなら騒ぎの傍観者でいたいのだが。
学食の最奥、壁際のテーブルに向かい合って座る。

なかなか不思議な感覚だった。あの槙坂涼が目の前にいるのだ。週に４つほど同じ授業を受け、よく遠目にその姿を目にしていた――いや、それどころかどこにいても目立つ、そんな美貌の彼女が、どういうわけか僕と一緒に昼食をとろうとしている。なんともおかしな話だ。

しかし、槙坂先輩はこちらの心中など知る由もなく、さっきまで肩に提げていたトートバッグから小さなランチボックスを取り出した。二段重ねにはなっているが本当に小さなランチボックスで、今僕が食べようとしているランチの半分の量もないのではないだろうか。それで足りるのかと心配になるが、きっと彼女にとっての適量がこれなのだろう。もしかしたらこういった不断の努力が、何かの結果として結実しているのかもしれないが。

ランチボックスに続いて、プラスチック製のケースが出てくる。フタを開ければそこには、短い箸とスプーン、フォークが並んで入っていた。彼女はそこから箸だけを手に取る。

「藤間くんはいつも学食なのね」

「まぁ」

「わたしも何度か食べたことがあるけど、口に合わなかったわ」

槙坂先輩はお気に召さなかった味を思い出したのか、眉根を寄せた。それから箸で自分の弁当からウィンナーを掴んで口に運び、満足げに小さく頷いた。弁当は自作なのだろうか。

「学食のメニューなんて所詮は安さと量が売りだ。僕だってそこまで美味しいと思ってるわけじゃない」

って、なんで普通の話をしているのだろうな。こんな日常会話がしたかったわけでもないのに。

「いくつか聞きたいことがある」

僕はサラダを二、三口食べて、多少空腹感がおさまったところで切り出した。

「どうぞ」

「僕のケータイについて」

「ええ」
なぜか楽しげに微笑む槙坂先輩。
間近で見る彼女は、本当に整った容姿をしていて、これがひとつしか年の変わらない先輩なのかと思うほど大人っぽかった。
「あれはあなたが盗った」
「もちろん」
出来のよい弟を見る姉のように、嬉しそうにうなずく。
「少し拝借して、わたしのアドレスを登録してから落としものとして学務課に届けたの。ちょっとしたいたずらよ。実害はないに等しいわ」
そして、己の窃盗罪について、悪びれる素振りもない。
実害はない？　携帯電話を失くしたときの僕の不安や、限りある容量への圧迫は？　と言いたいところだったが、まぁ、目くじらを立てるほどでもないか。
「なぜそんなことを？」
「この場をセッティングするためよ」
「だったら普通に話しかければいい」
あんな手の込んだことをする理由がわからない。
「何ごともインパクトが大事だと思うの。残念ながら“突然の電話”作戦は不発だったけど、でも、おかげでもっと面白いことを思いつくことができたわ」
今さら昨日の未登録の番号が槙坂先輩だとわかったところで驚きはしない。とっくに気づいていたことで、単に確認が取れたに過ぎない。
「インパクト、ね。僕には回りくどいことをしたようにしか見えないな」
「それも事をスムーズに進めるための布石。得たいものを得るための下準備よ。事実、藤間くんは電話に出てくれて、ここにもきてくれた。違う？」
「……まぁ」

確かに、思いがけず愉快なことをされて、槙坂涼に興味を持ってしまったことは否定できない。それを素直に認めるのは癪だし、本人には絶対に言いたくないが。
「にしても、よく僕のケータイを盗るなんて芸当ができたものだ。あなたは何をやっても人目を引くのに」
「ええ、でも、目立たないように行動するコツも覚えたわ。これくらいならいくらでもできるわよ」
「……」
納得だ。
「じゃあ、次の質問。……なぜ僕だった？　なぜ僕に声をかけようと思った？」
「そうね」
そう言って彼女は考えるポーズを見せるが、理由はすでに明確になっているはずだ。考えることがあるとすれば、それを出力するための言葉だろう。
「わたしと似ているから、でしょうね」
「似てる？　どこが？」
「ふたりとも名前に『真』の字があるわ」
そうして出てきたのがそれだった。
「なるほど。僕の中学のときの友達に槙真二っていうのがいるから、今度紹介しよう」
「ええ、ぜひお願いするわ」
僕の嫌味混じりの返答も、彼女は笑顔で受け流す。なかなかの難敵だ。
そこで会話は途切れ、しばらくの間、僕らは言葉もなく食事を進めた。安っぽいチキンソテーを頬張りながら考える。果たして本当に名前の字に共通点があるというだけで声をかけてきたのだろうか。まさかな。
と――、

「あなたっていつも退屈そう」
不意に槙坂先輩が言う。
「……僕は平和と退屈と本を愛する人間でね。そう見えたとしても、それは僕が望んでやっていることだ」
「いいえ、そんなことはないわ。退屈な毎日を楽しんでいるように見えて、その実、面白いことを探しているの」
「……」
「そして、面白くするためなら何だってする。できるだけ実害は少なく、自分は傍観者でいられるかたちで」
「それじゃ、まるで僕が愉快犯みたいだ」
「去年の秋だったかしら――」
先輩は僕の言葉の終わりに発音をかぶせてくる。
「ここの入り口の自販機に、壊れてもないのに『故障中』の貼り紙が貼られていたのは。
面白いいたずらをする子もいたものね」

「……」
いたずらをする子。
子。
犯人を指して『子』と、彼女は言った。ニュアンス的には年下を想定しているように聞こえる。
「そうそう。わたしがどの授業をとろうとしているかの情報に、嘘が混じりはじめたのも去年からだったわ」
去年。
僕がこの明慧大附属に入学した年。
「……何が言いたい？」
「さぁ？」
例の如く、笑って流す。

「……」
これは参った。
何が参ったかというと、僕が思っている以上に僕のことを知っているふうであることもそうだが、しかし、それより何より――、
「ねぇ」
と呼びかけられ、僕は考えるのを一旦やめる。
「わたしとつき合ってみる気はない？」
彼女は真っ直ぐにこちらを見て、そんなことを言うのだった。
警戒する。
昨日まで、いや、2時間前までの僕なら「はい」と言っていたかもしれない。向けられる微笑も、裏表のない澄んだものに映っただろう。だが、今はもう天使の表情をした悪魔のそれだった。
「ないね」
よって、それが僕の返事。
「振られちゃったわね。生まれて初めて」
にも拘らず、槙坂先輩はくすくすと笑う。
彼女ほどになると、告白なんていくらでもされるだろうし、自分からしても断る男なんていないのだろう。そんな百戦錬磨にとっては、一度の敗北など気にするほどのものではないということか。
「残念ね。藤間くんと一緒なら、毎日が面白くなると思ったのに」
「何を期待してるのか知らないが、あいにく僕はどこにでもいる冴えない高校生でね」
そう、問題はそれだ。
自販機故障中騒動を『面白いいたずら』と言ってしまう精神性と、目的のためなら人の携帯電話を無断拝借だってしてしまう感覚。常に面白いことを求め、そのためにはなんでもする――。ああ、そう

だ。確かに僕らは似ている。彼女だって最初からそう言っていた。
だからこそ、距離をおくべきだ。
「さて、話は終わりみたいだし、僕はこれで」
これ以上は僕を知られる。
「待って」
だがしかし、槙坂先輩は、トレイを持って席を立ちかけた僕を呼び止めた。
「何か？」
「まだわたしが食べ終わってないわ。置いてけぼりにされても寂しいじゃない？」
見れば小さなランチボックスには、まだ少し中身が残っていた。確かに彼女ひとりを残していってしまうのもひどい話ではある。仕方なく僕は、浮かした腰をもう一度下ろした。
槙坂先輩は先の話にはもう触れようとはせず、いつもの大人っぽい笑みを浮かべながら残りを食べている。振られた後どころか、仲のいい友達と食べているみたいな表情だ。僕は頬杖を突き、何を考えるわけでもなく、ただ彼女が食べ終わるのを待った。
やがて残すところ例のウィンナーひとつとなり――、
「藤間くん」
不意に名前を呼ばれ、先輩へと顔を向ける。
と、
「はい」
「むぐっ」
彼女は箸で掴んだそのウィンナーを、僕の口に突っ込んだ。一瞬、息が詰まりかける。
何をするんだ――そう言おうとした。
「お味はいかが？」
しかし、口の中にものが入っているせいですぐには発音できず、その隙に先に尋ねられてしまった。まるで得意料理を出したときの、自信ありげな顔だ。

「……まぁ」
僕は不貞腐れたみたいにして、渋々頷いた。
多少腹が立ったこともあって、肯定はやや消極的に。完全に否定しなかったのは、実際、シンプルながらスパイシィな味つけで美味しかったからだ。
「そう、よかったわ。今日はいつも以上にいい出来だと思っていたの」
なるほど。本当に自作の弁当だったのか。
「藤間くんはわたしの欲しい返事をくれるわ」
「どこが。ついさっき拒絶したばかりだ」
「ええ、それについてはむしろ望む以上のものだったわね」
さらりと言う。
「だって、あなたの首を縦に振らせる楽しみができたじゃない？」
「……」
いや、本当に参った。
確かに僕たちは似ている。でも、決定的に違う点があった。
僕は平和と退屈と本を愛している。そこに嘘はない。ただ、退屈な日常の中にスパイス程度に面白いことがあればいいと思っていた。対して彼女――槙坂涼は、もっと積極的に退屈から抜け出したがっているのだ。
「これから毎日が面白くなりそうね」
そう言って彼女は、天使の表情で微笑んだ。

第3話

教室に槙坂涼が入ってくるとすぐにわかる。その瞬間、空気が変わるからだ。

皆、今か今かと彼女の登場を待ちわび、彼女が現れると友達同士で何ごとかを囁き合う。「やっぱり槙坂先輩、いいなぁ」「今日もきれいだ」などなど。実際、大人っぽい整った容姿で、長い艶やかな黒髪を揺らす彼女は、注目を浴びるのに相応しい生徒だと言える。

今日も当然そんな感じで、僕は槙坂涼を見、そして、彼女を見た生徒たちの反応を見て楽しむ。

大教室だとたいてい彼女は、前から4分の1くらいの列の、黒板正面から左右どちらかに少しずれた位置に座る。その辺りが彼女にとって授業を受けやすい座標なのだろう。

そのはずなのだが。

今日は入ってくるなり僕を見つけると、一緒にきた友達と別れ、こちらに歩み寄ってきた。こっちくんなと思った僕の願いも虚しく、彼女は階段状になった席の通路側に座る僕の横に立った。

「こんにちは、藤間くん」

「どーも」

「隣、空いてる？」

「……」

空いていることは空いている。だが、それは友達とお互いのパーソナルスペースを侵害しないためにひとつ空けているのであって、本来の意味での空席ではない。そして、教室が混んでくれば、そこも詰めて座ることになる。

「もちろんです」

「どーぞどーぞ。こんなところですが」

どうやって追い返そうかと思っていたら、友人たちが勝手に返事をしてしまった。特に槙坂先輩が横に座ることになる浮田は全力でウェルカムだ。
「そう。よかったわ」
彼女は僕の後ろを通り、隣の席に腰を下ろした。
……近い。
先日、向かい合って昼食を食べたが、それ以上だ。肩と肩、肘と肘が当たりそうだ。
「高くていい眺め。でも黒板が遠いわ」
「ああ、黒板が見えないなら前へ行ったほうがいい。ぜひそうするべきだ」
「大丈夫よ。目はいいほうだもの」
思わず舌打ちしそうになった。
「ところで、今日は何を読んでるの？」
彼女の興味が、今度は僕が読んでいる本へと向かう。
「ディクスン・カー、『帽子収集狂事件』」
「乱歩が選んだ海外ミステリ１０作のうちのひとつね」
知っていたのか。意外に雑学持ちだな。
「先輩はあの作品の中でどれがいいと思う？」
「そうね。『ナインテイラーズ』かしら。ドロシー・Ｌ・セイヤーズの」
「いちばん新しい作品だな。僕は逆に最も古い、ガストン・ルルーの『黄色い部屋の謎』だ」
単純なのに盲点を見事についた、あの人間消失トリックには感動したものだ。１００年たった今でも、あのトリックを超えるものはないだろう。
「というわけで――残念。僕らは相性が悪いようだ。……どうぞお引き取りを」
直後、槙坂先輩がすっと立ち上がった。
まさかこれで本当に引き下がるつもりなのか――ちょっと驚いて

彼女を見上げると、ずいっと斜め上方から顔を寄せてきた。鼻と鼻がつきそうなくらいの至近距離。

「そうね。今日はここまでにしておきましょ。面白いことはゆっくり楽しまないともったいないわ。……またね」

そう僕にだけ聞こえるボリュームで言い――微笑む。

それから彼女は持ってきたテキスト類をまとめ、友達のところへと戻っていった。

「やれやれ……ぐえっ」

「お前お前お前ーっ。なんで追い返してんだよっ！？」

浮田だった。血の涙を流しながら首を絞められても困る。こっちだって都合があるんだ。

「いいよなぁ、お前。あんな間近で槙坂先輩に笑いかけられて」

「……」

バカめ。あれはファウストに契約を迫るメフィストの笑顔だ。

授業が終わり、教室移動。

明慧学院大学附属高校には４つの講義棟があり、その講義棟と講義棟をつなぐ道を歩いているときだった。

「真ってば真ってば真ってば」

後ろからきたやつに腕を絡め取られ、そのまま道を外れて芝生のほうへと引っ張り込まれた。

見れば僕の腕を取ったのは、ショートの髪をヘアピンで止め、おでこも広く露になった小柄な小動物系の少女――、

「なんだ、“こえだ”か」

名前を三枝小枝（さえぐさ・さえだ）という。普通なら小枝と書いて『さえ』と読むところを、『さえだ』と読む辺りが僕は気に入っている。生意気にも僕の名前を呼び捨てにしているが、まだ1年生、後輩である。

僕は一緒にいた友達から離され、こえだと芝生を歩く。

「見てたよ見てたよ」
「何をさ？」
「あの槙坂さんと仲よさそうじゃない」
やっぱりそのことか。
「そう言えばさっきの授業、こえだも一緒だったな」
「覚えとけよぉ」
頬を膨らませながら、僕の脹脛のあたりをローキック。わりと痛い。
もちろん、どの授業に誰が一緒か覚えているが、彼女のこういう反応が見たくて、ついついからかってしまうのだ。
「で、どうしたの？」
「別に。たいしたことじゃないさ」
わざわざ言うことでもないのだが。
「実は槙坂先輩に言い寄られてるって言ったら信じるか？」
「信じるわけないじゃーん」
「ま、普通はそうだな」
そのまましばらく黙って芝生を踏みしめ、歩を進める。
「えっと……」
と、こえだがただならぬ空気を感じ取ったのか、おそるおそる口を開いた。
「……マジ？」
「本気かどうかは本人に聞いてくれ」
「ええーっ」
盛大に声を上げるこえだ。
「大きな声出すなよ。うるさいやつだな」
「……う。ごめん……」
周囲の視線がこちらに集まり、しゅんとなる。基本的には見た目通りに小動物なのだ。
「もしかして、美沙希さんがらみ？」
「部分的には噛んでると思う」

こえだの口から出た美沙希さん――古河美沙希（こが・みさき）というのは、僕の中学時代からの先輩で、この学校では槙坂涼とは別の、知る人ぞ知る系の有名人である。ひと言で言うと情報屋、もしくは、便利屋だ。
「でも、基本的には、これは僕と槙坂先輩の話だ」
「なぁんだ。美沙希さんがけしかけたのかと思った」
「あの人はこんな遊び方はしないよ」
ていうか、美沙希先輩はこういうのはもう卒業している。
「で、どうするの？」
と、こえだ。
「何が？」
「だーかーら。槙坂さんから熱烈なアプローチを受けてるんでしょ？　真はどうするのってこと」
「ああ、そういうことか。決まってるさ。きっぱりお断りだ」
僕が好きなのは騒ぎの中心にいることではなくて、騒ぎを端から見ることだから――ともつけ加える。
「うわ。こんな大事なこと、そんな基準で決めちゃう？　なんか違わなくない？　それにさ、あの槙坂さんと関わってる時点で、もう渦中の人だと思うけどなぁ」
「……」
おそろしい話だ。
「おっと。あたし、こっちだから。……じゃあね、真」
「ああ」
片手を上げて応じてやるが、すでに走り出していたこえだは、こちらを振り返りもしなかった。
「やれやれ」
僕は深いため息を吐く。こえだの騒々しさと、彼女の指摘に。
渦中の人、ね。
面倒な話だ。

そうしてまた別の日、彼女はやってきた。

「隣、座っていい？」
「僕はふたつも占拠するつもりはないさ。そこは誰の席でもないから、好きに座るといい」
無礼にも本から顔も上げずに答えたのだが、槙坂先輩は気にした様子もなく隣の席に座った。
「今日は何を読んでるの？」
「夢野久作『ドグラ・マグラ』」
「日本が誇るアンチ・ミステリね」
よく知っている。一度彼女と真面目にこの手の議論をしてみたいものだ。なかなか面白いものになりそうな気がする。
「こういうものがミステリの本場イギリスではなく、日本やイタリアで発生したのは興味深いところだ。……ところで先輩は、アンチ・ミステリを数えるときは三大？　それとも四大？」
「そうね。わたしは四大とするべきだと思うわ」
「僕は『三大奇書』だ。竹本健治の『匣の中の失楽』は、中井英夫の『虚無への供物』の模倣さ。……というわけで、やっぱり僕らは相性が悪いようだ。どうぞ、お帰りはあちら」
僕がそう言うと、槙坂先輩はすっと立ち上がった。
「仕方ないわね。またくるわ」
ひとこと言い残し、席を離れる。
本日も素直に帰ってくれた。
勿論、この後、僕は周りに座る友人たちにボロカスにされたが。

さて、その授業があと10分ほどで終わって、そして、終われば待ちに待った昼休み――というとき。
スラックスのポケットの中で携帯電話が振動し、着信を伝えてきた。メールだ。
机の下でサブディスプレィを見る。
槙坂涼――
そう言えば、まだアドレス帳に残っていたんだったな。

端末を開き、メールを開封する。
『この後、お昼一緒に食べない？』
どうしたものかと悩んでいると、さらにもう一通送られてきた。
『授業が終わるまでに考えておくこと』
猶予は１０分。
僕はこのとき初めて、授業が長引けばいいのにと思った。

早く終われという多くの生徒の希望と、終わるなという僕の願いを裏切り、授業はチャイムと同時に終了した。
テキストをまとめ、階段状の通路を下りる。
と、そこに槙坂先輩が待っていた。
「どう？　考えてくれた？」
「まぁ、それくらいなら。……ただし、ＮＧワードが出たら退場だ」
「あら、何？　ＮＧワードって？」
彼女は首を傾げる。
「それは自分で考えてくれ。引っかかったらアウト」
「ゲームみたいで面白そう」
そう言ってどこか無邪気にも見える笑みを浮かべた。
弾む気持ちを抑えきれないのか、跳ねるような足取りで歩き出す彼女を僕は追う。そして、そんな僕らを周囲は呆然と見送るのだった。

「悪いけど席を取っておいてくれ」
学食に着くと、弁当持参の槙坂先輩に席の確保を任せ、僕は昼食を買うため一旦彼女と別れた。考えるのが面倒なので、日替わりランチのコーナーへ直行。ほとんど立ち止まることなくテキトーに皿をピックアップし、金を払って席のほうへと向かう。
槙坂先輩がどこにいるかは、彼女が手を上げて合図をしてくれた

のですぐにわかった。この前と同じ、壁際のテーブルだ。トレイを置いて向かいに座る。
「思ったのだけど――」
さっそく切り出してきた。
「この前と今日の質問、私の答えを聞いてからなら、自分の答えをいくらでも変えられるんじゃない？」
「だろうね」
彼女は例の小さなランチボックスをまだ開けていなかったので、僕も先に食べはじめることはしなかった。
「じゃあ、本当のところは？」
「『ナインテイラーズ』は僕も好きさ。いちばんとは言わないけど、秀逸な作品だ。乱歩が選んだだけのことはある。それから僕も『四大奇書』派だ。『匣の中の失楽』は確かに『虚無への供物』の模倣かもしれないけど、中井英夫に最大の敬意を表した素晴らしいオマージュだと思う」
「あなた、ずいぶんと天邪鬼ね」
珍しく拗ねたような先輩の口調が可笑しかった。
僕の返事を聞いている間に槙坂先輩はランチボックスを開けていて、僕は彼女と同時に食べはじめる。それに気づいて彼女は、僕に嬉しそうに大人っぽい笑みを向けてきた。
「それにしても――わたしのこと、そこまで嫌？　もしかして、もうつき合ってる子がいた？」
「今ごろ聞くか？　そういうのは最初に聞くべきだと思うが。……まぁ、特にはいないけど。そっちこそ大学生とつき合ってるんじゃなかったっけ？」
彼女に関しての尽きない噂の中にそういうのがあった。明慧大の医学部に彼氏がいるとか何とか。
「あら、藤間くんともあろう人がそんなのを信じてたとは意外ね。根拠のない噂だわ」
そして、やや声のトーンを落とし、

「もちろん、わたしが流したのだけど」
「！？」
危うく食べていたハンバーグを喉に詰まらせるところだった。
「因みに、方法は簡単。いくつかの教室の机に『槙坂涼は大学生とつき合ってる』って落書きするだけ」
「なんでまた、そんなことを……」
「面白いからに決まってるわ」
当然のように言う。
「すぐに広まって、わたしのところに帰ってくるの。本当なのって。わたしは『プライベートなことだから』と、答えを曖昧にする。いろんな反応が見られるわ」
彼女が言うには、尾ひれがついて大学生どころか社会人や他校の生徒に変わっていたり、どこそこのホテルなどと具体的な場所が追加されていたりするのだそうだ。デマゴギーの実験に使えそうな事例だな。
「ひどい話だ」
「藤間くんには言われたくないわ。それに、言っておくけど、個人名が出たときはきっぱり否定してるわ。特定の誰かに迷惑はかけたくないもの」
なるほど。最低限のルールは自分の中に設けてあるわけか。まったく、本当に誰かとよく似ているな。
「というわけで、わたしはフリーよ？　どう？」
「知ったことか」
「強情ね」
槙坂先輩はため息を吐く。
「ひとつおしえてあげる。あなたにとっていいことか悪いことかわからないけど」
それはまた微妙な情報だな。

「大きな声じゃ言えないから」
そう言って身を乗り出すので、僕も同じようにした。互いの吐息がかかりそうなほど顔を寄せ合う。
「わたし、処女（バージン）なの」
「ぶっ」
さすがにこれには咽て、咳き込んだ。
「やっぱり笑うのね」
「笑ってんじゃないっ」
どうやったらそう見えるんだ。
「そんなこと今言うことかよ」
「じゃあ、いつならいい？　ベッドに入る前？」
「……」
落ち着け。目の前にいるのは悪魔だ。そう思え。
「やはりこれは諸刃の剣ね。わたしを征服する喜びはあるかもしれないけど、あなたを満足させることはできないと言ってるようなものだもの。藤間くんはどちらが好み？　初めての女？　それとも慣れてるほうがいい？」
聞くかよ、そういうこと。
「いいのか？　そういう話題にNGワードが潜んでそうだけど？」
僕は強引に話を終わらせることにした。
「確かにそうね。……でも、こういうのもいいわね、緊張感があって」
楽しそうに笑ってから、槙坂先輩は続ける。
「じゃあ、ちょっと雑談。どうして明慧大附属に入ったの？」
「ずいぶんと普通の質問なんだな」
「お互いを知るため、かしら？」
その必要があるかはさておき、僕が話の腰を折って話題を変えさせたのだ。答えるのが筋か。

「ここってさ、日本の高校には珍しい単位制だろ？　好きな授業が取れて、それだけ多くの人間が観察できると思ったんだよ」
「あなたらしいわね」
「それと――」
と、勢いで口を滑らせ――やめる。
「あのね藤間くん、言いかけたことは最後まで言いましょうね」
槙坂涼が姉のような口調で注意した。
「……とある先輩を追って、ね」
「まぁ、そうだったの？　誰なの、その先輩って？」
「それは言いかけたわけじゃないから、これ以上言う気はないね」
自分の迂闊さを呪う。
「ま、先輩もよく知っている人、とだけ言っとくよ」
これはサービス。
気がつけば、トレイの上のランチはほとんど残っていなかった。話しているうちにけっこう食べていたようだ。
「いつの間にかずいぶんと話してたわね」
槙坂先輩も似たような感想を抱いたらしい。
「あまり気にしてなかったけど、NGワードは何だったの？」
「特には設定してないよ」
そんな面倒なことやってられるか。
「あら、意外に優しいのね」
「まさか。気分で退場させるつもりだっただけさ」
「意地悪」
彼女は頬を膨らませる。
だが、すぐに、
「でも、そういうところが好きよ。やっぱりわたしたち、つき合ってみるべきだわ」
だから僕はこう返す。

「NGワードだ。……どうぞご退場ください」

第4話

それはある日の昼休み、僕が今まさに学食に入ろうとしたときだった。

「おっし、真、ちょっとアタシと話そうか」

いつぞやのこえだ――三枝小枝みたく、腕に腕をからめてがっちりホールドしてきたのは、

「美沙希先輩」

「よっ」

かたちのいい猫目に、ざっくりしたウルフカットが男前な、古河（こが）美沙希（みさき）先輩だった。彼女は悪ガキみたいな笑みを見せる。

「話とはいったい？」

「それは食べながらだ。アタシもハラが減った。……おい、お前ら。こいつ借りてくぞ」

「「　どうぞッス。遠慮なくどうぞッス　」」

ここまで一緒にきた浮田をはじめとする友人たちは、口をそろえてそう言った。もとより友達甲斐のないこともあるが、この明慧大附属で美沙希先輩に逆らおうなどと思う生徒はそうそういない。

僕は連行されていく。

「なんだなんだ」「つーか、かわいそ」「何をやったんだ」と好奇と憐憫の入り混じる視線を浴びながら、学食内を引きずられる。間、二の腕で「あぁ、この人もいちおー女だったんだな」と実感していたが、いつまでもされるがままになっているわけにはいかない。

「先輩、こっちはまだ何も買ってないんですが」

「ああ、そうだったな。よし、とっとと買ってこい。席はアタシが取っといてやる。逃げるなよ」

「わかってますよ」

逃げるつもりもないし、その理由もない。

ようやく解放された僕は、丼コーナーで手早くカツ丼（味噌汁、

漬け物付き）を買って、美沙希先輩の待つテーブルへと向かった。
先輩は売店で買ったらしいサンドイッチやパンを広げ、缶コーヒーを開けているところだった。
僕は改めて自分が買ってきたものを見る。――カツ丼。そう言えば、2回ほど槙坂先輩と一緒に昼食を食べたが、どちらのときも日替わりランチだった。丼ものやラーメンみたいな庶民的なものではなく。案外、彼女の前では格好つけようと思っているのかもしれない。
逆を言えば、美沙希先輩の前ではその必要がないということでもあるが。
「どうした？」
「いえ、別に。……それで、話とは？」
僕は先を促す。
途端、先輩の目が獲物を捉えた猫のように光った。
「聞いてるぞ。槙坂とのこと」
さっそく最初のサンドイッチの封を開けながら切り出してくる。
「さすがですね。もうその話を聞きつけましたか」
「バッカ。アタシじゃなくても誰でも知ってるよ。けっこう噂になってる。最近よく一緒にいるってな」
「……」
どうやら前にこえだが言っていたことが本当になっているらしい。
槙坂涼に関わった時点で渦中の人、か。
「楽しそうじゃないか」
「学校生活を面白くするのに、そこまで体張るつもりはありませんよ」
僕はカツ丼に割り箸を突き刺しながら答えた。
知ってるくせに。
なにせこの古河美沙希という人は、僕の人生の先輩でもあるのだから。

彼女と出会ったのは、僕が中学2年のころ。
当時の僕は、世の中のすべてがくだらないものに見えて、心底退屈している嫌なガキだった。
そんなとき、ひょんなことで知り合った古河美沙希という人は言う。
「そーゆーのを中二病っつーんだよ。ついでに言っとくぞ。お前が思ってることは正しい。いいか、世の中ってのはホントに面白くないんだよ。くだらないんだよ。だったら、自分で面白くするしかないだろうが」。
それから僕は美沙希先輩に誘われ、学校でいろんな行事の運営に携わった。体育大会やクラスマッチの実行委員、弁論大会の運営委員、などなど。僕は次第にものごとを思い通りに進める楽しみを知っていった。
そして、先輩に誘われてやったのはそれだけではなく、それらを隠れ蓑にしてふたりでいろいろと毎日をコーディネイトしたものである。

「んで、槙坂はどうなんだ？　本気なのか？」
「さて、どうなんでしょうね」
少なくとも楽しんではいるみたいだが。
「ていうか、何を人伝に聞いたみたいな言い方してるんですか。そもそも槙坂先輩に僕のケータイ番号をおしえたのは先輩でしょうに」
「おう。残高１９０円の図書カードと交換でな」
「驚きの安さだ」
僕の個人情報はそんなに格安なのか。
遡れば、槙坂涼がなぜ僕の携帯電話の番号を知っていたかという謎が出てくるのだが、なんてことはない、目の前にいるこの人に聞けばいいのだ。
古河美沙希は知る人ぞ知る情報屋だ。
「〇〇君がどこでバイトしているか」とか「××さんが毎日どの電

車に乗っているか」とか、そういった情報を素早く提供してくれる。金銭での売買はせず、商品券や図書カードと交換で。一歩間違えたらストーカを生み出しそうな気もするが、その辺りは彼女の猫目が相手を見極めるので、問題は起こっていないようだ。
槙坂先輩もこの情報屋から情報を得たのだろうが、まさか僕と美沙希先輩につながりがあるとは思わなかっただろう。
「それはそうと、先輩はケータイ番号みたいな個人情報は扱ってなかったのでは？」
「まぁな。でも、あの槙坂涼がお前に興味をもってるんだぞ。こんな面白そうなことが他にあるか？　どーせ真だしな、楽しいことになりそうだったからおしえてやった」
この人の情報屋としてのモットーはかなり脆いようだ。
僕のケータイ番号は当然すでに美沙希先輩も知っているし、きっとその場でちゃっちゃとおしえてしまったのだろう。残高１９０円の図書カードと引き換えに。
情報屋をはじめてこういうのは卒業したと思っていたが、人間そうそう変わるものではないらしい。
美沙希先輩はテーブルの上の割り箸を手に取ると、それで僕の漬け物を勝手につまみ、ひょいと口の中に放り込んだ。……まぁ、いいけど。きゅうり嫌いだし。
それを見ながら、
「ああいう真面目な優等生タイプは、美沙希先輩は嫌いだと思ってましたよ」
「真面目？　どこが」
先輩は鼻で笑う。
「あれは明らかにアタシらの同類だろうが」
「……」
どうやら先輩はとっくに槙坂涼の性質を見抜いていたらしい。

曰く、「あれは自分のひと言や無言が、どれだけ回りに影響を与えているかわかってる。わかっててやって、その反応を見て楽しんでるんだ」。
見事な観察眼だ。まさにその通り。槙坂先輩も自らそう告白していた。
「それだから同じ匂いをかぎつけて、お前に興味をもったのかもな」
「たまりませんね。こっちは平和と退屈と本を愛する一介の高校生だというのに」
などと美沙希先輩に韜晦気味に言っても意味はないか。
そこでふと思う。
「彼女が本気かどうか、その辺りの判断材料は、むしろ先輩が持ってるような気がしますね。……先輩が会ったとき、彼女、どんな様子だったんですか？」
ぜひ知りたいと切実な様子だったとか、わかれば儲けものくらいの感じだったとか。そのときの様子でだいたいわかるのではないだろうか。
「アタシんとこにきたときか？」
んー？――と美沙希先輩は記憶の糸を手繰り、
そして、いきなり声を殺して笑い出した。口許に拳を当て、体を揺らす。
「何ですか、それ。いったい何があったんですか？」
「悪いが話せない。守秘義務ってやつだ」
そんなものあったのか、なんて言ったらぶっ飛ばされるだろうな。めっぽう喧嘩が強くて、すぐ手が出る人だし。
美沙希先輩はサンドイッチにパンふたつを完食し、缶コーヒーを飲み干す。
「ま、がんばんな。アタシも応援してるから」
「……」
嘘吐け、と僕は心の中で思う。
仮に本当だとしても、「どちらも負けるな」なんていう、ゆとり

倒しの小学校がやりそうな運動会の応援みたいなものだ。結局、この人は端で見て楽しんでいるだけなのだ。

それは翌日の昼休み、僕が今まさに学食に入ろうとしたときだった。

「さ、藤間くん、少しわたしとお話しましょうか」

いつぞやのこえだ、そして、昨日の美沙希先輩みたく、腕に腕をからめてがっちりホールドしてきたのは、

「槙坂先輩」

「こんにちは、藤間くん」

大人っぽい端整な容姿に長い黒髪が艶やかな、槙坂涼だった。彼女は、顔は笑っているけど目は笑っていない、みたいな笑みを見せる。初めて見る表情だ。果たしていきなりこんな笑い方をされるようなことを、僕はしただろうか。さっぱり覚えがない。

「僕は話などない」

「わたしにはあるわ。食べながらゆっくり話しましょう。……いつもいつも悪いのだけど、藤間くんを借りていくわね」

「「　どうぞッス。遠慮なくどうぞッス　」」

今日も今日とて一緒だった浮田をはじめとする友人一行は、槙坂先輩に微笑みかけられ、一も二もなく首を縦に振った。槙坂涼に笑顔でこう言われてダメと答えられる男はまずいないだろう。

僕は連行されていく。

浮田には「俺たちも後でお前に話がある」と言われた。悪いが僕にはない。

「なんだなんだ」「つーか、またか」「どうなってんだ」と好奇と羨望と妬みの入り混じる視線を浴びながら学食を横切る。間、二の腕には美沙希先輩とは段違いのやわらかい感触があり、おかげで振り解くタイミングを逸したまま、気がつけばテーブルまできてしまっていた。

「あら、藤間くん、お昼は？」

「問答無用でここまで引きずってきたのはそっちなんだが……いや、いい……」
自分の煩悩のせいで強く文句は言えず、僕は昼食を買うべくきた道をすごすごと引き返した。
丼もののコーナーに目をやり、麺類コーナーを睨む。
「……」
やめた。やはり今日も日替わりランチにしよう。どうにも槙坂先輩の前で庶民丸出しのものを食べるのに抵抗がある。１００歩譲ってもカレーだろう。しかも、カツカレー。向こうは実にささやかな弁当を食べているというのに。
ランチを買って戻ってくる。
槙坂先輩は例の小さな二段ランチボックスを自分の前に置いていたが、まだ手もつけずに僕を待っていた。
「で、話とは？」
「藤間くんって意外にモテるのね」
微笑みがデフォルトみたいな彼女が、珍しく不貞腐れたような表情をしていた。手ではランチボックスの蓋を開けている。
「いきなり何のことだ？」
それと『意外に』は失礼だ。
「この前、１年の女の子と歩いてた」
僕が一緒に歩くといえば、こえだだな。
「昨日は古河さんとお昼を食べてたわ」
「……」
見てたのか。まぁ、お互い昼食はここだからな。そういうこともあるか。僕も槙坂先輩の姿はよく見ていたし。
ふたりで一緒に食べはじめ、僕はひと口目を飲み込んでから答えた。
「下級生のほうは三枝小枝。通称こえだ。この春に知り合った、かわいい後輩だ」
「ずいぶんと素直な言い方をするのね。かわいいだなんて」

「実際そうさ。誤解を恐れず言うなら、僕は彼女に対して一定以上の愛情を持ってる。勿論、あくまで友人の範囲を出ないが」
そして、こんなこと本人に言うつもりもない。
「……」
ジトッとした視線が僕に向けられる。
「美沙希先輩については、あなたもよく知っているのでは？　僕のケータイの番号はあの人から教えてもらったんだろう？」
「あら、知ってたのね」
「知らいでか」
苦笑しながら言い返す。
とは言え、まぁ、知らない可能性もあるか。美沙希先輩が情報屋なのは影で有名なだけで、最後まで知らないまま卒業していく生徒も多いらしいし。
「確かに古河さんのことは知ってるわ。でも、わたしが知りたいのは、あなたと古河さんの関係なの。まさか何か調べてもらってたわけではないのでしょう？」
「その可能性はゼロじゃない」
今のところ美沙希先輩に世話になることはないだろうと思っているが、そうやって否定されるとそれを否定したくなる。
「あら、それならそれで興味があるわ。いったい何を調べてもらってたの？　わたしのこと？　だとしたら嬉しいわね」
「そんなことをする理由がない」
きっぱり否定する。
「わたしのことならわざわざ古河さんに調べてもらう必要はないわよ。藤間くんには何でも答えるもの。経験なし。男の子とつき合ったこともなし。安心して、過去はきれいなものよ。後は、そうね、スリーサイズは最後に測ったときが――」
「いや、言わなくていい」
僕は掌を向け、制する。
あまりの大らかさに軽い頭痛を覚えた。

「って、ちょっと待て」
今、何か変なことを言わなかったか。
「男とつき合ったことがないって！？」
「ええ、そうよ。いわゆる彼氏イナイ歴１７年、というやつね。仕方ないと思わない？　今までそういう男の子に出会わなかったのだから」
「この前、僕に言わなかったか、生まれて初めて振られたって」
彼女が僕につき合えと迫り、僕がそれを断り――それでも槙坂涼は笑っていた。初めて振られた、と。
「言ったわ。今まで男の子とつき合ったことがなくて、生まれて初めて交際を申し込んだら、見事に振られた。――矛盾はないわ」
槙坂先輩はさらりと言ってのける。
「……わかった。それについてはもう触れないでおく」
何で最初に選んだのがよりにもよって僕なんだ、という疑問とも文句ともつかないものはあるが。
「美沙希先輩は僕とは同じ中学でね、もう長いつき合いになる」
「藤間くんが追いかけてきた先輩っていうのは、古河さんのこと？」
「それは内緒。言いたくない」
それを言ってしまうと、よけいなことまで言わなくてはいけなくなる。
「……そういう点では槙坂先輩は運がよかった」
「どういうこと？」
彼女は首を傾げる。
「美沙希先輩は電話番号みたいな個人情報は扱ってないんだ。つき合いの長い僕のだから、面白がっておしえただけ」
残高１９０円の図書カードという格安で。持ち合わせがなかったらなかったで、きっとタダでおしえたのだろうな。
「世の中せまいわね」
「まったくだ」
感想を一致させ、ひと息。

「ま、というわけで、古河美沙希、三枝小枝の両名とは単なる先輩後輩の関係だ。先輩が思っているようなことはないよ」
「まるで浮気を疑われた男の弁解ね。少しはわたしの気持ちも考えてくれているということ？」
「……単に事実を説明しただけだ」
どいつもこいつも楽しそうで羨ましい限りだ。
「昨日の様子だと美沙希先輩もずいぶん面白がってたからな。下手すると今なら何でもおしえてしまいそうだな」
と、そこまで言ったところで、自分がよけいなことを喋ったことに気づく。
「そうなの？　じゃあ、今度は藤間くんがどこに住んでるか聞いてみようかな」
「バカ、やめろ」
思った通りの反応だった。
住所なんか聞いてどうするつもりだ。襲撃するつもりか？
「あら、どうして？」
無邪気に問い返してくるその危機感のなさに、僕は呆れてため息を吐く。
「言っとくけど、僕はひとり暮らしだ。そんなところにのこのこと……」
思わず言葉が途切れた。
槙坂涼が面白いものを見つけた子どものように、目を輝かせていたからだ。
「……」
「……」
「……おい」
しかし、僕の言葉に連動して、すっと目を逸らす槙坂先輩。
逃げるようにそっぽを向いたその横顔には、例の如く天使の顔をした悪魔の笑みが浮かんでいた。

第5話　その1

「いいぞ、こえだ、出してくれ」
「おっけー」
こえだの元気な声に遅れること数秒、僕が手にしたホースの先から水が勢いよく飛び出した。
ある日の昼休み。
今、僕が何をしているかというと、単なる花壇の水撒きである。
この明慧学院大学附属高校には、職員や来客が出入りする正門付近の目立つところに立派な花壇がある。四季折々の花を咲かせて目を楽しませてくれるが、その分枯らすと少々みっともないことになるので、水撒きは欠かせない。
蛇口をひねったこえだが走り寄ってくる。
「疑問なんだけどさ、なんで真がこの仕事やってるわけ？　なんかそーゆー委員とかクラブだったっけ？」
「んー」
僕は水を撒きながら返事をする。
「別に。僕が勝手にやりましょうかって進み出ただけ」
「うわ、もの好き」
こえだの感想は簡潔、かつ、明快だった。
確かに彼女の言う通りかもしれない。この仕事を買って出たのは入学してすぐのこと。未だかつてこんなことを自発的にやると言い出した生徒などいなかったに違いないと自分でも思う。
「ま、これも学校生活を楽しくするためさ」
そして、この春からはこえだを相棒にしている。週に一回、蛇口をひねって閉じるだけの簡単なお仕事ですと誘ったら乗ってきた。報酬は毎回ジュース1本だが、見ていて楽しいいじって愉快なこの小動物をつき合わせられるなら安いものだ。
「楽しく、ねぇ」

「何だよ」
何か言いたげなもの言いの彼女に、僕は水撒きを続けながら返事をする。
残念ながらこのホース、シャワーノズルなんてついていないから、うまく水を撒くためには指で先をつぶしたり振ったりして、小手先のテクニックが必要だ。
「だったらいっそのこと、槙坂さんとつき合えばいーじゃん。毎日楽しいと思うよ？　周りからは死ねや飛び散れやの大合唱だろうけど」
「僕はその状況で楽しめる気がしないね。……勿論、それがなくてもお断りだけど」
冗談じゃないね。
「いったい何が不満なんだよぉ」
「別に」
こえだに言っても信じないだろうが、僕と槙坂涼は本質的な部分で似ているのだ。一緒にいれば僕という人間を知られるし、理解される。それは口で言うよりも危険なことだ。
「そうだ、こえだ。お前、僕とつき合わないか？」
さすがに槙坂先輩も僕にカノジョがいるとなれば諦めるだろう。
「それってあたしに何かメリットあるかなぁ？」
男に嫌われる女の代表格みたいな台詞を、首を傾げつつ吐くこえだ。
「カレシがいるって友達に自慢できる」
「ちょっとお得感薄いかな。それに真だしなぁ」
ほっとけ。
「だったら毎日ジュースを一本奢ってやろう」
「おお、それはお得！　って、そんなので釣ろうとするなっ。真のバカ！」
こいつの場合、ノリツッコミなのか本当に釣られたのか、イマイチ判断がつかないな。

「真面目な話さ、あたしと槙坂さんじゃお話になんないじゃん。普通に考えて」
「そんな『普通』僕は知らないね。僕の中じゃこえだだっていいセンいってるよ。まぁ、胸がある分、多少天秤は向こうに傾くかもしれないけど――おい、水を止めるなよ」
急にホースから出る水が止まったので振り返ってみれば、こえだがホースをぽっきり折って、そこをハンドグリップみたいに片手で持っていた。水が堰き止められた水が溜まって、ホースが膨らみつつあった。
彼女は口の端を吊り上げて、ひきつった笑みを浮かべる。
「バカ、やめろ。ゆっくり離――」
「ふーんだ。一瞬でも喜んだあたしがバカだったっ」
こえだが手を離した。
途端、水はまさしく堰を切って流れ出し、その勢いはホースを握る手にまで伝わってきた。。
「うわ」
「わきゃ」
そして、暴れるホースは僕の手を離れ、水を撒き散らしながら断末魔の蛇のようにのたうち回る。すぐにそれはおさまったが、僕らが水浸しになるには十分だった。
「なんで手を離すんだよ、もー」
「お前が悪いんだろ」
僕はカッターシャツの袖で濡れた顔を拭う。まぁ、こっちも濡れているからあまり意味はないが。
と、そこであることに気づいた。
「こえだ、お前、意外と大人っぽいのつけてるんだな」
こえだのブラウスが濡れて、その下のものが透けて見えていた。レースの柄までばっちり。その品のあるデザインと彼女の子どもっぽい容姿のギャップが、僕としてはポイントが高い。
遅れてそれに気づいたこえだは、さっと両腕で胸の辺りを覆い、

真っ赤な顔で僕を睨む。
「真の、ぶぁかーッ」
そして、一拍おいて噴火。
この後、ホースを持ったこえだに追いかけ回されたのは言うまでもない。

翌日、僕はしっかり風邪をひいた。
出たい授業があったのだが、こんなふらつく頭ではむりそうだ。たぶん熱もあるのだろう。仕方ないので学校は休むことにする。
ふと心配になってこえだに電話をしてみたところ、あいつのほうはピンピンしていた。今日も元気に登校しているらしい。少しほっとした。考えてみれば、僕のほうが水をかぶった量は多いわけだしな。
朝はまだ風邪をひいた熱を出したという自覚が薄かったので簡単な朝食を作って食べたが、昼はさすがに億劫になって抜いた。高校に入学してからひとり暮らしで、病気だろうが何だろうが食事は自分で作るより他はない。母が言うようにハウスキーパーでも入れていればそうでもなかったのだろうが、まぁ、食欲がないから一緒か。
ひと眠りした後はベッドで本を読みながら過ごした。
そして、夕方。
マンションのエントランスのチャイムが鳴った。
僕はベッドから体を起こし、立ち上がる。まだ頭がふらつく感じはあるが、朝よりはよくなっているようだ。そのままインターフォンに出る。
「はい」
『おう、アタシだ。風邪ひいたんだって？　サエから聞いた。見舞いにきたから開けてくれ』
美沙希先輩だった。それは声だけでなく、映像でも確認できる。カメラの位置を知っている彼女は、しっかりこちらに不敵な笑顔を向けていた。

別にいいのに、見舞いなんて。とは言え、追い返すわけにもいかない。
「少し待ってください。……どうぞ」
手もとのパネルを操作してエントランスのドアを開ける。
美沙希先輩が上がってくるまで2、3分といったところか。今はパジャマ姿だが、ひと眠りして起きた後に一度着替えているし、相手は美沙希先輩だからもうこのままでいいだろう。
とりあえず髪にブラシだけ通したところで、今度は玄関チャイムが鳴った。
「はーい」
返事をして、ドアを開ける。

そこに槙坂涼がいた――。

「あら」
と、発音に笑みを含ませる彼女。
「パジャマの藤間くんもかわいいわね」
「……」
僕は黙ってドアを閉めた。
鍵もかけた。
待て。どうしてエレベータに乗ってここまで上がってくる間に美沙希先輩が槙坂先輩に変わってるんだ？
「なんで閉めんだ。開けろ、真」
ドア越しに今度は美沙希先輩の声。
「すみません、先に着替えたいのですが。僕の予想が正しければ、その必要があるかと」
「待てるか、バカ。開けねーなら壊す。そして、その後お前も壊す」
本気（マジ）だ。
ここまで言われたら開けるしかない。あの人はやると言ったらやる。ここのドア、無駄に立派だからいったいどれだけの修理費を取

られるやら。たぶん僕の修理費より高いだろう。
僕は渋々ドアを開けた。
ばっさりウルフカットと猫目の隣りに、清楚を絵に描いたような黒髪ロングのオトナ美人が並んでいた。――案の定だ。ふたりとも制服のまま。学校から直接ここにきたらしい。
「先輩、どうしてその人をつれてきたんですか。住所はおしえないでくださいって言ったじゃないですか」
そう。ちゃんと釘を刺しておいたはずなのに。
「おしえてないぞ。ついてくるかって聞いたら、行くって言っただけだ」
「……」
ダメだ。こと槙坂先輩がらみになるとこの人も微妙に敵だ。
「兎に角、上がるぞ。槙坂も入れよ」
勝手知ったる他人の家とばかりに、おかまいなしに中に入る美沙希先輩。学校指定のローファーは脱ぎ飛ばし、スリッパも履かない。こっちはほっといて――僕は槙坂先輩を見た。
彼女は自分も後に続いていいものか迷い、戸惑いの視線を僕に向ける。
「せっかくきてくれたのに追い返すほど冷たい人間じゃないつもりさ。……どうぞ。ろくでもないところだけど」
「ありがとう。嬉しい」
槙坂先輩は言葉通りに嬉しそうな笑顔で答えた。
玄関を上がり、僕が出した来客用のスリッパに足を入れて、脱いだローファーをそろえる。ついでに美沙希先輩のまでそろえた。
「すごい！」
リビングに這入ると、槙坂先輩は感激の声を上げた。
「な、すごいだろ」
先にきてすでにソファに座っていた美沙希先輩が、まるで自分の

ことのように自慢げに笑う。
僕がひとりで住むこのマンションは、いわゆる高級マンションと呼ばれるものだ。ひと続きになったリビングとカウンターダイニング付きのキッチンに、勉強部屋、寝室、書斎という間取りで、それぞれが非常に広い。僕は完全に持て余している。マンション自体も高層で、ここは28階。火事があればきっと助からないだろう。
「藤間くんの家ってお金持ちなの？」
「ま、いろいろと事情があってね」
僕はテキトーな言葉でお茶を濁す。
ひとり用のソファのほうに腰を下ろすと、この短時間のドタバタの疲れのためか、肘掛けに頬杖を突き、思わずため息を吐いてしまった。熱がまた上がるんじゃないだろうか。って、こんなことしてる場合じゃないな。
「そうだ、何か飲むものでも」
客がいるというのに、何をゆっくりしているんだ。
「いいから座ってろ、バカ」
「そうよ。わたしたち、お見舞いにきただけなんだから」
しかし、立ち上がりかけた僕を、ふたりが同時に制した。
「どうなの、風邪は」
槙坂先輩が美沙希先輩の隣りに座りながら聞いてきた。そっちのソファはゆったりとふたりが座れる。
「別に見舞ってもらうほど大袈裟な風邪じゃないよ」
「アタシもそうだろうと思ったんだけどな、槙坂が血相変えて飛んできたから」
血相を変えてだって？
僕は思わず槙坂先輩を見る。
「だって、藤間くん、ひとり暮らしだって言ってたから……」
後で聞いた話、彼女は教室に僕の姿がないのを見て、こえだに何か知らないかと尋ねたのだそうだ。当然、こえだは僕が風邪をひいたことを電話で知っているし、そう答える。そうして槙坂先輩は美

沙希先輩を訪ね、今ここに至ったというわけだ。
この様子だとずいぶん心配してくれたようだ。
「ありがとう。でも、朝よりよくなってるし、もう大丈夫だと思う」
いちおう礼は言っておかないと。
彼女はそれを聞いて、ほっとしたようだった。
「真、いろいろやること溜まってんじゃないのか？　流しに洗いものが残ってたぞ」
「そりゃそうですよ。日中寝てましたからね」
「よし。じゃあ、せっかくきたことだし、やれることはやっていってやるか」
また得意でもないことをやろうとする。人が病気になると張り切るタイプだな。
「洗いものに、後は洗濯か、たまってそうなのは」
「わたしも手伝うわ」
「ぶっ」
何を言い出すんだ。
「ちょっ、ちょっと待った！」
美沙希先輩はいい、美沙希先輩は。でも、あの槙坂涼に家事だって？　そんなことさせていい人じゃないだろ。しかも、洗濯なんてさせた日には、こっちが首を吊りたくなる。
「なに？」
「どうした？」
しかし、こちらの心中など知る由もなく、ふたりは待ったをかけた僕を不思議そうに見る。完全にやる気だ。果たしてこの厚意を無碍にしていいものか
「えっと、じゃあ、洗濯は美沙希先輩にお願いします」
「よし、任せろ。あんなもの洗濯ものと洗剤を放り込んで、スイッチを入れたらいいだけだろ」
むちゃくちゃ乱暴なことを言っている気がするが、大雑把には間違っていない。全自動だからな。しょせん家電なんて誰でも同じ結

果が得られるように開発されたものだ。美沙希先輩でも大丈夫だろう。
「槙坂はキッチンのほうな」
「ええ」
結局のところ、槙坂先輩に家事をやらせることには変わりないが、キッチン回りならまだ許容範囲だろう。僕は脱力したように、ソファに座り込む。
と、正面でも同じようにスプリングが軋む音。
見れば槙坂先輩も、一度は上げた腰をまた下ろしていた。じっと僕を見ている。向こうに行くんじゃなかったのか。
「洗濯、わたしにはやらせてくれないのね」
「当たり前だ。あなたにそんなことさせられないし、第一見られたくないものがある」
「わたしは気にしないわ」
「僕が気にする」
頼むからそこはこちらの気持ちを汲んでくれ。
「古河さんならいいの？」
「そりゃあ先輩でも多少抵抗はあるさ。でも、もうつき合いも長いからね」
お互いいろんな面を知って知られた仲だ。
「ふうん、そう」
と、槙坂先輩。
何を考えているのやら。深読みはしないでもらいたいものだ。
「おーい、槙坂ー」
脱衣場がある廊下のほうから美沙希先輩の声が飛んできた。
「お前、何か喰うモン作ってやれよ。まさか料理は苦手とか面白いこと言わないだろうな」
「大丈夫よ」
槙坂先輩も返事を返す。
「だそうよ。やらせてもらえないことを言っても仕方ないわね。そ

れに洗濯よりも料理のほうが藤間くんに喜んでもらえるわ」
「ものは考えようだな」
「何か食べたいものはある？」
頭を切り替えたらしい槙坂先輩は、立ち上がりながら僕に訊いてくる。
「ハッシュドビーフ。僕の好物だ。作れるものならぜひ作ってほしいね」
「そう。でも、それは今度きたときにするわ」
いや、もうこないでくれ。
「食べやすいものがいいわね。やっぱりおかゆか雑炊あたりかしら。キッチンのものは好きに使っていい？」
「ああ」
僕はなげやりに返した。
「あ、そうそう」
と、彼女はキッチンに向かいかけた足を止める。
「好きなものはハッシュドビーフ。覚えておくわ」
そう言って自分のこめかみの辺りを人差し指で2回叩き、例の大人っぽい笑みを浮かべた。
彼女のタフさには負けるな。
「……」
ハッシュドビーフ、ちょっと期待してみてもいいだろうか。

第5話　その2

「ごちそうさまでした」
程なく雑炊を中心にした温かい食事ができ上がり、昼を抜いたこともあって僕はそれを軽く平らげてしまった。
「お粗末さま」
リビングのほうから槙坂先輩の声。
「どうだった？」
「まぁ、ね」
癖なので言いたくない。言うまでもないというのもあるが。
僕はカウンターダイニングからふたりの先輩がいるリビングへ移る。ソファに座ると急に身体が重く感じられ、肘掛けに肘を突いて頭を押さえた。
「どうした、真」
「ちょっと。人疲れしたのかもしれません」
いちばんの原因は槙坂涼が自分のプライベート空間にいることだろうけど。どうにも緊張してしまう。
「そうか。じゃあ、アタシらはこの辺で帰るとするか」
「え？」
立ち上がる美沙希先輩の隣で、槙坂先輩が小さな声を上げた。
「ほら、槙坂。帰るぞ」
「で、でも……」
と、彼女は心配そうに僕を見る。
「僕なら大丈夫。おかげさまで食欲も満たされたし、もうひと眠りしたら治るさ。むしろそうしたいから帰ってくれると助かる」
これじゃ寝るに寝れない。
「だとさ」
「でも、藤間くんをひとりにするのは……。何かあったときのために誰かいたほうがよくない？」

槙坂先輩は一度美沙希先輩を見上げ、また僕に視線を戻す。
そんなに不安げな顔をしないでくれ。
「大丈夫だって。明日はちゃんと授業にも出る」
僕は肘を突いた手で頭を支えつつ、もう片方の手をひらひらと振った。大丈夫だから帰ってくれのボディランゲージ。
しかし、彼女は何も言わず、頑なに帰る素振りも見せない。
「よし、わかった」
代わりに言葉を発したのは美沙希先輩だった。こういう先へ進まないグダグダしたやりとりは、彼女の最も嫌うことのひとつだ。
「槙坂、お前は残れ。朝まで面倒見てやれ」
……は？
「何を言ってるんですか！？」
そんな結論があるか。
僕は思わず立ち上がったが、途端、頭がくらっときた。その様子を見てとったのか、槙坂先輩が僕を支えようと寄ってくる。
「ただし、レイプまがいに襲うのは禁止だからな。こいつが死ぬ」
「ええ、それは守るわ」
待て。そのツッコミどころだらけの台詞に、なんで普通に返事をしてるんだ！？
「先輩！」
「別にいいだろ、それくらい。槙坂だって何もしないって言ってるんだ」
そういう問題か。
「それに、アタシだってもしお前に何かあったらって心配してなくもないんだ。でも、槙坂がいてくれたら安心できる」
「お気持ちは嬉しいですけどね。第一、彼女だって泊まる用意なんてしてないでしょうに」
いや、それこそそういう問題じゃないな。

「あン？　女がひと晩泊まるくらいの準備なんて、その辺のコンビニでそろうだろ」
「……」
いや、大雑把な作りの先輩と違って、槙坂先輩は繊細にできてますから。
「じゃあな、槙坂。アタシの大事な舎弟を頼んだぞ」
「ええ」
ふたりはリビングを出ていく。帰る美沙希先輩を槙坂先輩が玄関まで見送るのだろう。
僕はソファに腰を下ろすと、背もたれに体を預けた。
「大丈夫？」
そこに槙坂先輩だけが戻ってきた。
美沙希先輩は帰って、今ここには僕と彼女しかいない。
「……バカじゃないのか、あなたは」
「藤間くんのことが心配だったのよ」
「それでもだ」
ひとり暮らしの男のところに残るだなんてどうかしている。僕は呆れてため息を吐いた――つもりだったが、それは妙に重いものになった。人疲れどころじゃなくなっているのかもしれない。
「寝たほうがいいわ」
「……言われなくてもそうさせてもらうさ」
まったく取り合おうとしない彼女を意味もなくひと睨みしてから、僕は立ち上がった。学校ならまだしも、こんな誰もいないところでふたりきりなんて、こっちの身がもたない。やはりまだ頭がふらつくが、それを槙坂先輩に悟られまいと無駄な努力をしつつ、隣りの洋間に向かう。
ドアのレバーを握り、そこで動きを止めた。――いちおう言っておかないとな。彼女が困るだろうし。
「……脱衣所の戸棚に新しいタオルとトラベルセットがある。バスルームともども好きに使ってくれ」

言うだけ言って、返事も聞かずに僕は部屋の中に入った。
絨毯を敷いた床に、ダブルベッドとサイドボード。ここが寝室だ。
少し前まで寝ていたベッドに倒れ込む。
「……」
ここに寝転がればすぐに眠れるかと思ったのだが――ドアの向こうにいる彼女のことが気になって、それどころではなかった。
槙坂先輩はこれからどうするのだろう。食事は？　どこで寝る？
食事はキッチンとそこにあるものを使えばどうとでもなるだろう。でも、どこで寝るんだ？　ソファか？
「まったく……」
と、仰向けに寝返ったところで、サイドボードに置いたままのケータイが着信メロディを奏でではじめた。誰だ？　美沙希先輩がこの状況を茶化すために電話でもかけてきたのか？　僕は手を伸ばして端末を掴み、サブディスプレイを見た。

槙坂涼――

それが送信者の名前。
「……」
確か隣りの部屋にいるはずだよな？
この家のことで何か聞きたいことでもあるのだろうか。それだったらここに入ってくればいい。……いや、さすがにそれは抵抗があるか。
僕は体を起こし、深呼吸をひとつして気持ちを落ち着けた。ついでに頭も冷やす。
「はい」
『……わたしです。槙坂です』
その声は少し弱気に聞こえた。
「どうした？」
『あの、怒ってる……？』

半ばむりやりにここに残ったことか？
「怒った」
当然だろう。いったいどれだけ危機感がないんだ。こっちの気も知らないで。
でも。
「でも、もう怒ってない。僕のことを心配してくれてるんだ。それを怒るのは間違ってる。悪かった」
『ありがとう。優しいのね。……でも、本当は別の気持ちもあったの』
別の気持ち？
『……古河さんへの嫉妬心』

「……」
納得した。だけど、僕はそれを笑い飛ばさなくてはいけない。
「馬鹿々々しいね。前にも言っただろ？　美沙希先輩は人生の先輩で、僕にとっては特別な人だけど、そういうのじゃないって」
『ここには何回きたの？』
きたことがあるのを前提にした質問だ。……当然か。あの人の態度を見ていたら、それくらいすぐにわかるな。
「そんなの覚えてないよ。最初のころはもの珍しさでよく遊びにきてたけど、最近はさっぱりだ。今日だってずいぶん久しぶりな気がする。何度もきてるけど、何かあったことなんて一度もないさ」
『信じていい？』
「僕としてはむしろ信じなくていい」
そう返すと、電話の向こうの槙坂先輩はくすりと笑った。
もうこの話はいいだろう。
ドア一枚隔てただけのこの距離で、なんでわざわざ電話を使って話しているんだろうな。
「それより、先輩、今日はどうやって寝るつもりなんだ？」

まぁ、ベストはこのベッドを使ってもらって、僕がソファで寝ることか。

『あら、藤間くんと一緒でいいわよ』

端末を耳に当てているせいか、それはまるで耳元で囁かれたようだった。

「は？」

『ダブルベッドでしょ？　わたし、体は細いし、迷惑はかけないわ』

「何を言ってるんだ！？　ていうか、なぜダブルだって知ってる！？」

覗いたのか、この部屋を。いつの間に。

『ただのカンよ。これだけ広いんだもの、置いてるベッドはダブルかなって思ったの。でも、その様子だと当たったようね』

槙坂先輩はまるで慌てふためく僕の様子が見えているかのように笑う。尤も、僕にも今の彼女がどんな顔をしているか容易に想像がつくが。

どこまでも意地が悪い人だ。

『藤間くん、わたしのためにベッドを空けようと思ったでしょ？ダメよ。あなたは病人なんだから』

そして、一転して年上らしい口調で僕を諭す。

『わたしはソファで大丈夫。こう見えても、どこでも寝られるタチだから』

「わかった。そうさせてもらう。……悪いけどこのまま1、2時間ほど寝させてくれ。起きたら来客用の布団を引っ張り出すから」

『じゃあ、その間お風呂でも入って待ってよっかな』

「……」

だから熱が上がりそうなことを言わないでくれ。

その夜、僕は夢を見た。
僕が寝ている寝室に誰かが入ってきて――それを僕が第三者の視点で見ているのだ。
これは、夢。
“彼女”はそばまでくると、額にかかった髪を掻き上げるようにして僕の頭を撫で、囁く。
「ねぇ。初めて会ったときのこと覚えてる？」
これは、夢……？

そして、翌日。
朝には熱もすっかり下がっていた。
槙坂先輩は朝の早いうちに、意外とあっさり帰っていった。まさかこのまま学校に行くわけにもいかないし、女性としては当然か。
次に会ったのは学校。午前中の休み時間だった。
今日は一緒の授業はない日なのだが、僕がいる教室までわざわざ訪ねてきてくれた。
「おはよう、藤間くん。昨日は風邪をひいたって聞いて心配してたの。もうよくなったみたいね。よかったわ」
これは完全に周りを意識した台詞だ。
それから彼女はさり気ない手つきで僕のネクタイを微調整しながら、僕にだけ聞こえる声で言う。
「実はあなたの家に忘れものをしてきたの」
「……わざとだろ？」
またくるための口実。
「まさか。わたしがそんな狡猾な女だと思ってるの？」
思う思わないじゃなくて、事実だ。

「わざと何か置いてくるつもりだったのに、そうするのを忘れてたの」

「わたしってうっかり屋さんでかわいいと思わない？」

そう言って槙坂涼は、例の如く天使の顔で悪魔の笑みを浮かべる。

なるほど。確かに忘れものだ。

「よくわかった。二度とこないでくれ」

第6話

ここ、明慧学院大学附属高校は単位制を導入している。
よって、生徒は好きな授業を自由に履修できて、その意思決定には様々な思惑が入り込む。例えば、学食が混むのがいやだからと昼休みの前後どちらかを必ず空けておいたり、朝が弱いからと2時間目以降からばかり入れたり。なので、登校時間も下校時間もわりと分散する。
そのはずなのだが――。
放課後。
「あら、藤間くんも今帰り？」
その人とロッカーの前でばったりと会った。
振り返ればそこに立っていたのは、黒髪ロングで清楚を絵に描いたようなオトナ美人――槙坂涼だった。
周りの視線を浴びつつも、どこ吹く風で立っている美貌の先輩。
そんな彼女を見て僕は苦虫を噛み潰したような顔を作る。
「あなたは今日は5時間目までのはずでは？」
今は6時間目終了後。本来ならば彼女は帰っているはずだ。
「嬉しい。わたしのスケジュールを覚えてくれてるのね」
「……」
しまったな。予想外の遭遇に口を滑らせたか。
「できるだけあなたに会わないようにと思ってね」
「ふうん、そう」
と、槙坂涼は余裕の笑みを浮かべる。
「いちおう藤間くんの質問に答えると――少し用があって図書室で時間をつぶしてたの」
「だったら、その用とやらをとっとと済ませるといい」
「そうするわ」
そう言うと槙坂先輩はすっと距離を詰めてきた。

「せっかく偶然会えたのだから、よかったら一緒に帰らない？」
「……」
きっとこの話の流れは、彼女としてはおかしくないのだろうな。
槙坂先輩が僕のネクタイに触れた。
目線よりもやや低い位置に彼女の艶やかな黒髪がある。そして、香水かオーデトワレだろうか、程よく甘い香りが僕の鼻を挑発的にくすぐってくる。この距離になって初めてわかる上品な香りだ。果たして、この学校で何人がこのことを知っているだろうか。
最近、彼女はよくこうする。僕のネクタイを直してくれているのか、単なる手遊びなのかは知らないが。ただ、面白い状況だと思う。彼女がその気になれば僕の首を絞めることができるのだから。もしかしたら僕の返事次第では、本当にそうするかもしれない。
例えば、こう返したらどうだろう。
「悪いが返事はノーだ。生憎、今日は帰りに本屋に寄るつもりでね」
「それくらいならつき合うけど？」
さすがに槙坂涼はこんなものでは崩れないようだ。
「それならいいが、僕の邪魔はしないでくれよ」
「もちろん。そんなことはしないわ。でも、よかったらわたしのほうにもつき合ってくれる？」
「どこに？」
槙坂涼が学校帰りに寄るところ。興味があるな。
「そうね、その辺りをぶらぶらして、その後わたしのお気に入りのカフェに寄りましょう？」
「待て。それじゃ、まるで――」
「デートみたい？」
僕の言葉を先回りして、彼女はくすくすと笑う。
「かもしれないわね」
「……」

さては最初からそのつもりだったか。
とは言え、今さら前言撤回するのは主義じゃない。それに学校の外での槙坂涼を見るいい機会でもある。
「おーい、藤間、帰……おわっ。槙坂さん！？」
そこに現れたのは浮田だった。
こいつとはついさっきまで同じ授業を受けていて、ここまで一緒に戻ってきた。自分のロッカーで荷物をまとめてこっちにきてみれば、憧れの先輩がいて驚いたというところだろう。
「せ、先輩も今お帰りですか？」
「ええ、そうなの」
槙坂先輩は僕から離れ、浮田に微笑みで応えた。

「そうしたら藤間くんとばったり会って、せっかくだからデートに誘ったところ」

「おい」
「なっ！？」
お、お前ぇ……――と、かすれた声で浮田。そんな恨みがましい視線を向けられても知らん。僕が言い出したことじゃない。
一方、僕の恨みがましい視線を槙坂先輩は、例の天使の顔をした悪魔の笑みで受け流した。
「あ、でも、」
そして、ふいに愁いを帯びた思案顔になる。
「お友達がいるなら遠慮したほうがいいのかしら？」
「どーぞどーぞ」
タイムラグなしで浮田は答えた。なんとも単純なやつ。槙坂涼にとってこれほど扱いやすい人間もいないだろう。
こうして僕は槙坂先輩と一緒に帰ることになった。

「ひどい話だ」

歩きながら僕はぼやいた。
「やつとの友情にひびが入ったらどうするつもりだ」
「安心して。藤間くんの生活や人間関係を壊す気は毛頭ないから」
本当かよ。槙坂涼と関わるようになってから、僕の生活は乱れっぱなしなんだがな。
「もし仮に何かを失ったとしても、それ以上のものを与えてあげる自信があるわ」
そう彼女はしれっと言う。
――槙坂涼と並んで最寄りの駅へと歩く。
周りには同じように6時間目まで授業を受けていた生徒が下校していて、皆一様に駅を目指していた。その中にあって槙坂先輩は憧れの眼差しを向けられ、僕には羨望と嫉妬の視線が浴びせかけられる。槙坂涼を独占しているのだから当然だ。尤も、最近ではこれにも慣れてきて、まぁ、意外と悪くはない気分だ。
「お友達といえば、」
と、槙坂先輩。
「この前、三枝さんと話をしたわ」
「こえだ？　らしいね」
僕が熱を出したときのことだ。姿の見えない僕を心配して、彼女はこえだに声をかけたのだという。
「なかなか面白いやつなんで、よかったら仲よくしてやってくれ」
「わたしはいいけど、向こうにその気はあまりないみたいよ」
「は？」
彼女の思わぬひと言に、僕は間抜けな発音をする。
「そうなのか？」
誰とでも仲よくなれるやつだと思っていたが。
「先輩、こえだに何かしたんじゃないのか？」
「かもしれないわね」
彼女は苦笑する。――それは肯定だろうか。
「何をしたか知らないが、見た目も性格もかわいいやつだし、ノリ

もいい。ああいう元気なのがひとりくらい近くにいてもいいと思うんだがな」
「……悪いけど、わたしもその気がなくなってきたわ」
「……」
横目で隣を見れば、そこには心なしか頬を膨らませ気味の槙坂先輩の姿があった。こえだの何が気に入らないんだろうな。
「あの子、あなたのことを『真』って呼び捨てなのね。よくないんじゃない？」
「別に。気にするほどのことじゃないさ。あいつが敬意の欠片もなく僕のことをそう呼んでるなら兎も角、そうじゃないのはわかってるんだ。呼称になんて拘らないよ」
確か、僕の呼び方なんてテキトーでいいぞ、とこちらから言ったはずだ。
「そういうあなたはわたしに対して敬意があまりなさそうね。わたしのほうが年上なのに」
「こう見えても人を見る目はあるのさ」
「生意気な後輩。……悪くはないけど」
そう言って槙坂先輩は機嫌のいい猫みたいに笑う。
「それにしても藤間くん、ずいぶんとあの子に甘いのね」
「そうか？」
己を顧みるに――、
「ま、こえだのことは気に入ってるからね。そういう部分はあるかもしれない」
「ふうん」
と、槙坂先輩はわずかに思案。
「わたしも真って呼ぼうかしら」
「なら僕は涼と呼ぶことになるな」
「あら、そうなの？　わたしはそれも大歓迎よ、真」
「僕はぜんぜん大歓迎じゃないんですよ、槙坂センパイ」
気がつけば前方に駅が見えはじめていた。

本屋に行くのはやめることにした。
わざわざ今日行かなくてはいけない強い理由もなく、現状、優先順位は低いといえる。ならば時間はもっと有意義なことに使うべきだろう。
――そうして今、僕たちはカフェにいた。
槙坂先輩のお気に入りだというそこは、彼女が足を運ぶに相応しい上品な内装をしている。場所は一部の情報誌が好きそうな言葉を使うなら『隠れ家みたいな』というやつで、閑静な住宅街の一角にあった。道々聞いた話では若い夫婦が経営しているのだとか。店内を見回してみれば、そう多くない席は半分も埋まっていなかった。
……これで大丈夫なのだろうか。
「ここへはよく？」
「時々。ひとりになりたいときにね。学校の友達にはおしえてないわ」
学校じゃ行く先々で何かと注目される身だからな。同情する。
槙坂先輩がこの上品な店内でコーヒーを飲んでいる姿か。絵になるな。そんなときの彼女は、ひとりで何を思ってカップを口に運んでいるのだろうか。
「だから、藤間くんが初めて」
「いいのか？　僕が誰かに言うかもしれない。我らが槙坂先輩御用達の店だって」
「大丈夫よ。まだいくつかこういうお店を知ってるから」
彼女はどこかしら自慢げに言う。この手の店を探すのが好きなのかもしれないな。
そこでコーヒーが運ばれてきた。槙坂涼のお薦めであり、この店自慢のオリジナルブレンドコーヒーだ。僕はまず香りを楽しみ、それからブラックのままでひと口飲んだ。なかなかにいける。
「本屋、寄らなくてよかったの？」
彼女はコーヒーフレッシュを垂らしたカップの中身をスプーンで

かき混ぜながら僕に聞いてくる。
「強いて何か欲しいものがあったわけじゃないからね。行くのはいつだっていいさ」
「残念ね。藤間くんがどんなコーナーを見て回るのか興味があったのに」
口では残念と言いつつ、実に楽しそうだ。
言っておくが僕は本を見て回るのにこそこそしなくてはいけないようなことは何もない。ただ、横に槙坂涼がいれば多少は気取るかもしれないが。
「でも、おかげで時間に余裕ができたわ。これからどうする？」
「どうするも何も、ここでゆっくりするんじゃないのか？」
何のために本屋に寄るのをやめたと思っているんだ。
が、しかし、彼女は。

「わたし、また藤間くんの家に行きたいわ」

「……」
またどきりとするようなことを。僕は努めて平静を装い、言い返す。
「……二度とこないでくれと言った」
「そうだったかしら？」
だが、それにも大人の笑みで惚けるだけ。
「そうそう、あなたの好きなハッシュドビーフも家で練習してみたの。きっと満足してもらえると思うわ」
「食べもので釣ろうとするな」
僕は子どもか。
「わたしはもっと別のもので釣ろうとしてるのよ？　でも、わかってもらえないんじゃわかりやすいもので釣るしかないじゃない？」
「……」
いったい最初の餌は何だったのだろうな。

「あの家のキッチン、とても使いやすくて気に入ったわ。あそこならもっと楽しんで料理ができそう」
さっきまで危ない発言をしていたと思ったら、今度は一転してこれだ。
そう言えばこの前うちにきたとき、夜と翌日の朝に簡単な食事を作ってくれたんだったな。
「想像した？　わたしがキッチンに立つところ。いやらしい」
「あのな……」
少しもの思いに耽っただけで、すぐにその隙を突いてくる。彼女と話すときは常に油断ができない。
「ま、想像というか、思い出しはしたさ。僕はいつもテキトーな料理しか作らないからね。立派なシステムキッチンも宝の持ち腐れ。あなたみたいな人が使うのがいちばんいいんだろうな」
カウンターダイニングもひとりだとバカみたいだしな。誰か作ってくれる相手がいて、料理が出てくるのを待つだけの身なら楽だとは思う。
「やっぱり藤間くんの家ってお金持ちなの？」
それは前にもされた質問だな。まぁ、隠すようなことでもないし、槙坂先輩には知っておいてもらってもいいかもしれない。
僕はコーヒーを飲み、間をとってから答える。
「金持ちなのは僕の父親さ」
その微妙な表現に、槙坂先輩はかすかに首を傾げるながらこちらを見た。
「父は地位とお金だけは持っている人でね」
名誉については知らないが。
「母はその愛人で、僕はそのふたりの間に生まれた子、いわゆる庶子ってやつだ。父は――いいのか悪いのか、愛人にも家族と同じように愛情を注ぐ人らしくて、僕にも惜しみない援助をしてくれるんだ。あのマンションもそう。知っての通り多少過剰なところはあるが」

高校生のひとり暮らしに似つかわしくない高級マンションには、さすがに苦笑せざるを得ない。
なお、ふたりが出会ったのは、母が父の経営するホテルでフロント係をしていたのがきっかけらしい。母が愛人なのは公然の秘密だが、おかげで父の影響力もあって今はフロントマネージャにまで昇格し、男勝りの仕事ぶりを見せている。
「そんな顔しないでくれ」
向かいで少し困ったような顔をしている槙坂先輩に僕は言う。
「誰しも大なり小なり持ってる家庭の事情さ。気にしなくていい」
「え、ええ」
彼女は動揺したのか、気持ちを落ち着かせるようにコーヒーを口に運んだ。
「でも、どうしてそれをわたしに？」
カップを置き、問う。
「さぁ？　単なる気まぐれさ。ひた隠しのするほどのことじゃないしね。美沙希先輩はもう知ってる。こえだにはまだだけど」
「じゃあ、今のわたしは三枝さんと古河さんの間くらい？」
「あなたはもっとよく自分を知ったほうがいい」
そんなわけないだろう。
「そう。藤間くんのところは今日はダメなのね」
話は戻り、彼女は残念そうにそうこぼす。ダメなのは今日だけじゃないというのは、きっとわかっていて無視しているのだろうな。
「じゃあ、わたしの家に行く？」
「大丈夫か？　まだ動揺してるんじゃないか？」
「失礼ね。正気よ」
なら、なおのことタチが悪いな。
「近いわよ？」
「誰も聞いていない」

「でも、わたしの家も知っておいてもらわないと。病気のときに飛んできてもらえないじゃない」
つまり、彼女が倒れたら僕が看病しにいくわけか？　冗談じゃない。
「親がいるだろう」
「父は当然勤めに出てるし、母も自分の絵画教室を開いていて、あまり家にいないの」
ああ、でも――と、つけ加える。
「先の話は兎も角、今日は母も早く帰ってくる日だから、今ごろはもう家にいるわね」
「それは残念」
勿論これは嫌味だ。僕はわかりやすく、わざとらしいほど無感情に発音する。
「わがままな子ね。あなたの家もダメ。わたしのところも嫌。いったいどこだったらいいの？」
「どっちも嫌に決まってるだろ。せめて外にしてくれ」
わがままはどっちだ。
しかし、僕のその返事を聞いて、槙坂涼は笑みを浮かべた。きっとファウストがサインした瞬間のメフィストの顔はこんなだったに違いない――そんな笑みだった。
「なら決まりね。今度は休みの日にちゃんとしたデートをしましょ」
……ああ、なるほどな。彼女がメフィストなら、愚かなファウストが僕なのは当然の配役か。
悪魔め。
とりあえずテーブルの上に自分のコーヒー代だけを置いて立ち去りたいところだが、たぶんそれは根本的な解決になっていないのだろうな。

クリスマスSS

「これでどう？」
いつもの如く階段教室の通路側の席に座る僕の前に、黒髪美人の上級生・槙坂涼が何かを置いた。友人たちとの会話と読書をやめ、本を閉じてそれを見てみる。――　一枚の紙だった。
「何だ、これは？」
「あのね藤間くん、そういう質問をする前にまずよく見ましょうね。そんなに難しくないから」
清楚を絵に描いたような槙坂先輩は、出来の悪い弟に言い聞かせるように、大人っぽい笑みとともに優しくそう言った。僕は改めてその紙に目をやる。
それは大学の合格通知だった。
しかも、受験生なら誰でも知っているような有名難関校。果たして、この明慧学院大学附属高校の過去１０年の卒業生の中に、そんな超一流大学の合格者がいったい何人いただろうか。おそろしいことに、それを彼女は突きつけてきたのだ。
「おめでとう。これでエスカレータ組と同じく受験勉強から解放されて、存分に遊べるというわけだ。ぜひ僕にかまわず、目いっぱい遊んでくれ」
「あら、藤間くん。もうあの約束を忘れたの？　そんなに前のことじゃないはずよ」
「……」
さて、何だっただろうな。
「あれは今月の初め、わたしがクリスマスは一緒に過ごしましょうと提案したときのことよ。あなたは、受験生がそんなことしてていいのか、そんなのは合格通知をもらってからにしろと、そう言ったわ」
そして、槙坂先輩はそこで一拍。

「ちゃんと合格通知をもらってきたわ。約束通りこれでクリスマスはわたしにつき合ってくれるわよね？」

「……」

ちっ。やっぱり覚えてたか。

僕もあの台詞の後、これは失敗したなと後悔した。あの槙坂涼ならすぐにでも推薦入試で合格をもぎ取ってきかねないと思ったからだ。成績優秀なのは誰もが知るところ。学校を選ばなければ絶対どこかに合格するし、明慧大へ行くことを望めば成績優秀者上位数名にだけ許される無試験合格だ。そして、実際こうして僕の前に合格通知を持ってきたわけだ。まさかこんな難関校とは思わなかったが。

とは言え、こっちも約束を忘れていたわけではない――というのは実はおおいにひかえめな表現なのだが、やはり素直に認めるのは業腹だな。

僕はため息をひとつ。

「約束？　悪いが僕はそんなつもりで言ったわけじゃない」

「わたしはそう受け取ったわ」

「……」

「……」

お互いの主張を込めて視線をぶつけ合う僕たち。

浮田などは「お前と槙坂さんって、時々見つめ合ってるよな」などと言うが、バカめ、これは正しくは睨み合っているというのだ。

「それに、あなたには申し訳ないが、実はもうどうするか決めてあるんでね」

「そうなの？」

「ああ。ただし、正直に言おう――まだ決定じゃない。これから声をかけるところなんだ」

「わたしを優先する気はないの？　誘ったのはこちらが先よ？」

「ないね」

僕はきっぱりと言う。
「ただ単に僕がもたもたしていただけで、これは前から決めていたことだ」
「ふうん、そう」
と、向けてくる眼差しは明らかに僕の嘘を見抜いていた。しかし、ここでそれを指摘しないのが槙坂涼だ。彼女はここからさらに次の手を打ってくる。
「じゃあ、こういうのはどう？　もしうまく予定が決まらなかったときでいいわ。そのときはわたしとクリスマスを過ごしましょう？」
槙坂先輩はやや大きな声で言い、おかげで周囲がざわつきはじめてしまった。きっと周りには彼女の台詞はひかえめな提案に聞こえただろう。だが、僕にとっては違う。これは完全に宣戦布告。勝負だ。
「……いいだろう」
「決まりね」
彼女は微笑み、そして、ぐっと顔を近づけてきた。
鼻先が触れ合いそうなほどの、至近距離。

「猶予は明日の昼休みまでよ」

「……」
僕にだけ聞こえる声で囁き、槙坂涼は去っていった。
ほら見ろ。やっぱり宣戦布告だ。
とりあえず、なりゆきと勢いと意地でこんなことになってしまったが、考えてみれば僕が声をかけられる相手は情けないことにそう多くない。まぁ、がんばってみるか。かたちだけでも。
そのひとりが確かこれからの授業で同じはず。
そう思って教室内を見回し――その小動物みたいな小さな背中を見つけた。この授業の後さっそく誘ってみるとしよう。

「こえだ」
授業が終わった後、僕は教室を出たところで三枝小枝（さえぐさ・さえだ）――通称こえだを呼び止めた。
ショートヘアを髪留めで留めて、おでこも広く露になった顔が振り返る。
「ん？　なに？」
「ちょっといいか？　話があるんだ」
「歩きながらでいいんなら。……ごめん。先いってて」
こえだが一緒にいた友達に断り、僕らは彼女たちから離れていくようなコースで歩いた。
講義棟を出て、冬の空の下を行く。
「なに？　話って？」
「こえだ、お前、クリスマスは空いてるか？」
「うわ、本当にきた！？」
直後、こえだが驚きの声を上げて立ち止まってしまった。隣りを歩いていた彼女の姿が視界の隅から消え、僕も遅れて足を止める。
「なんだって？」
「う、ううん。何でもない」
彼女は慌ててぶんぶんと首を横に振り、ちょこちょこと駆けてきた。僕もそれにタイミングを合わせるようにして歩き出す。
「ど、どーせ真のことだから、槙坂さんから逃げるためにあたしを誘おうって魂胆だろー」
「話が早くて助かるね」
彼女は僕と槙坂涼との関係を正確に把握している人物のひとりだ。
「確かにそれも3分の1くらいはある」
「残りの3分の2は？」
「いくら槙坂先輩から逃げるためとはいえ、好きでもない女の子に声をかけたりはしないってこと」
「あ、そうなんだ。ふーん……」
「……」

「……」
それきり会話が途切れた。
しばし歩き、どうにもこえだの様子がおかしいような気がして隣りを見てみれば、ちょうど彼女が顔を赤くしてうつむくところだった。こんな反応をするとは少々意外だ。これは収穫だな。
「こえだ？」
「……」
彼女はなぜか怒ったように頬をふくらませながら、ゆっくりとこちらを見た。
そして、おもむろに僕に脹脛の辺りに蹴りを一発。
「痛いだろ」
「ふんだ。お生憎様、あたしはもう友達と約束があるの。タラシの真はいいかげん観念して、クリスマスは槙坂さんと楽しく過ごせばっ」
ついでに、べー、と舌を出して走り去る。子どもか、こいつは。
僕は小さくなっていくこえだの背中を見送った。
「観念、ね……」
あまり早々に観念はしたくないな。すぐに白旗を揚げるのは主義じゃない。特に槙坂涼相手には。

翌日の午前中。
「先輩」
「あン？」
僕はもうひとりアテにしている人をつかまえた。ざっくりしたウルフカットが男前な古河美沙希（こが・みさき）――美沙希先輩だ。
本当は次の休み時間にでも電話で連絡を取るつもりだった。というのも、僕の記憶によれば美沙希先輩はさっきの時間は体育のはずで、今はまだ電話には出ないだろうと思っていたからだ。ところが、偶然ばったり会った。僕の記憶を裏づけるかのように彼女はジャージ姿。男前度増量中だ。

「話があります」
「おう。いいけど、クリスマスならつき合わないからな」
「……」
話ははじまる前に終了した。
まさか、じゃあこれで、というのも失礼なので、体育館方面へと一緒に歩く。更衣室が体育館の中にあるのだ。
「何か予定でも？」
「バイトだよ、バーイート。金に困らないお前と違って、思い切り遊ぶためには働かないといけないんだよ。アタシは」
情報屋で稼いでるくせに。いったい何に使ってるんだか。というか、受験はどうなってんだ？
「お前、涼から誘われたんだって？」
美沙希先輩はくつくつと笑いながら言う。
彼女は槙坂先輩のことを『涼』と呼ぶ。いつの間にか仲良くなったらしい。性格に共通点がないから、そんなことにはならないと思っていたのだが。世の中わからないものだ。しかも、時々結託するのだから質が悪い。
「ご存知でしたか」
まぁ、知っていて当然か。一日あれば美沙希先輩の情報網に引っかかるには十分だ。
「で、逃げるためにアタシに声をかけたってわけだ」
「いや、それは……」
「わかってるよ。お前のことだ。興味もない相手に声をかけたりはしないだろうしな」
よくわかっていらっしゃる。ま、これも長いつき合い故か。もちろん、悪い気はしない。自分をよく知ってくれている人がいるというのは嬉しいことだ。
「そういや去年はお前と一緒だったな」
「でしたね」
確か朝までふたりでカラオケをやって死にかけた覚えがある。「

今の気に入ったから、もう一回歌え」とか平気で言うからな。
「しっかし、色気のないクリスマスだったよなぁ」
「別にそんなものを求めてたわけじゃないでしょうに」
「確かにな。あのころのアタシは、クリスマスなんてバカ騒ぎできたらいいと思ってたからな」
そこで美沙希先輩は、僕の肩にぽんと手を置いた。

「誘ってくれたのは嬉しいけど、今年は相手が違うんじゃねーの？」
頭の後ろで手を組み、そのまま体育館方面へスタスタと歩いていってしまう。その背中は「そんなわけで、この話はもう終わり」と言っていた。
「……」
前言撤回。
つき合いが長いのも考えものだ。……本当によくわかっていらっしゃる。しっかり見抜いているようだ。さすが僕の人生の先輩。

さて、結局アテにしていたふたりに断られ、リミットである昼休みを迎えてしまった。
昨日のこえだの台詞からヒントを得て、別に女の子でなくてもいいんだと思い当たり、最後の手段として浮田らに声をかけてみた。
「断る」
「お前だけは断じて仲間に入れん」
「飛び散れ」
が、結果は散々だった。
挙句の果てには、しっしと追い払われ、昼メシを一緒に食べることすら拒否されてしまった。どうでもいいが、飛び散れってなんだ。
「あっはっは。そりゃそうなるよな」
そこに入れ替わるようにして現れたのは、午前中の休み時間にも会った美沙希先輩だった。今は制服姿。一部始終を見ていたらしく

呵々大笑である。
「なんだかこうなって当然みたいな言い方ですね」
「だってそうだろ。聞いた話だと涼のやつ、周りにも聞こえるようにお前に勝負を吹っかけてきたんだろ？　その時点でお前以外はぜんぶ味方なんだよ」
「は？」
「お姫様が何をご所望なのかわかってるんなら、忠実な家臣はそっちへ動くに決まってる。普通ならお前にだけいい思いはさせるかってなるところだけど、そうならないのがあの槙坂涼の人望だろうな」
「……」
つまり最初から僕に勝ち目のない勝負だったわけだ。……どいつもこいつも簡単に騙されやがって。
「で、どうするんだ？　テキトーに嘘ついて突っぱねるか？　涼は、相手は誰だなんて問い詰めてくるようなバカ女じゃないからな、どうにでもなると思うが」
「むしろそんな相手に嘘を吐く度胸はないです。……ま、潔くいきますよ」
本当のところ、美沙希先輩やこえだを誘ったのも、そこまで本気じゃなかったしな。僕だってクリスマスは楽しく過ごしたい。意地を張りすぎた挙句、引き際を誤って、せっかくの機会をふいにしたら元も子もない。……予定通りと言えば予定通りか。
「そう言うと思ったよ。ほら、お姫様がお待ちかねだぞ」
言われて学食を見回してみれば、いつもの窓際の席に槙坂先輩が座っていた。
ひとりだ。
噂によると、槙坂涼があの席に座っているときは人を待っているときだから空気を読まなくてはいけないらしい。いったいどこから出てきた噂だ？　また机の落書きじゃないだろうな。
彼女は僕を見つけ合図を送ってくる。僕も片手を軽く上げ、それに応えた。

「それじゃあ先輩、失礼します」
「おう」
先輩と別れ、ランチを買ってからテーブルへ行く。
「どーも」
「こんにちは、藤間くん」
僕は彼女の大人っぽい笑顔に迎えられ、向かいに座った。
「美沙希さんと一緒だったのね。もしかして誘いたい女の子って美沙希さん？」
美沙希先輩が槙坂先輩を『涼』と呼ぶように、彼女もまた美沙希先輩を『美沙希さん』と呼んでいる。ついでに、こえだのことは『サエちゃん』。どうにも学校生活がアウェーだ。
「まぁね。でも、見事に断られたよ」
「そう。残念ね」
と、くすくす笑う。
これは勝者の、いや、黒幕の笑みか。
僕はだんだんと居心地が悪くなり――知らない振りをしていようかと思ったが、どうやらできそうになかった。
「というか、この勝負こういう結果になる以外なかったみたいだな。あなたが周りを味方につけた時点で僕の負けは決まっていたも同然だ」
「ええ、そうよ。勝負はする前から勝つために手を打っておくものよ」
出来のいい弟を褒めるような口調の槙坂先輩。でも、残念ながら僕はこの解答を人からおしえてもらったわけだが。
「勿論、手はひとつじゃないわ」
「聞きたいね」
「簡単よ。美沙希さんやサエちゃん、あと藤間くんが声をかけそうな女の子何人かにお願いしておいたの。彼が誘ってくるはずだから断ってねって」
僕は唖然とする。

それでこえだは予め僕がくるのをわかっていたような口ぶりだったし、美沙希先輩も僕が話を切り出す前に速攻で断ったのか。
「待て。でも、それは汚くないか？」
「そうでもないわ」
と、槙坂先輩。

「だって、それを言っておいたの、昨日藤間くんに会う前だもの」
「言ったでしょ？　『勝負はする前から』手を打っておくって」
「……」
今度は絶句。
つまり、僕に合格通知を突きつけて約束の履行を迫れば、こういう流れになると読んで予め美沙希先輩やこえだを抑えておいたのか？　『誘ってくるはずだから断って』――見事に断定形だ。
「あなたは悪魔だな。きっと先の尖った尻尾がついてるにちがいない」
「あら、今まで何度か機会があったのに、ちゃんと見てなかったのね。そう。だったらクリスマスの夜にでも確かめてみたらいいわ」
「……」
またきわどい台詞を。おおらかなのはいいが、もう少し場所を考えてほしいな。
「これでもクリスティの『アクロイド殺し』よりはフェアのつもりよ」
「確かに。論争の余地もないな。いいだろう。僕の負けを認めよう。……それで、当日の希望は？　どこか行きたいところとか」
「どこでも。藤間くんとならどこだって楽しんでみせるわ」
きっぱりと言ってくれる。
「でも、そうね、最後にあなたの部屋に行けたら最高だわ」
「あのな……」
軽い頭痛がしてくる。

と、そこで槙坂先輩はぐっと身を乗り出してきた。彼女がこうするときは回りに聞かせられない話をするときであり、イーコールろくでもない台詞を吐くときだ。

「もしかして藤間くんは、あの夜のことを忘れたのかしら」

「なっ」

ほら見ろ。しかも、今回は最悪の部類だ。

赤面する僕をよそに槙坂先輩は、頬に掌を当てて芝居じみた調子でさらに続ける。

「それとも藤間くんがそういう気分のときしか呼んでもらえないのかしら？」

「おい」

「えっ」

思わず語気が強くなってしまい、彼女は怯えたように体を振るわせた。

「あ。いや、悪い。驚かすつもりはなかったんだ。でも、あまりそういう話をこんな人の多い場所でするのは……」

「そ、そうね。謝るわ。ごめんなさい。ちょっと浮かれてたみたい」

反省して項垂れる槙坂先輩。

浮かれてた、か。

僕は頭をがしがしと掻いた。こんなこと言いたくないんだけどな。

「まぁ……本当のことを言えば、僕だって浮かれてるさ」

それにこれじゃ僕がいじめているみたいだ。槙坂涼をいじめるだって？　それこそ学校中を敵に回すようなものだな。

彼女は顔を上げ、僕を見た。

「そりゃそうだろ、クリスマスなんだから。なんて言って誘ってどう過ごそうか、ずっと考えてた」

僕はそっぽを向きながら言う。

槙坂先輩は少しの間こちらを見ていたが、やがておかしそうにく

すりと笑みをこぼした。果たして、おかしかったのは僕の姿か、それとも言ってる内容か。
「それって誰のため？」
彼女は訊いてくる。
「言っただろ？　僕が誘おうと思っていた女の子のためさ」
「名前はおしえてくれないの？」
「もちろん。そんなの本人に言ったら負けだと思ってるからね」
「天邪鬼」
笑い、そして、やはり芝居じみたため息を吐く。

「どこで育て方を間違えたのかしら？」

「少なくともあなたに育てられた覚えはないね」
槙坂先輩は「だったら、これからわたし好みに育てるとして――」などど、おそろしいことを言い置いてから、さらに問うてくる。
「それで、その子を部屋に呼んだりするの？」
「ま、そのときの流れ次第かな」
「いやらしい」
しかし、その単語が示す意味とは裏腹に、どこか楽しそうな槙坂先輩。
そう言われたら、こう返すしかない。
「男だからね」

バレンタインSS

2月14日はバレンタインディ。
そんなことは誰だって知っている。日本全国共通だ。
とは言え、後期試験を目の前にした高校生には、本来関係のない話である。
「藤間ー。バレンタインだぜっ」
「……」
こんなところにバカが野に放たれていた――と思ったら浮田のやつだった。
午前最後の授業の終了後。
講義棟を出て2月の寒空の下、学食を目指していた僕に、後ろから追いついてきた浮田がハイテンションで声をかけてきた。どうやら近くの教室で授業を受けていたらしい。よりよい人間関係を保つため知り合い何人かの時間割りは把握しているが、こいつは対象外商品だ。
「試験前のこの時期にバレンタインとは余裕だな。好きにすればいいけど、もらう予定はあるのか？」
「ない！」
力いっぱい答える浮田。どうしてそれで浮かれられるのだろうな。
「でも、まぁ、もらえないとしても、男にとっちゃ一大イベントなわけじゃん？」
「そうか？」
「どいつが何個もらうかとか、どの女の子が誰にあげるかとか」
それだけ自分を蚊帳の外に置きながら今日という日を楽しめるそのポジティブさには感心する。
「中でも一番の注目は槙坂さんなんだけどなぁ」
確かに槙坂涼の本日の動向は注目に値する。だが、浮田はそれを残念そうに言い、そういう言い方になるのには理由があった。

「でも、卒業したね」
「そうなんだよなぁ」
わざとらしく項垂れて落胆のポーズを見せる浮田。
そうなのだ。3年生は1月早々別メニューでの後期試験を終え、先日の卒業式をもってこの明慧学院大学附属高校を巣立っていった。槙坂涼はもうこの学校にはいない。
「槙坂さんのいない高校生活なんてっ」
「どうした？　意義を見出せなくなって自主退学か？　僕は止めないし、むしろ迷ってるなら背中を押してやろう」
「お前ね……」
と、横目で何か言いたげな視線を向けてくる浮田に、僕は肩をすくめてみせる。

――さて、バレンタインか。

せっかくの年に一度のイベントだ。それなりに楽しまないと損だという思いはある。が、この場にいない人間のことを言っても仕方がない。
僕は周りを見回した。記憶が正しければこの学食へ向かう流れの中にいるはずなのだが。――いた。
「悪い。知り合いに声かけてくる。先に行っててくれ」
浮田に断り、その小さな背中を目指す。
「こえだ」
僕の声に彼女――三枝小枝が振り返った。
「あ、真だ。やっほー」
こえだは無邪気に応え、先ほどの僕がしたように一緒に歩いていた友人を先に行かせた。
待ってくれていた彼女に追いつき、並んで歩き出す。
「どしたの？」
「ああ。お前、何か忘れてるんじゃないかと思ってさ」

「何かって？」
隣でこえだが首を傾げた。
「おいおい、そんなので大丈夫か？　お前だっていちおう女だろうに」
「いちおーとか言うなっ。れっきとした女だもん！」
そうしてむきになりながら、持っていたルーズリーフのバインダを僕の脇腹へと突き込んでくる。期待通りの反応だ。
「痛いだろ。……今日はバレンタインだぞ。ないのか、僕にチョコは？」
「あたしが？　真に？　なんで？」
いちいち区切って聞き返すなよ。時々むかつくやつだな。
でも――と、こえだは言葉を継ぐ。
「いちおー義理も義理、超義理のやつを考えたんだけどさ、どーせ涼さんからもらうんだろうなって思ったらバカらしくなっちゃった」
「僕が槙坂先輩から？　そんな予定はないけど？」
「いや、そういうのって普通、予定とか決めなくない？」
それもそうか。
「会ってはいるんでしょ？」
「まぁね」
槙坂先輩は去年のうちに受験勉強から解放されていた上、卒業までしていよいよ自由の身。おかげで好き勝手に遊びにきたり呼びつけたりしてくれるのだ。こっちが翌日学校でもおかまいなしに朝までいるのだから冗談じゃない。起きたら朝食ができているのだけは助かるが。
「とは言え、あの人はここにいないし、会う約束もないんじゃしようがないさ」
と、僕がそう言った直後だった。
「おい、槙坂さんがきてるらしいぞ」
「うお、マジ？」

そんなやり取りが耳に飛び込んできて、男子生徒ふたり組が早足で僕らを追い越していった。見れば他にも急ぎ足の生徒がちらほら。
僕とこえだは思わず立ち止まり、顔を見合った。
「ほら」
「何がだよ」
再び歩を進める。先ほどよりもやや早足。
やがて見えてきた学務棟正面の学生掲示板の前に、小さな人だかりができていた。僕が知る限りこんな状況を作れるのはひとりしかいない。案の定、人垣の隙間からよく見知った顔――槙坂涼の大人っぽい顔が見えた。
囲んでいるのは1、2年生の女子生徒で、そのさらに外側に彼女の姿をひと目見ようと男子生徒が集まってきているようだ。槙坂涼の人気は未だ衰えず、といったところか。
「もう大学は決まったんですよね？　おめでとうございます！」
「ありがとう。次はあなたたちよ？　がんばってね」
祝辞に礼を言い、後輩たちへの応援も忘れない。
「今日は何しにこられたんですか？」
「職員室と学生課にね。事務的な用事」
好奇心旺盛な質問にも笑顔で答える。
常にやわらかい物腰を崩さない、大人の余裕を備えた上級生。これだから彼女は慕われ、憧れられるのだろう。
――彼女が僕を見つけた。
が、同時、僕は逃げるように背を向け、その場を離れる。
「ちょ、ちょっと真！　真ってば！　声かけなくていいの！？」
「いいんじゃないか。何か用があるらしいしさ」
こえだの声に背中越しに答え、僕はそのまま学食へ向かった。
先ほど別れた浮田や、他2名の友人と合流し、昼食をとる。
それが終わりかけたころ、一通のメールが届いた。差出人は槙坂

涼。

『どうして無視するの？』

そんな短文。

「……」

別に無視はしていないつもりだけどな。用があるらしいから声をかけなかっただけで。

心の中でそう反論していると、さらにもう一通着信。

『今お昼よね？　終わったらでいいから掲示板にきて。待ってるから』

僕はため息をひとつ吐き、端末を閉じた。

「悪い、用事ができた。先にいってる」

断り、席を立つ。

「まだ残ってるぞ」

「いいんだよ。健康のためには腹八分目さ」

今まで思ったこともないことを口にして、トレイを持って食器返却口へと向かった。

たぶんメールの内容からして、すでに掲示板前で待っているのだろうが――すぐに行くのも癪だな。僕は一度ロッカーに寄って、次の授業の準備をしてからその場所へ行った。

槙坂涼はさっきほどではないが、相変わらず数人の後輩に囲まれていた。卒業したはずの彼女が姿を現したのだからこの状況も無理からぬことだが、人を呼んでおいてそれはないだろうと思わなくもない。

と、

「藤間くん！」

再び僕の姿を認めた槙坂先輩は、今度は迷うことなく僕の名を呼

んだ。相手をしていた後輩たちに謝りながら輪を抜け、こちらに駆け寄ってくる。
ここにきて初めてわかったが、彼女は卒業したというのに制服を着ていた。ただし、羽織っているコートは学校指定のものではなく自前のもの。シックな黒のコートだ。外で会うときにたまに着ているが、こうして見ると制服にもよく合うようだ。
「さっきはひどいわ。無視していってしまうなんて」
僕のところまできた彼女は、開口一番そう言う。少しだけ怒っているようだ。
「忙しそうに見えたものでね。ていうか、何か用でも？　見ての通り僕はこれから授業なんだ」
「わかったわ。じゃあ、歩きながら話しましょ」
彼女のその言葉をきっかけに、僕らは足を踏み出した。次の授業は確か４号講義棟。ここからいちばん遠い場所にある。
歩き出してから先に口を開いたのは槙坂先輩のほう。

「ねぇ、もしかして怒ってるの？」

「怒……ん？」
いきなり思いもよらないことを言われ、否定しようとするが、しかし、僕は思いとどまる。
一歩引いて己を客観的に見――あぁ、と思った。
「今気がついた。どうやら僕は怒っていたらしい」
「よかったら理由を聞かせてくれる？」
今後の参考に、と彼女はつけ加える。
「突然前触れもなく学校にくるし。きてるならきてるで連絡ぐらいくれてもいいだろ」
そう言った途端、槙坂先輩はぷっと吹き出した。
「あなた、普段は天邪鬼なのに、時々素直になるのね」
「ほっといてくれ」

確かに今、ひどく子どもっぽいことを言った気がする。
「そういうところ好きよ。……いちおう釈明させてもらえる？」
不貞腐れて黙っている僕にかまわず、彼女は続ける。
「いきなりきたのはあなたを驚かせたかったから。きてからも連絡しなかったのは、あそこで待っていたら会えるだろうと思ったのよ。……すぐに下級生に掴まってしまったのもあるけど」
学生掲示板の前は、学食へ行くならどの講義棟からでも必ず通ることになる。そして、その性質上、休講や教室変更の情報が張り出されるので、通るだけでなく目を通していく生徒も多い。ここで張っていれば確実と言える。
「で、そっちの用はすんだのか？　学生課と職員室に用があったんだろ？」
「あら、あんなの嘘よ」
さらりと言ってのける槙坂涼。
「いちおう担任の先生には挨拶にいったけど。今日は藤間くんに会いにきたの」
「わざわざ学校まで？」
他にいくらでも時間と場所はありそうなものだが。
「今日は何の日か知ってる？」
「さてね」
「そうやってすぐに惚けるんだから。……ほら、手を出して」
彼女の口調は、拗ねる弟に呆れる姉のよう。
僕は彼女のほうを見ず、手だけを差し出した。
直後、その掌の上に乗せられたのは、期待に反して驚くほど小さくて軽いものだった。……見れば銀色の包み紙に包まれた小さな物体。
「何だこれ？」
「あら、知らない？　ぷっちょっていうお菓子よ」
「……」
知っている。知っているが、しかし……。

「待て。何かおかしくないか？」
「そう？」
今度は槙坂先輩が惚ける番だった。
「そうね、わたしもう一度素直でかわいい藤間くんが見たくなったわ。何がほしいか正直に言ったらあげてもいいわよ？」
彼女が今どんな顔をしているか、そちらを見なくてもわかる。例の天使の顔をした悪魔の笑みを浮かべているに違いない。
「そっちこそ受け取ってほしいものがあるならそう言えばいい」
「素直じゃないわね」
「お互い様だろ」
そのままふたりとも黙ってしまった。
僕は素直に言うのが癪だから。彼女は僕が下手に出るのを待っているから、だろうか。言う通りにするのは業腹ではあるが、このままタイミングを逃すのはそれ以上に馬鹿らしい話である。
僕は心の中でため息を吐いてから切り出した。
「えっと」
「あの」
が、その発音が彼女のそれと重なった。
「……」
「……」
「……お先にどうぞ」
掌を差し向け、先を譲る。
「じゃあ、わたしが先に言うから、藤間くんも今言いかけたことを言ってね？」
そうして一拍。
「今日はバレンタインよね？　藤間くんにチョコを渡そうと思って持ってきたの。わたしの気持ちよ。もらってくれる？」
「……」

言われた。
あまりにもストレートに言われてしまった。
なら僕も言うしかない。
深呼吸をひとつして、気持ちを落ち着かせる。
「僕もあなたからもらえたら嬉しいと思う。よかったらくれないか？」
「……」
「……」
そして、再び互いに押し黙る。この変な沈黙はきっと気恥ずかしさからくるものなのだろう。横目で隣を見れば、槙坂先輩はややうつむき加減だった。
だが、やがてその彼女がくすくす笑い出した。
「素直じゃないわね」
「お互い様だろ」
さっきと同じやり取り。
「ええ、お互い様ね」
そう言いながら彼女はコートの内ポケットからそれを取り出した。赤い包装紙に包まれ、リボンがつけられたそれは、今度こそ間違いなくバレンタインチョコのようだ。あまり大きくはないが、そこにセンスを感じる。
「どうぞ」
「ありがとう。喜んでいただくよ」
まるでリレーのバトンのように差し出されたそれを、僕は受け取る。
「でも、こんなの僕が帰ってからでもよかっただろうに」
「久しぶりに人目の多いところで会いたかったのよ」
いたずらっぽい笑みを含ませて言う槙坂先輩。
いったいそれに何のメリットがあるのかわからないが、彼女の意図した通りさっきからすれ違う生徒の目を引いているのは確かだ。
ひと目でそれとわかるバレンタインチョコはブレザーの中に入れて

おくことにしよう。
４号講義棟の前に着いた。
午後の最初の授業はここの１階の大教室で行われる。その扉は目の前だが、僕は足を止めて槙坂先輩と向き合った。
「この後の予定は？」
「午後もフルに授業さ」
「大変ね」
そこで彼女はすっと距離を詰め、僕のネクタイに触れた。
そうしながら艶めかしく囁く。
「わたしに鍵を預けてくれたら、あなたのためにご馳走を用意して待っててあげるけど？」
「……」
それは甘美な誘い。
「……生憎、僕はまだ魂を売るつもりはないのでね」
だが、一度乗ってしまえば後は堕ちるだけの悪魔の囁きでもある。
……尤も、小口の契約はちょくちょくしているような気がしないでもないが。とりあえず大口契約は辞退しておこう。
「残念」
そう言って彼女は、緩んでいた僕のネクタイをきゅっと締め、離れた。暗に悪魔扱いされたことには特に文句はないのだろうか。
「午後の授業、がんばってね。また連絡するわ」
「ああ」
最後に大人の微笑みをひとつ僕に投げかけ、帰っていった。
彼女の『また』は下手をすると今日、僕の下校に合わせてかもしれないが。自由で羨ましいね、学校から解放された人は。
僕は彼女の背を見送りながら、先ほどもらった小さなお菓子を口に放り込んだ。
ソーダの味だった。

第7話

「槙坂さん、こないな……」
「そうだね」
浮かない感じの浮田の声に、僕は興味のない振りを装い、本を読みながら答えた。
次の授業はあの槙坂涼も履修している。だが、休み時間も半分が過ぎた今をもって、まだ彼女は現れていない。珍しいことだ。
「休みなのかな……」
「さぁね」
どうなのだろう。風邪でもひいたのなら、見舞いにこいと喜々として僕に連絡してきそうなものだが。いや、僕が彼女の家を知らない現状ではそうする意味はないか。では、本当に病欠？　それならそれでとっくに噂になっているはず。
本当にどうしたのだろうか。
「……」
階段席の程よい高さから、教室を見回してみる。
どの教室でも基本的に席は自由だが、彼女に限らず皆毎回だいたい同じような場所に座り、次第にそれが定着してくるものだ。槙坂先輩が座るのは決まって前から4分の1くらいの、中心からやや左より。今もそこを見てみれば、彼女が属する女の子のグループはいるが、肝心の槙坂涼の姿だけがない。
この授業が終わるまで現れなかったら、美沙希先輩にでも聞いてみるか――と、思ったときだった。
にわかに教室が騒がしくなった。
この感じは、そう、毎度お馴染み槙坂涼が登場したときのものだ。今日は焦らした分だけいつもよりざわついている。出入り口側を見れば案の定、真ん中のドア付近に彼女の姿があった。
通路を歩く彼女は近くに座っている生徒たちに、どうして遅くな

ったのか尋ねられているようだ。そして、彼女はその都度歩調を緩めたり立ち止まったりして答えている。見た感じ「ちょっと用事が」と誤魔化しているようだが。
ある程度までくると、一度、いつも一緒に座っている友達のグループを見た。

そして、今度は階段席を見上げ、僕を見つける。

こっちへくるなよ――という願いも虚しく、彼女は階段を上がってくる。
「こんにちは、藤間くん」
「どーも」
にこやかに挨拶をしてくる槙坂先輩に、僕は努めてぶっきらぼうに返す。
「今日は遅い登場だね」
「心配してくれた？」
「そりゃあしたさ。僕以外のみんながね」
僕は読んでいた本を閉じて置いた。
「それで、遅くなったのは何か用事でも？」
「いろいろあるのよ。女だもの」
これはデリカシィの欠ける質問をしてしまったかもしれないな。反省。
「ちょっとした企みごと」
「……」
僕の反省を返してくれ。
「それはけっこうだが、願わくば僕を巻き込まないでもらいたいものだな」
「あら、それはむりな相談だわ」
槙坂涼はそんな恐ろしいことを、にっこり微笑みながら言う。
そこでチャイムが鳴った。始業の合図だ。

「座ったら？」
「大丈夫よ。先生がくるまで、まだあるわ。……ところで、今日は何を読んでたの？」
僕の言葉を軽くかわして、彼女は聞いてくる。ここに居座ってまで聞くことだろうか。
書店のブックカバーのついた本を、僕は一瞥した。
「『名言で学ぶ哲学入門』」
「藤間くんにしてはずいぶんと軽い感じの本ね」
僕の口から出たタイトルに、槙坂先輩は拍子抜けしたようだった。基本的に翻訳ものと古典名作に偏る傾向はあるが、かと言って重厚なものを好んでいるわけでもないつもりだ。
「哲学なんてただでさえ小難しいんだ。少しかじる程度ならこれくらいとっつきやすい本で十分さ」
「それも一理あるわね」
彼女は苦笑する。
「何か好きな言葉はあるの？」
「『万物は数でできている』」
「ピタゴラス？」
「当たり」
三平方の定理で有名なピタゴラス。
音楽の和音が比例関係になっていることを発見した彼は、数の性質が世界の構造を支配していると説いたのだ。
数学者であったピタゴラスは、同時に宗教集団の教祖でもあった。魂は不死であり『運命の輪』と呼ばれる、いわゆる輪廻転生の輪があると信じていた。そして、面白いのは罪や汚れにまみれた魂がその輪に巻き込まれ、彼らはそこから離脱することを目指していたというのだ。
「後は、言葉ではないけど、哲学を用いて理性的に神の存在を証明しようとしたトマス・アクィナスかな」
と、そこまで言ったところで、前方のドアから先生が入ってきた。

またざわつく教室。取っていた席を離れていた生徒が皆、いそいそと戻っていく。
「もうきたのね」
一方、どこかのん気に聞こえる槙坂先輩の声。
「じゃあ、仕方ないから藤間くんの横に座らせてもらおうかな」
「……」
まさか最初からこのつもりで遅くきたのか？
「はい。早く席に着くように」
マイク越しの先生の声は、特に槙坂先輩に向けられたものというわけではなく、まだ席についていない生徒全員を急かしたものだ。
「どーぞどーぞ。ささ、こちらへ」
浮田だった。先ほどまでの今にも死んでくれそうな声は一転して、鬱陶しいほど元気になっている。それもそのはず。僕の隣の席は僕と浮田との間でもある。そこに座ればこいつにも多大な恩恵があるのだ。……そうはいくか。結局、最後はやつの言葉が決め手となった。
「わかった。なら僕が詰めるから、ここに座ってくれ。……ほら、浮田、お前はもうひとつ向こうに詰めろ」
なぜかって？　男と並んで座っても気持ち悪いだけだからだ。
「お前ぇ……」
まるで井戸の底から聞こえてくるみたいに、恨めしそうにうめく浮田。僕の後ろではこのやり取りを見て、槙坂先輩がくすくすと笑っている。
結局、一列5人が掛けられる机は、端から槙坂先輩、僕、空席、そして、浮田に知らない生徒、という奇妙な並びで座ることになった。
――授業がはじまった。
最初しばらくは、槙坂涼がなぜそこに座るのかと皆当惑していたようだが、彼女自身がいつもと同じように真面目に授業に臨んでいたため、次第にその混乱も落ち着いていった。僕も似たようなもの

だ。5人が掛けられるとはいえ、実際に5人で座ると想像以上に窮屈だ。しばらくはこの肘と肘、肩と肩が触れそうな距離に落ち着かない思いをしていたが、授業に向かううちにそれも意識しなくなっていた。

尤も、それが油断につながったとも言えるが。

授業も半ばに差しかかったとき、不意に彼女が囁いてきたのだ。

「デート、いつにする？」

「ッ！？」

あまりの不意打ちに喉が詰まって、咳き込んでしまった。

「どうした、藤間？」

「い、いや、何でもない」

隣から聞いてくる浮田に言い置いてから、槙坂先輩を睨みつけ――たかったのだが、授業中なのであからさまなことはできない。そこまで計算に入れているのか、彼女は心持ち僕のほうへ体を傾け、さらに問いを重ねてくる。

「ねぇ、どうする？」

「今は授業中ですよ、槙坂センパイ。私語は慎みましょう」

嫌味を含めて言い返すのが精一杯だった。

すると彼女は、今度は単語帳を取り出してきた。意外と古典的な勉強の仕方をしているんだな。そう思っている僕の前で、次にそれをひと束リングから取り外し、僕と自分の間に置いた。そこから一枚取り、なにやら書く。

『デートはいつがいい？』

こちらにすっと差し出されたカードには、そんな文面が。

僕はそれをしばらく見つめてから、おもむろに裏返し、ペンを走らせる。

『Ｗｈｅｎ ｉｓ ｇｏｏｄ ａｓ ｆｏｒ ｇｏｉｎｇ ｔｏ ｄａｔｅ？』

それを見た槙坂先輩は、また新しいカードを取った。

『よくできました。でも不正解です。わたしが聞いているのはそういうことじゃないのよ？』

小さいながら読みやすい文字で書かれていた。

続けてもう一枚。

『この前約束したでしょ？』

『忘れた』

勿論、忘れた振りをしているだけだ。それ以前にあれを約束というのだろうか。誘導尋問の上、僕は了承の言葉を口にしていないはずなのだが。

『遊園地がいいわ』

『子どもっぽいね』

『まだ大人じゃないもの』

「……」

この場合、大人の定義とは何だろうな。

『ひとりで行けば？』

『デートって言ってるでしょ』

『断る』

『ならあなたが行き先を決めて』
『断る』
『それ、さっきと同じカードよ？』
『返事が同じだからね』

時代はエコだ。人間は大量生産大量消費の時代にさよならを告げるべきだろう。

『見る？』
『何をだ！？』
『冗談よ』

いきなり脈絡もなく想像の余地の大きい冗談をはさまないでもらいたい。
なにげなく斜め下を見れば、ミニ丈のスカートから伸びる槙坂先輩の太ももがあった。……痛っ。シャーペンで脇腹を突かれた。ペン先がカッターシャツを貫通して、わりと遠慮なく刺さる。

『この前のカフェ、アルバイト募集中だって』

いっこうに首を縦に振らない僕に、今度は雑談を投げかけてきた。

『応募してみれば？』『あなたが店にいれば、きっと売り上げは倍増だ』
『藤間くんも一緒にどう？　社会勉強は必要だわ』

社会勉強ね。毎日の生活に新しい刺激を追加するならそれもいいかもしれない。あの店の程よい暇さ加減も、そう考えればちょうどいい感じだ。しかも、槙坂涼と一緒だって？

『考えとく』

僕の返事を読んだ彼女は小さく笑った。

それにしても――と、ふと思う。

『何で授業中にこんな話をしてるんだ？』

最初のデート云々の話は兎も角として、雑談にまで翼を広げる必要はない。しかも、わざわざこっそりと筆談をしてまで話すようなことだろうか。

対する彼女の返答は明快だった。

『楽しいからでしょ』

『なるほど』

と、そこで槙坂先輩がまたこちらへ体を傾けてきた。やや笑みを含んだ小声で囁いてくる。

「でも、そろそろちゃんと授業を聞いたほうがいいわね」

「同感だ」

僕もさっきからノートだけは取っているが、先生の話がまったく頭に入っていなかった。

筆談に使ったカードをふたりで片づける。どうでもいいような話でずいぶんと浪費したものだと改めて思う。

少し可笑しくなって、笑えてきた。

成り行きか必然か、槙坂先輩と一緒に学食で昼食を食べた後、昼休みのうちに図書室へ行くことに決めた。

図書室は学務棟４階。階段を歩いてのぼる。

それはいいのだが。

「エレベータは使わないの？」

なぜこの人までついてきてるのだろうな。
「若いんだから、これくらい歩けるだろ」
ここ、明慧学院大学附属高校は単位制で生徒が教室を行き来するスタイルをとっているせいか、各棟に一基ずつエレベータが設置されている。勿論、車椅子や松葉杖の生徒を想定したものだ。
「ああ、そういえばあなたは僕よりもひとつ年を喰っているんだったな」
「そういうときはね藤間くん、ひとつ大人って言うのよ」
「……」
さっきは大人じゃないって言ってたくせに――と思ったが、言うのはやめておいた。やりにくい展開になりそうな気がしたからだ。
「単に極力エレベータはあけておきたいと思ってるだけさ」
実際、3年生には車椅子の生徒がいて、その人のためにもエレベータはいつでも使えるようにしておきたいのだ。尤も、遠慮なく使うものぐさな生徒も多いから、僕ひとりがそう心がけたところであまり意味はないのかもしれないが。
「そういう優しい気持ち、唯子が聞いたら喜ぶわ」
「知り合いなのか？」
「ええ。いくつか授業が同じなの」
聞けば時々見かけるあの人は、伏見唯子という名前らしい。
2階を過ぎて3階へ。
2階には職員室があり、先生だけでなく生徒も出入りするのでわりと賑やかなのだが、3階からは特別教室のフロアになって一気に寂しくなる。
「……」
思わず立ち止まって廊下の先を見れば、突き当りまで生徒の姿はまったくなかった。
僕が足を止めたのに気づかず階段を上がったのか、槙坂先輩の声が上から降ってきた。
「いや、別に。……ッ！？」

振り返った僕の眼に飛び込んできたのは、階段の中ほどに立つ彼女の足だった。
小さな靴下とローファーに包まれた足先に、細い足首。そこから視線を上げれば、息をのむような脚線美が短いスカートの奥へと続いていた。
「あ、あまりそんなところで無防備に立たないでくれ」
「！？」
僕は慌てて目を逸らし、彼女はようやく気づいたようにスカートの裾を手で押さえた。……大丈夫だ、ギリギリ見えてないから。
「藤間くんって意外と紳士なのね」
「意外はよけいだ」
まったく……――と、その迂闊さに呆れながら、階段に足をかけたそのときだった。
「ふうん」
何かに納得したような槙坂涼の声。
そして、

「じゃあ、こういうのはどう？」

それはまるで悪魔の囁き。
そこに混ぜられた抗いがたい力に負けて顔を上げれば、彼女は太ももの横辺りのスカートの裾に両手を添えていた。
「な……」
何をするつもりだ。そう言おうとしたが声は出ず、目は彼女の次の行動に釘づけになっている。
彼女はそのままスカートの裾を、太ももの上を滑らせるように、少しずつ、ゆっくりと引き上げていく。すぐに本来なら見えることのない、スカートの奥に隠されているはずの肌が露になった。それだけで眩暈を覚えるような強烈な背徳感だった。
やがて決定的な境界線を越え――、

「ッ！？」
「なーんて」
瞬間。
彼女はおどけた調子で手を広げてみせた。手から離れたスカートがもとの位置に戻る。
「冗談よ」
「あのな……」
僕は金縛りが解けたみたいに体の自由を取り戻し、体中の力が抜けるような盛大なため息を吐いた。
「友達から聞いたの。男の子ってこういう『見えそうで見えない感じ』が好きなんだって。……ほんと？」
「……否定はしない」
だからって実験しないでくれ。破壊力がありすぎるのだから。
「どきどきした？」
「まぁ、ね」
まるでいたずらを成功させた子どものように、軽快な足取りで槙坂先輩が階段を降りてくる。
「あなたの胸、触らせて」
そのまま獲物を追い詰めるみたいに距離を詰め、僕がまだ何も言っていないのに手を伸ばしてきた。彼女のしなやかな指先がブレザーの内側に滑り込み、心臓の真上に掌が当てられた。背筋がぞくりとする。
「すごい。本当にどきどきしてる」
「だからさっきそう言った」
「わたしのせい？」
「他に誰がいるのかおしえてほしいね」
それを聞いて可笑しそうにくすくす笑う槙坂涼。……まったく、いい気なものだな。確かに僕の心臓は早鐘を打っていて、半分はさっきのあまりにも危ない悪戯のせいだが、もう半分は今こうして触れられていることが原因だというのに。

「いくつか勘違いがありそうだから言っておくけど、他の女の子じゃこうまではならないよ。相手があなただからこそだ」
「そうなの？　つまり藤間くんをこんなにどきどきさせられるのは、わたしだけってことね。嬉しいわ」
　それだけ槙坂涼という人間は僕にとっての危険物だということだ。少しは自覚してくれ。
「それと――」
「それと？」
　言い淀む僕に先を促しながら、ようやく彼女は触れていた手を引いてくれた。
「……『見えそう』じゃなくて、『見えてた』」
「え？」
　直後、笑顔を凍りつかせ、目を見開く槙坂先輩。手は咄嗟にスカートの裾を押さえているが、それは今さらだろう。
　表情で「ほんと？」と聞いてくる。
「……薄いピンク」
「～～～っ！」
　そして、耳まで真っ赤にして顔を伏せてしまった。どうやら完全に自分でも想定外の自爆だったらしい。要因は高低差か。
「……」
「……」
　お互い黙り込む。
　もう少しからかってやろうかと思ったが、さすがにこれではむりだな。というか、正直今のこの状況をどう扱っていいか計りかねていた。世の中、わかっていても指摘しないほうがいいこともあるということだろう。
「えっと、悪い。僕は先にいくから」
　とりあえず消えたほうがよさそうだと思ったのだが――しかし、その僕のブレザーの端を、彼女は素早く指でつまんだ。それでもまだ顔は伏せたまま。

少しして。
やがて顔を上げた彼女は、びっくりするほどの笑顔だった。
「デート、次の日曜でいいわよね？」
「……」
くそ、そうきたか。
そっちが勝手に自爆しただけだと思うのだがな。
とは言え。
「ああ、任せる」
これは拒否できなかった。

第8話　その1

日曜日。
槙坂涼とのデートの日だ。
とは言え、今日は約束したあの日から2度目の日曜。急に彼女が今週ではなく来週にしてほしいと言い出し、ドタキャンならぬドタ延が発生したのだ。……まぁ、僕には拒否権もない上、そもそも反対する理由もないのでいつだって同じなのだが。
待ち合わせ場所は、先日カフェへ行くときに使った駅――たぶん槙坂先輩の最寄駅になるのだろうが、その駅の改札前だ。僕がその場所に着いたのは、約束の時間の30分前。早く着き過ぎてしまって、当然のように彼女の姿は見当たらない。
「……」
それはいいのだが、どうにも空気がおかしい。ありきたりな駅前の風景に、何か異質なものが混じっているような。
何が原因だろうと辺りを見回してみて――あった。あれか。
男がふたり、柱を背にした女の子を逃げられないようなかたちで囲んでいた。見たところナンパのようだが、そのやり方がかなりしつこくて嫌らしいようだ。それを回りの人間が、気にしつつも見て見ぬ振りをしているという構図。
そして、あろうことかその女の子というのが、我らが槙坂涼だった。
「まったく。テンプレートなイベントに巻き込まれてくれる……」
助けないわけにはいくまい。というか、むしろ潰すべきだろうな、あれは。僕はそう決めて、早足でそちらへと近づいていった。
「何度言われても、行けないものは行けません。人と持ち合わせしてますから」
「だからぁ、俺たちと一緒にいくほうが絶対に楽しいって」
「あ、待ち合わせって相手は女の子？　だったら2－2で完璧じゃ

ん」
二人組の年は僕よりも少し上くらいだろうか、絵に描いたようなチャラい男たちだった。まぁ、この手の男は実際、遊び慣れてて場を盛り上げるのに長けてたりするから、喜ぶ女の子も多いとは思う。
「悪いけど男だよ」
僕はそこに遠慮なく言葉を割り込ませた。
「ああ？」
「なんだぁ？」
いっせいにチャラ男が振り向く。
「藤間くん！」
そして、その隙を突いて槙坂先輩がこちらに駆けてきた。隠れるように僕の後ろに回った彼女に、「もう少し離れてろ」と小声で告げる。
「誰お前？」
「この人の本日のお相手を仰せつかってるものさ。悪いけど帰ってくれないか」
『悪いけど』も何も、おとなしく帰るのが筋だろう。
しかし、チャラ男その1が僕の頭のてっぺんから足の先まで、まるで値踏みでもするように何度も見ながら近寄ってくる。不愉快だな。
「……パッとしないやつ」
ほっとけ。
「ねーねー、こんなやつよりさ――」
僕の横をすり抜けて性懲りもなく槙坂先輩に言い寄ろうとするが、それはさすがに無防備すぎるだろう。
「お前、しつこいよ」
僕はそいつの手首を掴んで捻り、さらに足を払ってバランスを崩したところに自分の体重を預けてもろともに倒れ込んだ。「ぐえっ」と情けないうめき声が聞こえ――そして、その瞬間にはもう、僕は男を地面に組み伏せていた。

「てめぇ」
「動くんじゃねぇ！」
それを見てこちらに詰め寄ろうとしたチャラ男その2を、その体勢のまま一喝する。
「動いたらこいつの腕を折る」
「ふざけ――」
「ま、待ってくれ！　折れる！　マジで折れちまうよ！」
その2がまだ動こうとするので少し力を入れてやったら、その1が今にも泣きそうな悲鳴を上げた。それはそうだろう。ほぼ限界まで捻っているのだから。正直、あの人にどれだけ不快な思いをさせたかと考えれば、このままへし折ってやりたくて仕方がない。
今度こそその2の足が止まった。
「……」
「……」
「うぅ……」
僕とその2が睨み合い、地べたを這いつくばらされているその1がうめく。
たっぷり1分は経ってから、僕はチャラ男から手を離して立ち上がった。2、3歩下がって、槙坂先輩を庇うようにして立つ。
遅れてチャラ男も肩を押さえながら、のそのそと体を起こした。その1とその2、ふたりして忌々しげに僕を見ていたが、そのころには野次馬も集まってきていて、これ以上騒ぎを大きくできるような雰囲気ではなくなっていた。さっきまでこいつらが質の悪いナンパをしているのを見ていた人も多く、のん気に喧嘩両成敗を唱えるものは少ないだろう。
「ちっ」
やがて二人組は分の悪さを悟り、舌打ちひとつして立ち去っていった。ひとりは痛そうに肩に手を当てたままだ。折れる寸前まで捻ってやったから、しばらくは腕が上がらないだろうな。
「すごい。藤間くん、こんなこともできたのね……」

「まぁ、ね」
これも我が師のおしえの賜物だ。とは言え、あまり自慢できたものでもないので、返事が苦笑混じりになる。
というか、他に何ができるというわけでもないので、むしろこんなことくらいしかできないやつなのかもしれないな、僕は。
「それより――大丈夫か？」
「え、ええ」
最後の騒ぎで興奮していたのか、ようやく自分のおかれていた状況を思い出したようだ。
「藤間くんは？」
「別に。せいぜいズボンが汚れたくらいだね」
僕は答えながらジーンズを払った。
「悪かった。僕がもっと早くきていればよかったのに」
「ううん。わたしも浮かれてて早く着きすぎたから」
首を横に振る彼女。
考えたらまだ予定の３０分前だったな。浮かれているのはお互い様ということか。
「まったく。ナンパならもっとうまく、潔くやってほしいね。男ふたりでひとりの女の子を引っ掛けようとするかよ」
「まるでやったことがあるみたい」
「あるわけないだろ」
いったい僕をどんなふうに見ているんだ。
「ふうん」
彼女は何か言いたげな目で僕を見る。
「何だよ？」
「案外やることはやってると思ってた。例えば――」
「入学してすぐなのに上級生の女の子に話しかけたり、とか」
「……」

あまりの不意打ちに頭がくらっときた。待て、それは。まさか覚えていたのか……？
僕の最初の大失敗。
それからずっと、できるだけ目立たないようにしていたというのに。
彼女の顔を見る。
「……」
「……」
だが、僕の無言の問いにも、槙坂涼はすべてを見透かしたような瞳と微笑を返してくるだけ。何も答えようとはしない。
もういっそのことこちらからはきりと聞くべきか、と思ったとき。
「あ、そうだ」
彼女が不意に声を上げた。
「藤間くんのこと、今日だけでも真って呼んでいい？」
「は？」
いろいろと唐突だな。提案も唐突なら話題の切り替えも唐突で、まるでさっきの話題などなかったみたいだ。
「だってせっかくのデートだもの。それくらいいいでしょ？」
ね？――と、彼女は訴えてくる。
「槙坂先輩の好きなようにすればいい。僕は槙坂先輩に自分の呼び方を強要するつもりはないのでね」
「あら、そうやって槙坂先輩槙坂先輩って繰り返すのは、しばらくそう呼べないから？」
「まさか。僕に与えられるべき自由を暗に主張しているだけさ」
次なる要求がこちらに飛んでこないよう願うばかりだ。
「そう。それは大切なことだわ。でも、真はわたしが何を望んでるかはわかってるのでしょう？」
「……」
が、やはりそうもいかないようだ。
僕は諦めのため息を吐く。

「わかったよ、涼」
「素敵！」
いきなり槙坂先輩は僕に飛びつくようにして、腕に腕をからめてきた。
「名前で呼び合うなんて夢みたい！」
そのまま僕を振り回しながらくるりと一周回り、また離れた。まるでスペースクラフトのスイングバイだな。
「さ、行きましょ、真」
感激冷めやらぬ彼女は、満面の笑みで無邪気に僕を急かす。どうやらご機嫌は最高潮のようだ。
それはそうと。
ひとつ確信したことがある。

槙坂涼はあれを覚えていない――。

多分だが。
「……」
ま、今はそんなことは関係ないか。待ちに待ったデートなのだ、今日のところはそれを楽しむとしよう。

第8話　その1（後書き）

3月7日　投稿
3月9日　脱字訂正

第8話　その2

当初の予定では混雑を避けるため開園のちょっと後に行くつもりだったのだが、この調子では開園時間ぴったりに着きそうだ。それもこれもお互い待ち合わせ場所に早くきてしまったせいだ。

おかげで今乗っている電車も家族連れで混み合っている。

目指すは遊園地前の駅だが、ひとつ前の駅を出た辺りでもう巨大観覧車が窓の外に見えていた。

電車を降りて駅を出、前の広い道路を横断歩道で渡ればそこはもう遊園地だ。観覧車はさらに大きく見え、うねるようにして走るジェットコースターのレールまでもが窺えた。

入場の列に並びながらふたりでアトラクションの一部を見上げていたが、僕は先に視線を戻し、彼女を見た。

白いワンピースに、肩にはショールをかけた大人っぽい、おとなしい出で立ち。淡い色でまとめた服は、長い黒髪によく似合っていた。

対する僕は、ジーンズにロングTシャツ姿。

と、僕の視線に気づき、槙坂先輩が僕を見た。目だけで「どうしたの？」と尋ねてくる。

「いや、僕は槙坂先輩に釣り合うのだろうかと思ってさ」

思わず考えていたことを馬鹿正直に口走ってしまった。

すると彼女はくすりと笑みをひとつこぼす。

「あら、そんなこと？」

そして、僕のロンTの両肩を指でつまみ、崩れていた着こなしを整えてくれた。これが学校ならネクタイを直してくれていたことだろう。

「誰がどう見てもお似合いの恋人同士よ」

「それはそれで僕としては不本意だな」

「口の減らない子ね。……大丈夫よ。誰も気がつかないだけで、あ

なたは本当はどんな女の子だって振り向く男の子よ。ずっと見ていたわたしが保証するわ」
「……」
ずっと、ね。
「それと――涼、よ」
「うん？」
「今日は涼って呼ぶこと。そう約束したでしょ、真」
わざわざ最後の『真』の部分をはっきりと発音する彼女。……ここまでどうとも呼ばないようにしていたんだけどな。
「気をつけるよ、涼」
「よろしい」
槙坂先輩、もとい、涼はできのいい弟を見る姉のように、嬉しそうに笑った。
気がつけば前との間隔が開いていて、僕らは急いでそこを詰めた。

程なくゲートをくぐり、園内へと入場することができた。
所詮は地方の遊園地なので、どこかの世界的に有名な施設とは比べるべくもないが、それでもなかなかに立派だった。
まずはインフォメーションセンターやグッズショップ、自販機コーナーなどが立ち並ぶ一角だが、そこで涼は足を止め、辺りを見回していた。
「どうした？」
「初めてきたから目移りしちゃって」
そう言って苦笑。
「どこから回る？」
「僕はどこでも」
「じゃあ、やっぱりここの目玉のあれかしら？」
見上げた視線は巨大観覧車……ではなく、ジェットコースターをフォーカスしている。確かにテレビで見るＣＭでもこれをメインに宣言していたな。

「……目玉なら最後にとっておけばいい」
願わくばそのまま忘れてくれ。
「こういうのは最初に乗って、気に入ったらまだ乗るものよ。……もしかして真、怖い？」
そこでこちらの様子の変化に鋭く気づいた涼は、首を傾げながら顔を覗き込んでくる。長い髪が重力に従い、鉛直方向下向きに垂れた。
「……まさか」
と答える僕は、なぜだろうか彼女と視線が合わない。
「そう。じゃあ、行きましょう」
こういうときに限って悪魔は人の心の奥底を読んだりせず、言葉を額面通りにとらえる。……わざとなのだろうけど。
彼女は腕に腕をからめてしっかりと僕を捕まえると、そのままジェットコースターの列へと向かっていく。
僕の中にありあまるほどあった抵抗の意思は、肘に感じるふくよかな感触によって根こそぎ奪われていた。……これはわざとじゃないのだろうな。天然の悪魔め。

かくして、僕は立て続けに、いわゆる絶叫系につき合わされた。
まずはジェットコースター。
さすがここの目玉。宙返りしたくらいから、何がなんだかよくわからなくなった。
次に、巨大な船型の乗りものが振り子運動をするアトラクション。
振り子の最高点での、内臓が浮き上がるような感覚がなんとも気持ちが悪かった。
そして、フリーフォール。
自由落下の時間が永遠にも思えて、気が遠くなりかけた。

結果。
僕はベンチに座り込み、背もたれに首を乗せて青空を見上げていた。
「……わかった。僕が悪かった。僕はあの手の乗りものは苦手なんだ」
わざわざ白状せずとも、この姿を見れば誰でもわかることだろうが。……あー、気分が悪い。このまましばらく風に当たっていよう。
そんな僕を見下ろし、涼はおかしそうに笑っている。彼女はまったく平気な様子だ。こういうのは女性のほうが強いというのは本当だろうか。
「最初からそう言えばよかったのに」
「言ったところで勘弁してもらえたとは思えないけどね」
「そうね。最後のフリーフォールくらいはやめてあげたかも」
「……」
ありがたくて涙が出るね。文句のひとつも出ない。
「だらしないわね。女より先に果てる男は嫌われるわよ」
「何の話だよ……」
もうまともにつき合う気も起こらない。
「……知りもしないのに知ったふうなことを言う」
「い、いいでしょ。知識はあるんです」
僕が不機嫌に任せて少しばかり棘のついた言葉を返すと、それが涼にとっては思いのほかクリティカルだったらしく、不貞腐れたように早口でまくし立ててきた。
それから彼女は、すっと僕の隣に座り、
「前から聞きたかったのだけど――」
と、改まった口調で切り出してきた。
「……真は、あるの？」
「何を？」
「その……したこと」

「は？」
遅まきながら質問の内容を理解し、僕は頭を跳ね上げた。涼を見る。彼女もまた僕のほうへとゆっくりと顔を向けた。
「……」
「……」
しばらく見つめ合い、
「勘弁してくれ。こんなとこでそんなこと聞くかよ」
僕はもう一度背もたれへ首を倒した。
「わ、わたしにはわりと大事なことなのよ」
「わりと、だろ」
「おおいに」
「そうかい。でも、ノーコメントだ」
僕は涼の言葉を無視し、ベンチから立ち上がった。
「さて、じゃあ、そろそろ次に行くか」
「もぅ」
遅れて彼女も腰を上げ、後を追ってくる。何が悲しくて遊園地でそんな話をせねばならないのか。

さすがに涼も引っ張るような話題でもないという自覚があったらしく、いつまでもしつこく聞いてくるようなことはなかった。
その後、おとなしめのアトラクションをいくつか回り――、
昼。
なのだが、時間が悪かったようで、昼食を取ろうと入ったレストランはうんざりするほど込んでいて、結局、僕らは先にグッズショップを見てみることにした。
「ねぇ、これなんてどうかしら？」
何を買うという目的もなく店内を見て回っている最中、そう言って涼が手に取ったのはケータイのベルトストラップだった。特にどうということもない、この遊園地のマスコットキャラがついただけの代物。

「いいんじゃないか」
「……」
と、じっと僕の顔を見る涼。
「どうでもよさそうな返事ね」
「この状況下で正しい解答をした男がいたらつれてきてほしいね」
どう答えても不満そうな顔をするのが女の子だ。個人的にはこの場合、名作スペースオペラから台詞を拝借して「模範解答の表があったら見せてもらえませんか」と答えるのがいちばん皮肉が利いていていいと思っている。
「実際、悪くないんじゃないか。ベルトの赤もそんなに安っぽい色じゃないし。シンプルでいい」
「そう？　真がそう言うなら、これにしようかな」
彼女は気に入った様子で、改めてそれを眺めた。
「欲しいのか？　だったら僕が買うよ」
「ほんと？　いいの？」
「いいからいいと言ってる。ま、多少責任もあるけどさ」
僕が背中を押して決心させたみたいでどうにも、ね。
彼女の手からそのストラップを抜き取り、僕はレジへと向かった。遊園地という付加価値（ブランド）のおかげでこの手のアイテムにしては少々高かったが、かと言って目が飛び出るほどというわけでもなく、まぁ、これくらいなら許容範囲だろう。
清算をすませて戻り、小物用の袋に入れられたそれを涼に渡す。
「ありがとう。真からの初めてのプレゼントね。嬉しいわ」
そう言って彼女は笑った。相手が誰であれ、喜ぶ顔を見るというのはいいものだ。
「わたしもあなたに何か返さないと」
「いいよ、そんなの。こっちはそんなつもりでやったわけじゃないんだ」
「実はもう決めてあるの。これよ」
と、差し出してきたのは、先ほど僕が涼に買ったのと同じ携帯ス

トラップだった。こっちはベルトの色が黒。シックにまとまっていていい感じではある。
「どう？」
「いいとは思うけど、でも、それじゃおんなじじゃないか？　結局、自分で自分に買ってるようなものだ」
だからと言って、値段が違えばいいというものでもないだろうけど。
「あら、ぜんぜん違うわ。わたしのは真がプレゼントしてくれたもの。これはわたしが真に買ってあげるもの。大事なことだわ」
「そういうものか？」
「そういうものよ」
そこでウインクひとつ。それだけで何となく納得してしまった。
……単純だな僕は。

客の少なくなりはじめたころを見計らってレストランに入った。
少し遅めの昼食。
注文したものがくるまでの間、涼は早速先ほどのストラップを自分の携帯電話に取りつけようとしていた。
「こんな感じね」
手先が器用なのか、特に手間取ることもなく今まで着けていたものを外し、新しいものへと着け替える。
「ケータイが赤だからよく合うな」
「わたしもそう思うわ」
彼女は端末を、ストラップがよく見えるようにして、そっとテーブルの上に置いた。
「真のも貸して。つけてあげる」
今度は僕のらしい。手を差し出してくる。
言われた通りポケットから端末を出して――そこで僕は手を止めた。
「中は見るなよ？」

先に釘を刺す。
「どうして？」
「待ち受けを見られたくない」
「真のってプリインストールされてたような画像じゃなかった？」
よく知ってるな……って、思い出した。彼女はケータイ誘拐の犯人だったな。
「変えたんだよ。見られたくない」
もし涼に見られたら、僕はここで舌を噛んで死ななくてはならない。……わりと本気で。
「いったいどんなのに変えたのかしら？　そう言われるとよけいに見たくなるけど――約束するわ。見ない」
「……」
一瞬どうしようかと迷ったが、涼を信じて渡すことにした。
5秒前の約束など簡単に反故にして今にも開けるんじゃないかとはらはらしたが、彼女はそんな素振りなど微塵もなく、すぐにつけ替えはじめた。特に思い入れがあるわけでもない輪っか状の紐がついただけのストラップが外され、新しいベルトストラップへと交換される。
「はい、できたわ」
程なく作業終了。
赤に赤だった彼女のものと同じく、黒い僕の端末にも黒のベルトストラップがよく似合っていた。
テーブルの上にふたつの携帯電話が並べて置かれ、
瞬間、
ああ……――と、僕は心の中でうめいていた。
今ごろやっと気がついた。これじゃ色が違うだけのおそろいじゃないか。
「どうかした？」
「いや、別に」
こちらの微妙な変化に気がついて涼が聞いてきたが、僕は短い言

葉で誤魔化す。
丁度そこで頼んだ料理が運ばれてきた。

天を仰げば、青空のキャンバスにはひと筋の飛行機雲が描かれていた。
午後はさらにおとなしい、というか、むしろのんびりしたアトラクションばかり回っていたのだが、観覧車を降りた後、涼がまたジェットコースターの乗りたいと言い出し、むりやりつき合わされる羽目になった。
その結果として、また僕はベンチでぐったりしているわけだ。
涼は何か冷たい飲みものを買ってくると言って、今はここにはいない。そろそろ戻ってくるころだろうかと背もたれに乗せていた頭を起こした。
「ん？」
確かに戻ってきてはいたが、僕の正面少し先で両手に缶ジュースを持った涼がきょろきょろしていた。見失ってしまったのだろうか。
「涼！」
呼んでやる。
「真！」
するとすぐに彼女もこちらに気づき、背伸びしながら笑顔で答えた。
と、そのときだった。
「あっれー。涼さんじゃーん」

今のやり取りに反応した人物がいた。
車椅子に乗ったスポーツ少女風の女の子。着ている服を明慧の服に置き換えなくても、すぐに誰かわかった。名前は前に涼からおしえてもらったばかり。伏見唯子（ふしみ・ゆいこ）先輩だ。
ふたりはほぼ同時くらいに僕の座るベンチへと寄ってきた。車椅

子を滑らせてやってくる伏見先輩を、僕は立って迎える。
「奇遇ね、唯子」
「ほんとほんと。……で、君は確か藤間くん」
彼女は僕を見上げ、確認した。
「ふうん。そっかそっか。そういうことかぁ」
何やらひとり納得している。
「涼さんが珍しくお誘いを断ったと思ったら、こういうことだったんだぁ」
「……」
その様子は実に楽しげだ。
もしかしたらマズい人にマズいところを見られたんじゃないだろうか。

第8話　その3

いったい何の偶然か、こんなところで同じ明慧の生徒に出会うとは思わなかった。……まぁ、この遊園地はこの辺りではメジャーなレジャースポットなので、そこまで不思議でもないのかもしれないが。

出会ったのは伏見唯子（ふしみ・ゆいこ）先輩。

車椅子で学校生活を送るスポーツ少女然とした人だ。僕は直接の面識はないが、どうしても目立つのでよく見かけてはいた。

「涼さんが珍しくお誘いを断ったと思ったら、こういうことだったんだぁ」

その伏見先輩は僕と涼を交互に見、悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「見つかってしまったんじゃ、もう誤魔化しようがないわね」

涼も小さく笑いながら僕に言った。……僕としてはがんばって誤魔化してほしいところなのだが、とは言え、この場を切り抜けるいい案もないし。結局は諦めて肩をすくめるしかない。

「ま、運が悪かったと思って」

と、伏見先輩。

「そうね。まさか行き先が同じだとは、ね」

「あれ？　誘うときに言わなかったっけ？」

「ううん。聞いてないわ」

涼のその言葉に伏見先輩は、そうだっけ？　そうだったかも？と首を傾げつつ自信を失っていく。

「だって、聞いてたら別のところにしてたもの」

「それもそっか」

そして、納得。

そんな大事なことはちゃんと言っておいてくれよ、と僕は心の中で嘆息する。涼の言う通りだ。予め知っていたら危険は回避しただろう。

「にしても、涼さんがねぇ……」
伏見先輩はしげしげと僕らを眺める。
「最近よく一緒にいるなぁとは思ってたけど、まさかふたりでこんなところにくるまでとはねぇ。……せっかくだから、その辺のことも詳しく聞かせてもらおっかな」
「は？」
素っ頓狂な声を上げる僕をよそに、彼女はポケットから携帯電話を取り出した。まさか一緒にきている友達を呼ぶのだろうか？　この場合、即ち明慧の生徒ということになるわけだが。
「やほー、あたし。偶然ばったり知り合いと会っちゃってさ。うん、だから合流ちょっと遅らそう。1時間後くらいで、じゃねー」
しかし、彼女は手短に要件をすませると通話を切り、端末を閉じた。
「じゃ、向こうのレストハウスに行って話そうか」
言うが早く、さっそくハンドリムを回し、車椅子を進ませる。
僕と涼は顔を見合わせた。
「厄介なのにつかまったわね」
「笑ってる場合か」
差し出されたジュースを受け取る。
本当、笑っている場合ではない。槙坂涼がらみの話はどんな些細なことだって話題になるのだ。それが同じ学校の男子生徒とデートしていただなんて、かつてないほどのセンセーションだ。涼のほうは――面白がって自分でいろんな噂を流していたくらいだし、質問攻めを受け流すのは得意かもしれないが、僕にとってはそれはあまりにも酷な状況だ。
「……」
僕の愛する平和と退屈はどこにいったのだろう。碓氷あたりで谷底に落としたのかもしれないな。
途中、自販機で伏見先輩の飲みものを買ってから、僕らはレスト

ハウスを目指す。
「ひとつ聞いていいですか？」
「はい、藤間君」
生徒に解答させる先生のような伏見先輩。
「先輩はよくこういうところに遊びにこられるんですか？」
「うん、くるよ。それがどうかした？　……あ、車椅子で楽しめるのかな、なんて思ってる？」
「あ、いえ……」
と、一瞬口ごもったが――結局。
「……まぁ、正直そういう疑問はありますね」
僕は率直にそれを口にした。
「素直でよろしい。藤間君の疑問も尤もだと思う。でも、こんな足でも案外楽しめるもんだよ。特にここはそういう事情に理解があって、たいていのアトラクションは乗せてくれるしね。さすがにジェットコースターとかはダメだけど」
「それは羨ましいですね」
「ん？」
伏見先輩はハンドリムを回す手を止め、惰性で前に進みながら僕を見上げた。
これは少し配慮の足りない発言だったかもしれない。先輩は乗りたくても乗れないというのに。そう思った矢先、涼のフォローが入った。
「この子ったらその手の乗りものが怖いのよ」
そこはひかえめに苦手と言ってくれ。
「へぇ、それは勿体ない。じゃあ、君にはあたしの代わりにジェットコースターを楽しむ権利をあげよう。涼さん、後でつれてってあげて」
「ええ、そうするわ」
涼はくすくすと笑いながら応じる。
「何を勝手に決めてるんですか。もうすでに2回つき合わされてる

んですよ」
「ならもう一回いってくるといいよ。2回が3回になったって、たいして変わらないって」
「……」
勝手にしてくれ。
「そんなわけで、一緒にきた友達は今、あたしが乗れない系のやつを一気に回ってる最中」
伏見先輩が言うには、友達とはもうずっとそういうスタイルらしい。できることには挑戦する。そのときに助けが欲しいなら助けてもらう。自分にできないことがあっても、友達はそれをするのに遠慮はしないのだという。だから今も彼女の友達は、「すぐに戻ってくるから」と言って伏見先輩の乗れないアトラクションをまとめて回っているらしい。……だから今はひとりなのか。
そういう関係はもしかしたら僕が想像するよりも高度なのかもしれない。
「できないことを数えて嘆くのは最初の1年で終わりにしたの。それにやろうと思えばけっこういろんなことができるし、君にはできないことだってある」
「僕にできないこと、ですか？」
「うん、車椅子バスケ」
きっぱりと言う先輩。
「藤間くん、君は座ったままフリースローができる？」
そして、またハンドリムから手を離し、シュートのフォームを作った。
僕は想像してみる。フリースローラインから座った体勢のまま、膝を使わずセットシュート……ゴールまで届く気がしないな。
「あたしはできるよ。技と腕の力だけで撃つの。それに車椅子バスケってガンガンぶつかる激しいスポーツだから、コートの中で倒れるのもしょっちゅう。倒れたってフエは鳴らないし、誰も起こしてくれないから自分で起き上がるしかない」

聞くからにハードだ。
「知らないなら一度見てみるといいよ。頭の中にあるイメージなんて吹き飛んじゃうから」
僕の心の中を読んだかのように伏見先輩がそう言ったところで、目の前にレストハウスが見えてきた。
レストハウスはグッズショップとつながった休憩所で、さっきちらっと見た感じ中は喫茶店のような内装になっているようだった。
ただ、中に入ろうとすると、その手前に3段ほどの段差があった。
「先に行ってて」
伏見先輩は車椅子を滑らせ、僕たちから離れていく。その先にはスロープがあり、彼女はそれを苦もなく上がり切ってしまった。レストハウスの入り口に着いたのは、僕たちよりも早いくらいだ。
手を貸したほうがいいのかと考える間もなかった。
本当にやれることはぜんぶ自分でやってしまう人らしい。

レストハウスは、隅に自販機が幾つか設置してあるだけで商業機能はなく、テーブルとイスが並ぶだけの本当に休憩のための施設のようだ。家族連れや友達同士でテーブルを囲む姿がけっこうある。朝から遊び通していると、休憩が欲しくなるのがこれくらいの時間なのかもしれない。
伏見先輩は自らの手でイスを一脚どけると、そこに車椅子を滑り込ませた。僕と涼はその正面に並んで座る。
「で、どうなっちゃってるわけ？」
落ち着いたところで彼女は、さっそくアバウトな質問で切り込んできた。
「ことここに至った理由という意味なら簡単ですよ。いわゆる自爆テロに巻き込まれたからというより他は……痛っ」
言い終わらぬうちに、がすっ、と脇腹に肘打ちが突き刺さった。
「痛いだろ」
「藤間くん、もの覚えがいいのは悪いことじゃないけど、それは忘

れましょうね」
　涼は笑いながら怒るという器用な技を披露してくれた。勝手に見せておいて忘れろとは、どこまでも一方的だ。
「え。なに？　どういうこと？」
「残念ながら忘れろとの上からのお達しですので」
「そうね、最初の質問に答えるなら――」
　と、僕の横で涼は少しばかり勿体つけてから。
「こうやってつき合いはじめたのは最近だけど、」

「本当はずっと前からかな」

　ね？――と、最後は僕に投げかけてくる。
「あ、ああ、まぁ……」
　僕は思わず曖昧な発音で返す。
　それは伏見先輩を煙に巻くための嘘か冗談か。それとも……。
「って、ちょっと待て」
　と、そこまで考えてから、はたと気づく。
「誰と誰がつき合ってるって？　まさかと思うが、僕じゃないだろうな」
「あら、見解の相違ね。わたしはそのつもりよ？」
「最初にきっぱり断ったし、あれ以降主張を変えた覚えもないね」
　勝手に決定事項にしないでもらいたいものだ。
　しかし、そこで向かいから笑い声が聞こえてきた。勿論、伏見先輩だ。
「いやぁ、藤間くんには悪いけど、あたしの目にもそう見えるよ。こんなところにふたりっきりできておいて、今さらそれはきかないじゃないかな」
　それにさぁ――と続ける。
「さっきは名前で呼び合ってたじゃん」
「……」

思わず項垂れそうになった。
やっぱり聞かれていたか。あれがきっかけで彼女はこちらに気がついたのだから、当然といえば当然か。隣からは涼も「聞かれてたみたいね」と囁いてくる。……だからなぜ笑っている。
「涼さんってさ、大人っぽいからあたしたちでも涼さん涼さんなのに、それを呼び捨てだなんてなかなかのツワモノだよね」
「それについては本日限定ですよ。普段はちゃんと『槙坂先輩』ですから」
敬意の有無については保証しないが。
「真さえよければ、わたしはずっとでもいいけど？」
「勘弁してくれ。僕の平和な学校生活が本気で崩壊する」
僕はヤケクソ気味にジュースを煽る。
そこでまた伏見先輩がけらけらと笑った。
「藤間くんって面白いよね。あたしには敬語で、涼さんにはそうじゃないんだ。普通は逆じゃない？」
「唯子も気づいた？　真ったら最初からこうなのよ」
「人は大なり小なり相手を見て態度を決める。だったらこれは当然の帰結だろう」
「ひどいことを言われた気がするわね」
わざとらしくため息を吐く涼。
「でも、いいんじゃない。きっとそこには藤間くんなりの『区別』があるんだろうしね」
横から涼が「そうなの？」と顔を覗きこんでくるが――知るか。僕は肘を突き、不貞腐れたようにそっぽを向いた。
「それにしても、涼さんがねぇ……」
伏見先輩は改めて僕らを眺めているふう。まぁ、今まで様々な噂や憶測が流れつつもその実体をつかませなかった（もとより実体などなかったのだが）、その槙坂涼がこうして実際に男と一緒に遊園地にいるのだ。逆の立場なら僕だって同じようにしただろう。

「意外だけど、これはこれでお似合いなんじゃないかな」
どんな感想が出てくるのかと思いきや、なぜか納得されてしまった。
しかも、よりによってお似合いときた。
「……」
くそ。これでまた顔を戻しにくくなったじゃないか。
――間ができた。
僕がこんな態度だからだろうか。さすがに先輩ふたりを前にしてこれは不味いな――と思ったとき。
「ねぇ、唯子」
涼が口を開いた。
「悪いんだけど、今日のことは誰にも言わないで欲しいの」
僕は反射的に彼女を見た。彼女も僕を見ていた。
「真もそのほうがいいでしょう？」
と。
目の前で微笑まれ、不覚にもどきっとした。
「あ、ああ……」
それは兎も角。
当然それはそうなのだが、涼が自分からそう言い出すとは少々意外だった。てっきり話題の種をまくのが好きな彼女のことだから、自分から拡散させるくらいのことはやるのではないかと思っていた。
「そっか。せっかくいいネタをつかんだと思ったんだけどな。涼さんの頼みじゃ仕方ないっか。でも、他の子たちと会ったら知らないからね。それはそっちで気をつけといてよ」
「ええ、そうするわ」
伏見先輩に見つかったときはどうなるかと思ったが、これでひとまずは安心のようだ。
「おっと、もうこんな時間」
その彼女が手首に巻かれた細い腕時計を見て声を上げる。

「あたしは先に出るから。じゃあね、ふたりとも。お互い楽しもう！」

そして、そう言うとまたハンドリムを操作して、滑らかな動きでレストハウスを出ていった。

楽しもう、か。

人目を気にしてる状況で楽しめるとも思えないのだが。

第8話　その4

結局その後、いくつかのアトラクションを回り、少し早めに遊園地を出た。
朝に待ち合わせした駅に着いたのは、辺りが少し暗くなりはじめたころ。僕はそのまま電車に乗っていてもよかったのだが、涼を家まで送るべきかと思い、一緒に降りた。
「この前のカフェにでも寄る？」
改札口を出たところで涼が提案してきた。
それはいいな。確か『天使の演習』という名前だっただろうか。このまま彼女を送って終わりというのも少々もの足りないと思っていたところだし、今日の締めにも相応しいだろう。
いい案だ――そう返事をしようとしたとき、僕たちの目の前に立ちふさがるやつらがいた。
「よぉ、また会ったな」
それは朝のチャラい二人組だった。しかも、ご丁寧に3人ほど仲間を連れてきて、5人に増殖している。まさかここでずっと、また戻ってくるとも限らない僕らを待っていたのか？
「……暇なやつ」
「あぁ？」
僕の冷ややかなひと言にカチンときたのか、ひとりが凄んできた。が、こいつらが行き交う一般人を睨みつけながら、ずっとここで待っていたかと思うと苦笑しか出ない。
「真……」
「大丈夫だ」
僕の後ろに隠れるようにして不安げに囁く涼に、そう返す。
「朝はよくもやってくれたな」
チャラ男その1だ。ひねり上げた肩はひとまず動くようになったらしい。

この状況で今さら何の用か確認するまでもないだろう。
「さすがに僕でも5人はむりだな。3人くらいにしてくれないか」
すると彼らは互いに視線を交わし、ぴったり3人がニヤニヤ笑いながら前に進み出た。ここまで言葉なし。見事なアイコンタクトだ。
さて、じゃあ、降りかかる火の粉を払うとしようか。
師曰く、先手必勝。
僕も律儀に正当防衛が成立するのを待つ気はない。
出てきた3人をそれぞれ素早く観察し――行動に出る。余裕と無防備を履き違えたままノコノコ近づいてきた馬鹿の腹に、遠慮なく拳をめり込ませた。腹を押さえて膝から崩れ落ちる。――まずはひとり。
女性の声で悲鳴が上がった。突如としてはじまった喧嘩に驚いたのだろう。……まったく。僕だってこんなところで乱闘をする羽目になるとは思わなかった。
「てめぇ！」
いきなりひとりがやられたのを見て、次のやつが向かってくる。チャラ男その2だ。朝と同じだな。お前は動くのがワンテンポ遅い。
僕はそいつの顔面に、カウンタ気味にハイキックを決めた。ゴッ、と鈍い衝撃。男の足が止まり、上体が仰け反る。その顔は何が起こったのかわからないといった表情だ。そこに今度は逆足で、後ろ回し蹴りを脇腹に喰らわせる。それでふたり目は終わりだった。
残る3人目に向き直れば、もう殴りかかってきていた。
「おっと」
それを間一髪で避け、逆にこちらから顔に拳を叩き込んでやった。でも――まだ倒れるなよ。僕はそいつの服を掴んで引き寄せると、その腹に膝蹴りを撃ち込む。一発、二発、三発……。手を離すとそいつは、血でも吐きそうに咳き込みながら地面に転がった。
これで3人。
下がっていたふたりに目を向ければ、呆気にとられて一歩も動いていなかった。こちらの望み通りに3人でかかってきてくれたり、

今まで待ってくれていたり、つくづく思い通りにしてくれる連中だ。ありがたいな。
「この野郎っ」
やっと我に返り、チャラ男1が飛びかかってきた。
マズいな。笑ってしまいそうだ。
「……お前、バカだろ？　3人を相手にした僕に、ふたりで勝てると思ってるのか？」

そして――。

「大丈夫……？」
「痛っ」
水に濡らしたハンカチが傷に染みる。涼は切れた僕の口の端を拭きながら、心配そうに顔を覗き込んできた。
「仕方ないさ。相手は5人なんだ。……1、2発はもらう」
勿論、多少もらっても全員沈めたが。
ただ、油断しているやつら3人よりも、その気になったふたりを相手にするほうが難度が高いのは自明の理だ。無傷というわけにはいかなかった。
――今、僕たちは駅の近くの公園にいた。
ひと通り全員を倒したところで、涼の手を引っ張ってここまで逃げてきたのだ。今はベンチに座って、公園内の自販機で買った水で傷の手当ての最中だ。
ふと、涼の手が止まった。
「……」
何かを考えているふう。
どうしたのだろう。――だが、僕は直感的にそれを問うのを避けた。
「ありがとう。後は自分でやるよ」
彼女の手からハンカチを取り上げ、口もとの傷に当てる。

「ッ」
やっぱり染みるな。
「本当に大丈夫？」
「ああ。これくらいたいしたことないさ。すぐに治る」
さすがに明日にはきれいさっぱりというわけにはいかないだろうが。
「ごめんなさい。わたしのせいで」
「いや、涼は悪くないよ。どう見たってからんできたやつらが悪いし、後は穏便にすませられなかった僕のせいか」
自嘲する。
朝の時点で平和的にあしらっていればこんなことにはならなかっただろう。でも、思わずかっとなってしまったのだから仕方がないし、そうさせた連中が悪いということにしておくか。
「ねぇ、前から喧嘩はよくしてたの？」
「……そんなに好戦的に見えるか？」
その質問に虚を突かれたが、すぐに問い返した。自分でもよく言うと思う。
「でも、慣れてるみたい」
「男なんて少なからずこんなものさ」
そんなわけはないのだが、確かめるように訊いてくる涼にはそう答えておいた。
「さて、送るよ」
話はこれまでとばかりに、僕はベンチから立ち上がった。残念だがカフェに行くのはやめだ。そんな雰囲気ではないし、それ以前にこんな顔で行ったら店も驚くだろう。
涼はしばし僕を見上げていたが、すぐに自分も頭を切り替えたようだ。笑みを浮かべる。
「今日は両親がいるわよ？」
「何を聞いていたんだ？　送ると言ったんだ」
よりにもよってそんな切り替え方か。まぁ、彼女らしいが。

涼を家まで送り、上がっていけとバカなことを言うのを振り切り――玄関で別れて帰ってきた。
すっかり暗くなった住宅街を歩きながら、僕は電話をかける。
『おう、どうした？』
相手は美沙希先輩だ。
「ちょっと頼みたいことがありまして」
『あン？』
訝しげな声。
「『猫目の狼』殿に潰してもらいたい連中がいるんですよ」
『……言ってみろよ、舎弟』
が、それは一転して弾むような調子になった。
僕は今日のことをかいつまんで話――そうと思ったら、涼の名前が出た瞬間、「ぜんぶだ。今日あったことぜんぶ話せ」と言われ、細大漏らさずすべて話す羽目になってしまった。
朝の出来事からはじまり、先輩の好奇心を満たすためだけに遊園地でのこと、そして、ついさっきの乱闘の件――そこまで話し終えるころには、僕は駅に着いて、自動改札を通っていた。吐き出された通学定期を取り上げ、ホームへ向かう。
『んで、これ以上槙坂に手を出さないように、その連中を潰しといてくれというわけだ。このアタシに』
「そういうことですね」
涼には言わないでおいたが、あの連中がこの辺りを主たる行動範囲にしていれば、また会ってしまう可能性がある。それを想定して彼女の安全を確保しておきたい。
「とは言え、ちょっと釘を刺すくらいで大丈夫だと思いますけどね」
さっきは先輩の興味を引くために潰すという表現を使ったが、そこまですることはないだろう。一時期この界隈で暴れまわった、知る人ぞ知る『猫目の狼』の知り合いだとわかれば、二度と手出しをしようなどと思わないはずだ。

『わかったよ。お前の頼みだ。後でその連中の特徴をおしえろ。挨拶にいってやる』
「お手数をおかけします」
これで安心だな。
『しっかし、お前、まんまと槙坂にハメられたな』
「は？」

『伏見に見つかったの。あれ一から十まであの女の計算通りだろ』

「……」
そう、なのか？
僕は振り返る。
本当は先週だったのを土壇場で延期したのは、伏見先輩たちの予定を知ったからか。そして、行った遊園地で知り合いの姿を探し、ついに見つけるとそこで彼女は僕を見失った振りをした。僕はそうと知らず、彼女の名前を呼ぶ。涼、と――。
そういうことなのか……？
『明日さっそく学校で妙な噂が流れたりしてな』
電話の向こうからチェシャ猫の笑い声が聞こえてきた。
「まさか。いや、でも……」
槙坂涼という人間は何よりも面白いことを好む。自分がどれだけ影響力があるかを熟知していて、その上で素知らぬ顔で周りを振り回す。そういう精神性の持ち主だ。
「……大丈夫ですよね？」
『知るか、ばーか。飛び散れ』
かくして、通話は一方的に切られた。
思わず呆然とする。たちの悪い冗談だ。そう思いたい。
気がつけばいつの間にか電車がホームに入ってきていて、僕は慌てて飛び乗った。

第9話

月曜日。

『明日さっそく学校で妙な噂が流れたりしてな』

美沙希先輩のそんな不吉な予言に嫌なものを感じながら学校に行けば、しかし、特に変わった様子は見られなかった。どうやら美沙希先輩の、そして、僕の単なる考えすぎだったようだ。

月曜日の1時間目は各クラスでのホームルーム。

ここ、明慧学院大学附属高校では単位制が導入されていて、生徒が自由に授業を履修できる。が、それでもクラスというものは存在していて、英語や体育などの必修科目はこのクラス単位で受けることになっている。

所定の小教室で浮田とかいう名前のクラスメイトと雑談を交わしてみても、槙坂涼の熱烈なファンであるこいつの口から新しい話題が上るようなことはなかった。

2時間目からは通常の授業。行った先の教室では他のクラス、他の学年の生徒が入り混じるようになるが、この授業には知り合いがいない。僕はいつものように本を読みつつ周りの雑談に耳を澄ましていたが、やはり噂の類が飛び交っている様子はない。

ここまできてようやく僕は人心地ついた。ほっとする。

いよいよ杞憂だったようだ。

だいたいにして、そんな噂が流れるはずがないのだ。美沙希先輩によれば涼がわざわざ見つかるよう画策したとの予想だが、しかし、結局は唯一の目撃者である伏見先輩には彼女自身が口止めをしている。

こうやって筋道立てて否定してみるのだが、しかし、それでも不安は拭えない。もうひとり言い振らしそうな人間に心当たりがあったからだ。

3時間目の授業の前、僕は先生を待ちながら、一抹の不安を抱え

つつ携帯電話を手で弄ぶ。
携帯電話が揺れればストラップも揺れる。黒のベルトストラップには、一緒に小さなかわいらしいマスコット人形もついていた。……似合わないな。でも、これは昨日槙坂涼とデートをして、お互いにプレゼントし合った記念品のようなものだ。しばらくはこれをつけていようと思う。
涼はこれと色違いの赤。それをつけた携帯電話を持って、今もどこかの教室にいるのだろう。そう考えると思わず不安を忘れて不思議な気分になる。
と、そのとき。
「うっす」
浮田だった。こいつとは1時間目に会い、2時間目で一度別れて、再度合流。ひとりひとり時間割りの違う明慧ではこういうことは珍しくない。
「聞いたか？」
浮田は隣の席に座りながら切り出してきた。

「我らが槙坂先輩、昨日遊園地でデートしてたんだってよ」

「……」
「どうした？　急にケータイしまって」
「いや、気にしないでくれ」
僕はスラックスのポケットに携帯電話を突っ込みながら返事を返した。……しばらく人の前では使えないな。
「で、槙坂先輩のそのデートの相手ってどんなやつなんだ？」
こうなってしまえば僕が気にしなければいけないのは、まずそこだ。
「それがはっきりしないんだよ。明慧の生徒じゃないのかもな」
「……そうか」
まぁ、そうだろうな。僕だと知られていたのなら、浮田が会うな

り僕の首を絞めにかかったはずだ。僕の名前は挙がっていないようで安心した。
「まさかと思うが、藤間じゃないだろうな」
「僕が？　どうしてさ？」
ナチュラルにすっとぼけながら問い返す。
「お前、最近何かと槙坂先輩と一緒にいるじゃん」
「ちょっとしたきっかけでお互いの顔を知って、よく話すようになったのは確かさ。でも、休日に会うほどじゃない」
「だよな？　もしお前だったら嫉妬のあまりボコボコにしてるよ、俺」
くるならきてみろ。僕も浮田なら遠慮なく過剰防衛ができる。その昔、「相手が3人までなら勝てるようになれ」と美沙希先輩が無茶なこと言ってくれたが（そして、僕もそれに応えたが）、こいつが5人でも負ける気がしないな。尤も、中学生のころじゃあるまいし、よっぽどのことがない限り今は喧嘩などしないが。
そこでチャイムが鳴った。もう間もなく先生がくるだろう。浮田が前を向いて座り直す。
「いったい相手は誰なんだろうな」
「さぁね」
本当に。誰だろうな、こんな噂を流してくれたのは。
「……」
勿論、僕はその最有力容疑者を知っている。まず彼女しかいないだろう。僕は悪魔の笑みを浮かべた天使の顔を頭に思い描き、浮田に気づかれないように小さくため息を吐いた。
そのまま浮田とは昼休みまで一緒で、そこからさらにふたりの友人と合流して学食で昼食をとった。当然のように話題は槙坂涼についてで、特にいつも以上に興奮している浮田は非常に鬱陶しかった。
そうして今、僕はひとりで次の教室に向かっていた。
「まったく。よけいな噂を広めてくれる」

思わず愚痴がこぼれる。尤も、僕に直接の被害があったわけではないが。

と、そこで前方に女子生徒の集団に見知った人物が混じっているのに気づいた。車椅子の後姿。その右にふたり、左にひとりの横一列で、講義棟と講義棟を結ぶ小道いっぱい広がって歩いている。勿論、車椅子は伏見唯子先輩だ。涼は一緒ではないようだ。

話の内容まではわからないが、楽しげな笑い声が聞こえてくる。話題はやはり槙坂涼の例の噂だったりするのだろうか。

「伏見先輩」

僕はふと思いついて、後ろから早足で追いつき、呼びかけた。伏見先輩はハンドリムを回していた手を止めて車椅子を停止させると、腰をひねって振り返った。同時に他の3人もこちらを向く。

「お、藤間君じゃん」

彼女は僕を見るや明るい笑顔を見せた。快活なスポーツ少女然とした人だ。

「どうも。ちょっと話があるのですが、少しだけいいですか？」

「ん？　ああ、そういうことね。いいよ」

頭の上にクエスチョンマークが飛んだのは一瞬だけ。すぐに何のことかわかったらしく、快諾の返事が返ってきた。友達には「先に行っててくれる」と言って先を歩かせると、僕と伏見先輩はその後ろをついていくようにして歩き出した。ゆっくりと歩を進め、前のグループとある程度距離が開いたところで僕は切り出す。

「例の話、先輩の耳にも入ってますか？」

「そりゃもちろん。さすが涼さんだよね。誰だってデートくらいするのに、それが涼さんだともう大騒ぎ」

伏見先輩は嬉しそうに語る。一挙一動すべてが話題になってしまう友達がいて嬉しいのかもしれない。

彼女はハンドリムを回して車椅子を進める。膝の上にテキストやノートを乗せているのだが、ぱっと見て2教科分ありそうだ。2時間続けて同じか、近い教室で授業があるのだろう。たいていの生徒

もロッカーから遠い教室で授業が続くときはそうする。移動が不便な彼女なら尚更だろう。かく言う僕も、午後の授業はふたつとも同じ講義棟であるので、2教科分のテキストを持っている。
「まさかとは思いますが、伏見先輩ではありませんよね？」
「言い振らしたの？　あったりまえでしょー！　涼さんに言わないでって頼まれてるのに」
「ですよね」
　僕とて本当に伏見先輩だと思っているわけではない。いちおう念のための確認だ。
「でも、いったい誰だろうね。うちのグループの誰かだったら、見たその場で大騒ぎしてるだろうし」
「……」
　彼女はハンドリムを回す手を止めて慣性の力に任せて進みながら首を傾げた。すぐに車椅子の速度が落ちてくる。その横で僕は何も言わないでいた。勿論、見当がほぼついているからだ。
「……他にも明慧の生徒がいたのかもしれませんね」
「かもねー。それか、うちの関係者じゃないけど涼さんのことは知ってる、とか？　涼さん、この辺りじゃ超美人の高校生として有名だから。時々他校の生徒も見にくるし」
　槙坂涼にまつわる逸話としてそういう話も聞いたことがないわけでもないが、本当なのだろうか。もしそれが本当なら、いちおうその線も考えられるな。情報伝達の速度が速すぎる気もするが。
「どちらにしても、藤間君にはラッキーだったよね。涼さんを見た人は藤間君のことは知らなかったわけでしょ？」
「そういうことになりますね」
　犯人があえて伏せていたのかもしれないが。……すでに犯人呼ばわりしている自分がいるな。
「誰も涼さんと一緒にいたのが藤間君だとは思わないだろーねー」
「でしょうね。僕ですらこんなことになるとは思っていませんでしたから」

苦笑せざるを得ないし、実際、僕は苦笑した。
入学してから知った槙坂涼という人物は容易に近づける相手ではなく、もうずっと遠くから眺めているだけのつもりだったのだけどな。
「本当のことを知ってるあたしとしては、言いたくてうずうずしてるんだけどね」
「……」
いちばん危険なのはこの伏見先輩のような気がしてきたな。
「前から聞きたかったんだけど、涼さんと藤間君っていったいナニつながり？」
「さぁ？　何なんでしょうね」
それは僕も知りたい。いったいいつのことがトリガーになったのか。彼女が僕に接触してきた直前の何かなのか、入学直後のあれか。それとも……。
僕たちの前を歩くグループが右手の講義棟４のほうへと向かった。伏見先輩も当然そちらなのだろう。僕はその反対の講義棟３だ。この辺で話を切り上げよう。聞きたいことは聞いたし。
「きっと涼のきまぐれですよ。そのうち飽きたら捨てられると思いますよ」
僕は笑いながらそう言って、伏見先輩と別れた。

今日、月曜日は本来なら涼と会うことはないはずだった。例の噂で持ちきりの今は特に、下手に会えばよけいな勘繰りをされてとばっちりを喰らう羽目になりかねないので、僕も彼女の姿を探すことはしていなかった。
講義棟３の前には、自販機コーナーとベンチがある。
今、僕はそこで缶コーヒーを飲んでいた。ロッカーに戻る必要がなく、近くの教室に移るだけだと１５分の休み時間は少々長い。時間潰しだ。こんなふうにのん気にベンチに座っている生徒は僕以外にいない。皆限られた時間で次の教室に行こうと、忙しなく行き来

している。たまにこの自販機コーナーにくる生徒もいるが、何か一本買ってすぐに行ってしまう。
僕もこれを飲んだら教室に戻ろう――そう思ったときだった。
「だーれだ」
不意に僕の視界が真っ暗になった。どうやらひとりこっそり近寄ってきたのがいたようだ。この声は間違えるはずがない。
「人の姿をした悪魔」
「……このまま指を目に押し込んでやろうかしら」
「オーケイ。僕が悪かった」
そんなことをされたら目の疲れが取れるどころの騒ぎではない。
直後、再び視界に光が戻った。腰をひねって見上げてみれば、そこにいたのは当然のように黒髪ロングのオトナ美人、槙坂涼だった。
「あなたって、わたしのことをそんなふうに見てたのね」
彼女は呆れたようにそう言う。……人の目を抉ろうというやつが悪魔でなくて何だというのか。
「りょ……ン、ンンッ」
危うく名前を呼びかけて、誤魔化すように咳払いに切り替えた。思わず周りに目をやる。行き交う生徒がちらちらとこちらを見ていた。
そんな僕を見て涼は大人っぽく笑う。
「わたしは涼でもいいのよ、真」
「あれは昨日だけのはずですよ、槙坂先輩」
僕はむすっとして言い返し、そのまま黙り込んだ。
涼はくすくす笑いながら前に回り、僕が座っているところから90度写した位置のベンチに腰を下ろす。
「会いたかったわ。それなのにずっと質問攻めで会いにこられなかったの。どうも昨日のデート、誰か見てたみたいなの。大変だわ」
そう言って頬に掌を当て、ため息を吐く涼。……わざとらしい。ため息を吐きたいのはこっちだ。
「何を言ってる。あなただろう、その噂を流したのは」

「ええ。もちろん」
彼女はけろっとした顔で、あっさり認めた。惚けたり誤魔化したりする気はないらしい。
要するにそういうことだ。情報の発信源は目撃者ではなく当事者。それなら伏せたい部分も思いのままだ。
「でも、どうにも辻褄が合わないところがある」
「あら、何？」
彼女は興味深げに聞き返してくる。
「昨日のことはぜんぶ人に目撃させるためだった」
「ええ、その通りよ」
そこまでは正解――と、まるで生徒の解法を聞く教師のように、微笑みながらうなずく。
「そのお膳立てをしたわりには伏見先輩には口止めして、結局は自分で噂を流している。これでは一貫性がない」
「ああ、そのことね。思い出したのよ」
思い出した？　何を？
「よくよく考えたら唯子は話好きだけど、知らず知らずのうちに誇張してしまうところがあるの。噂の出どころになってもらうには少し不向きね」
「……」
それは恐ろしいな。やはりあの人は危険人物だったか。
「それに実験をしてみたくなったの」
と、涼は妙なことを言い出す。実験？
「ここで問題です。今日わたしが受けた質問の中でいちばん多かったのは何でしょう？」
「うん？」
今日の涼は心なしかテンションが高いなと思いつつ、僕は考える。
男なら槙坂涼がデートなんて信じたくないから『あの噂は本当なのか？』だろうか？　女の子ならさらに突っ込んで『相手は誰？』あたりか？

「時間切れよ」
「答えは『一緒に行ったのはやっぱり藤間くん？』でした」
「ぶっ」
思わず噴いた。
「ちゃんと否定してくれたんだろうな？」
「残念だけど、わたし嘘は苦手なの」
「……待て」
してないのか？　それにどの口でそんなことを言うか。四六時中悪巧みばかりしてるくせに。
「いつも通り『想像に任せます』って言っておいたわ」
「……」
積極的に肯定はしていないわけか。そうやって相手の反応を見て楽しんでいるのだろうな。
「どうする？　わたしたちつき合ってると思われてるみたいよ」
可笑しそうに笑いながら言う涼。
実験とはつまるところその調査だったわけか。
「どうもこうもないさ。勝手に勘違いさせておけばいい。勿論、そうかと問われたら否定はするけど」
「本当につき合うという選択肢はないの？」
「ないね」
そこはきっぱり主張しておく。
「相変わらず強情ね」
ほっといてくれ。僕はヤケクソ気味に缶コーヒーを煽り、間、涼は真顔でじっとこちらを見ていた。怒ったのだろうか。
が。
「ねぇ。そのコーヒー、ひと口飲ませてくれない？」
人の心配をよそにそんなことを言い出す。そんなことできるか。
「気づいていないかもしれないが、実はそこに自販機があるんだ。

喉が渇いたのならそこで何か買うといい。ああ、よかったらお金も僕が出そう」
「そんなにはいらないもの。いいから貸しなさい」
涼は腰を浮かして手を伸ばすと、僕の手からさっと缶を奪った。
再びもとの位置に戻り、一瞬の躊躇もなく缶に口をつけた。こくり、と喉が鳴る。僕はそれを黙って見ていた。
「こういうのって間接キスっていうのよね」
悪戯っぽく笑う涼。
「らしいね」
「でも、実感がないわ。本当のキスの経験がないから？」
知るか、そんなの。
「はい」と戻ってきた缶を受け取り、僕もそれを飲む。
「あなただって躊躇いもなく飲むんじゃない」
「まぁね。それこそご大層な名称ほど実感があるわけでもなし」
嬉々として口をつけてもそれはそれで変態くさいが、眉をしかめて缶を睨むほど潔癖症でもない。
「そんなことができて、昨日はデートもして。もうつき合ってるようなものじゃない」
「それとこれとは別。僕にも認めたくないものがある」
「嫌われたものね」
肩をすくめる涼。
「もういいわ。それじゃあね、天邪鬼さん」
ツンとした口調でそう言うと、彼女はベンチから立ち上がってスタスタと歩いていってしまった。
予想外の展開に呆然とする僕。
「今度こそ怒らせた、か……？」
涼の後姿が見えなくなってからつぶやいた。
コーヒーの残りを一気に飲み干し、空になった缶をゴミ箱に投げ込んだ。くそ。別に嫌ってるわけじゃないんだけどな……。自己嫌悪。調子に乗りすぎたか。

と、不意にスラックスのポケットの中で携帯電話が鳴った。音声通話だ。誰だ、こんなタイミングで。口に出さずに毒づきながら端末を引っ張り出せば、サブディスプレィには槙坂涼の名前が。
「……もしもし」
何を言われるやら、と警戒と覚悟をもって電話に出る。
『怒ったと思った？』
いきなりそれだった。
あのな……。
ちょっとほっとしたのも確かだが。
『大丈夫よ。怒ってないから。でも――』
直後、プツリと通話が切れた。
「……」
これも悪戯だろうか。確かにこんな切られ方をしたら続きが気になるが。
――また携帯電話が鳴った。
今度はメール。今切ったばかりの涼からだ。メロディが鳴り終わらないうちにそれを開くと、そこには――。
『そろそろお遊びは終わりにしましょう？
明日の放課後、例のカフェで待っています』

第９話（後書き）

５月２７日投稿
同月２８日脱字修正

最終話　その1

メールについてずっと考えていた。

『そろそろお遊びは終わりにしましょう？
明日の放課後、例のカフェで待っています』

あまりにも唐突に送られてきたメール。
どういう意味だろうか？
その意図は？
お遊びとは何だ？　そして、それが終わればどうなる？

「ちょっとぉ。真、ちゃんと聞いてる」
隣から投げかけられた非難交じりの声に、僕は我に返った。
今は登校途中。そう言えば駅を降りたところで、これ――こえだを拾ったんだったな。
「悪い。何の話だった？」
「聞いとけよぉ」
こえだこと三枝小枝は頬をふくらませる。ついでに「まぁ、改めて言うような話じゃないけど」とつけ加えた。
「今日の真ってば、元気なくない？」
「そうか？」
その自覚はない――が。
「考えごとをしてたからかもな」
「悩み？」
「というほどのものでもないから心配するな。それに否が応でも放課後には解決してるだろうし」
槙坂涼は放課後を指定して僕を呼びつけている。そこで何らかの

イベントがあるのは確実だろう。
「ふうん」
こえだは面白くなさそうな調子でそう言い、
「我が世の春を謳歌してる真が悩みねぇ」
「何だよそれ」
やけに棘のある口調だ。
「昨日から槙坂さんがデートしてたって噂が出てるけど――あれの相手って真でしょ？」
「……想像に任せるよ」
ずばりと切り込んできたな。
「何それ。槙坂さんと同じじゃん」
「お前もあの人に噂の真偽を問い質したクチか？」
「たまたま近くにいただけ。……でさ、槙坂さんって、一緒にいたのが真かって聞かれると、ちょっとだけ嬉しそうな顔するの」
「ことが思惑通りに進んで嬉しいんだろ」
あれはそういう種類の悪魔だ。
「まぁ、こえだにはちゃんと言っとくよ。――本当だ。日曜に一緒にいたのは僕だ」
「やっぱり。だと思った。ここんとこべったりだもんね」
と、不貞腐れたようなこえだ。
その様子を見ながら、僕はふと思い出す。
「お前。あの先輩のこと嫌いなのか？」
「え？　別にそんなことない、け、ど……？」
言いつつ僕の反応を窺うようにこちらを見る。小動物の目だ。僕は一度その視線を真正面から受けて、
「あの人が言ってたぞ。仲良くしたいけど、お前にその気がないみたいだって」
「うー……」
こえだは小さな唸り声をひとつ。何やら考えている様子で、それきり黙ってしまった。

「できればでいいが、仲良くしてくれよ。知り合いふたりが仲が悪いなんて、あまり気持ちのいいものじゃない」
「ま、まぁ、あの槙坂さんと知り合いになるチャンスだし。それにどうせ勝てそうにないし」
「お前はあの完璧超人とどのジャンルで張り合って勝とうと思ったんだ」
尤も、実際は悪魔超人だが。
「いいのっ。真の知らなくていいことだからっ」
こえだはぷいとそっぽを向く。
「あーあ、あたしっていいセンパイを持ったなぁ」
「それたぶん褒めてないだろ？」
「わかってるじゃーん」
笑ってそう言ってから、彼女は少しだけ歩調を速めた。
僕としてはこえだがどう思っていようと、かわいい後輩を持ったと思っているんだけどな。そして、いちばん好きだと素直に思えたらもっとよかったのにとも思う。

唐突に現れた槙坂涼は告げる。
『これまでのことは単なるお遊び。でも、もうそれも終わりね。いい夢が見れたでしょ？　わたしもいい暇つぶしになったわ。……さよなら』
「……」
踵を返し、遠ざかっていく彼女。
その後姿を眺めながら僕は、あぁなるほどな、と納得していた。

そこで目が覚めた。
直後、先生の「じゃあ、今日はここまで」という声が耳に入ってきた。どうやら授業中に眠っていた僕は、高校生活で培った体内時

計によってか、それとも教室内の空気を感じ取ってか、授業終了に合わせて覚醒したらしい。
と、状況を分析しているうちに、壇上では先生がピンマイクを外して教室を出ていった。
「おーし、行こうぜ。藤間」
「ん？　ああ……」
浮田だ。
そう言えば、昼休みだったな。この男が元気になる時間だ。
しかし、授業の実に半分の時間を睡眠に費やした僕の体は、すぐには動けそうもなかった。こんなに寝たのは、昨日メールについて考えすぎて睡眠不足になっていたからだろうな。
「悪い。先に行っててくれ」
「そうか？　わかった。早くこいよ」
僕はそれに手を上げて応える。
すでに授業の準備の3倍の速さで荷物をまとめていた浮田は、疾風（はやて）のように教室を飛び出していった。
一方、僕は緩慢な動きでテキスト類を重ねながら、さっきの夢を思い出す。……まったく。起きた瞬間に忘れてしまう夢も多いのに、こんなときだけはっきりと覚えているのはどういうことだろうな。
「……」
深々とため息を吐く。
正直、昨日の槙坂涼からのメールをそう解釈しなかったわけではない。むしろそう考えたほうがしっくりくるかもしれない。そのうち飽きたら捨てられると思いますよ――昨日、自分でも自嘲気味にそう言ったのを思い出した。
そう考えると、今日という日は都合がいい。火曜日は彼女と同じ授業がないから放課後まで顔を合わせず、いきなりクリティカルな話題を切り出せるのだ。
「こんにちは」

「！？」
完全に不意を突かれた。
振り返ればこの階段席の通路に槙坂涼が立っていた。わざわざ後ろから近づいてきたのは、何の悪意があってのことだろうか。
「……どうしてここに？」
「あなたがなかなか出てこないからでしょう。教室の外で待っていたのよ？」
「あ、ああ、悪い」
って、悪いのは僕なのか？　約束は昼休みではなく放課後だったはずだ。しかも、学校ではなく例のカフェ。そう言おうとしたのだが、槙坂先輩が先に次句を継いだ。
「でも、丁度いいわ」
言いながら肩から提げていたトートバッグを机に置く。
「何だこれ？」
「もちろん、お昼ご飯に決まってるわ」
ここで食べる気か？
「……そうか。僕はいつも通り学食だ。悪いが、あなたひとりで食べてくれ」
僕は重ねたテキストを抱え、立ち上がった。まるで逃げるようだ。何から？　きっと僕はここでその話を切り出されるのを恐れているのだろう。いずれ放課後になれば嫌でも聞くことになるのに、今この場から逃げたいのだ。
「待って。ちゃんと藤間くんのもあるわ」
トートバッグから出てきたのは、少し大きめのランチボックスがふたつ。ひとつはバスケットタイプだった。
「……」
「早く座って。ひとつそっちに詰めてね」
僕は渋々言われた通りに腰を下ろした。さっきまで座っていた通路側の席ではなく、もうひとつ内側だ。

教室には弁当組やらまだ席で喋っているグループやらでまばらに生徒が残っていて、僕らの様子を見るやなんだなんだとざわつきはじめた。……奇遇だな。僕も同じ気持ちだ。

網の目のランチボックスを開けると、中にはサンドイッチがきれいに並べられていた。

にしても、何を考えているのだろうな。わざわざ放課後に呼びつけているくせに、そんなことなど忘れたかのような態度だ。

「ハッシュドビーフじゃないのか」

あまりの不可解さに、意味のない文句が口をついて出た。

「そんなわけないでしょう。もちろん、あなたさえよければいつでも作りに行くけど？」

「……僕が悪かった」

冗談じゃない、彼女を家に入れるなんて。前に風邪をひいた日に強襲されたときもたいがいだったが、今はあのとき以上に自分が何を言って何をやるか自信がない。

もうひとつのランチボックスはサイドメニューのようだった。チキンやポテトなど。油を使ったものがちょっと多いような気がしたが、その分サンドイッチのほうはハムレタスやタマゴなど、女性好みのさっぱりしたものが多かった。

「これ、そこで買ってきたわ」

最後に取り出したのは2本の缶コーヒー。

あれよあれよという間に準備が整い、気がつけば今さらいらないとは言えない状況になってしまっていた。

結局、僕は諦めて頂くことにして、サンドイッチに手を伸ばした。槙坂涼製なら味は保証されているし、これで一食分が浮く。

「今は何を読んでるの？」

食事の最中、不意に槙坂先輩が聞いてきた。彼女の視線は重ねたテキストの上に乗っている文庫本に向けられている。本には書店のカバーがついていてタイトルはわからない。

「『妖魔の森の家』」

「ジョン・ディクスン・カー？」
「そう。僕としてはカーなら『火刑法廷』が読みたいんだけどね」
しかし、絶版して久しい。早くどこかで再出版してくれないだろうか。
「『いずれの読者にもすべて、その人の図書を』。出版業界も見習ってほしいものだな」
「ランガナタンね」
「その通り」
よく知ってるな。
以前こえだにこの話をしたら「ランガナたん？」などと、数学者にしてインド図書館学の父をやたらとフレンドリィに呼びやがった。そのくせ自由に関する権利宣言はどこからか知識を仕入れていたようだが。あぁ、僕が貸した本か。
「でも、第2法則だった？　それとも第3？」
「第2だな。とは言え、ランガナタンは第1と第5だけ知っていれば十分さ」
つまり、
Ｔｈｅ　Ｆｉｒｓｔ　Ｌａｗ：Ｂｏｏｋｓ　ａｒｅ　ｆｏｒ　ｕｓｅ．／第1法則：図書は利用するためのものである。
Ｔｈｅ　Ｆｉｆｔｈ　Ｌａｗ：Ａ　ｌｉｂｒａｒｙ　ｉｓ　ａ　ｇｒｏｗｉｎｇ　ｏｒｇａｎｉｓｍ．／第5法則：図書館は成長する有機体である。
の、ふたつだ。
「前から聞こうと思ってたんだが――」
「どうぞ。遠慮しないで何でも聞いて」
一瞬、彼女を困らせるためだけに本当に何でも聞いてやろうかと思ったが、すぐに思いとどまった。危ないな。人間品性を失ったら終わりだ。
「本はよく読むほうなのか？」
「どうかしら。人と比べたことはないけど、読めるうちにできるだ

け幅広く、たくさん読んでおこうとは思ってるわ」
「ふうん」
時々これは知らないだろうと思うようなことを知っているのはそのせいか。
しかし、それにしては……。
「意外？　そう思うのはずっとわたしを見てても、そんな姿を見たことがなかったから？」
槙坂涼は僕の心を見透かすような瞳で僕を見た。
僕は何も言わない。
「そうね。あまり人前で読むようなことはしなかったから」
それは友人と一緒にいるときでも平気で本を開く僕への当てつけだろうか。彼女の前でそんなことをしたことはないのだがな。
「でも、今はダメね。受験勉強が少しずつ忙しくなってきて、あまり読む時間がとれないわ」
「だったら僕と遊んでないでそうしたらいいだろう」
そう言う僕が手にしているのは、睡眠時間か勉強時間か、何らかの時間を削って彼女が作ったサンドイッチだ。忙しいと言っているわりには、受験生らしからぬ余裕だな。
「プライオリティの問題よ。作った時間で本を読むより、あなたと一緒にいるほうが楽しいもの。いつもより集中して勉強して藤間くんに会いにいって、明日の分まで課題をこなしてからデートするの。むしろ今までよりメリハリがあるわ」
「……好きにしてくれ」
人のライフスタイルの変化に口を出すつもりはない。
と、そこでふと気づく。
「受験って、上にはいかないのか？」
上とは明慧学院大学のことだ。ここ附属高校からはそう表現される。エスカレータ式ではないが普通の入学試験よりはハードルが低く、世間一般で言う大学受験のイメージは薄い。槙坂涼のような成績優秀者なら大学側も諸手を上げて歓迎し、無試験合格だろう。

しかし、彼女が口にする大学受験は、どうも外部の大学を指したもののようなニュアンスだ。
「ええ、そのつもり」
彼女もあっさりそれを認めた。
「差し支えなければ理由を」
「少し周りが騒がしくなりすぎたわ」
その声はかすかにため息混じりだった。
まぁ、そうだろうな。槙坂涼という人間はどこへ行っても目立つし、その一挙手一投足が注目される。今だって教室にいくつかのグループが弁当を食べているが、ちらちらとこちらの様子を窺っている生徒が少なからずいる。誰も自分を知らないところに行きたくなるのも当然か。
「尤も、半分くらいは自分のせいだけど」
「……」
……まぁ、そうだろうな。言葉ひとつで人を右往左往させて楽しんでいるからだ。魔女(バカ)め。
「ねぇ、どうせならふたりで外の大学に行きましょうか」
「それはなんとも心踊るお誘いだ。だけど、あなたが行くような大学に凡人の僕が入れるとも思えない」
「あら、大丈夫よ。目の前にいい家庭教師がいるじゃない」
「目の前か。目の前というと、遥か先に黒板があるくらいだな」
直後、槙坂先輩の手が伸びてきて、そのしなやかさとは裏腹に万力のように僕の顔を挟み込むと、強引に自分のほうへと向けさせた。それは僕の首の可動域ぎりぎりの挙動で、思わず口から「ぐ」とうめき声がもれた。
「これで見えるかしら、優秀な家庭教師の姿が」
彼女はにっこり笑う。
たぶん僕の視界いっぱいに天使の笑みを浮かべているのが、家庭教師とかいう新種の悪魔なのだろう。

「ごちそうさまでした」
「お粗末さまでした」
程なく食事が終わった。
「喜んでもらえてよかったわ。じゃあ、わたしはこれで」
槙坂先輩はランチボックスを片づけ、トートバッグを抱えて立ち上がった。
気がつけば昼休みはもうすでに半分を過ぎていて、そして、僕はすっかりあのメールへの不安を忘れてしまっていた。槙坂先輩の振る舞いがあまりにも普段通りだったからだろう。僕はもしかしてあのメールを読み解き違えていたのだろうか。
だが、彼女は僕の耳に囁く。
「次は放課後ね。待ってるわ」
「!?」
思い知らされる。やはりあれは本当なのだと。
弾かれたようにして立ち上がると、彼女はもう僕に背を向け、階段状の通路を降りようとしていた。
「待ってくれ」
思わず呼び止めた僕の言葉に、彼女は振り返る。
「なに？」
その顔には笑み。
例えば僕が校内で彼女を見つけて呼び止めれば、こういう表情をするのだろう。
「僕に何か話があるのか？」
「ええ」
言いながら槙坂先輩はすっと距離を詰め、僕のネクタイに触れた。まずは手遊び。
「そうね。ミステリで言うところの解決編というやつね」
「……モノポリーでもする気か？」

生憎、僕は持っていないが。
「面白そうだけど、それはまた今度」
彼女は楽しそうにくすくすと笑う。そうしてネクタイを整え、僕を見上げる。やはりそこには優しげな微笑があった。
「怒ってるのよ？」
「え？」
「一年以上もわたしのこと興味のない振りして」

最終話　その１（後書き）

作中に出てくるカーの『火刑法廷』は、８／２５に最出版されます。
今回の更新分を書いている最中に知ったのですが、もうテキストの
修正はしませんでした。
ご容赦を。

最終話　その2

そして、放課後。
「おや」
「ん？」
駅を降りたところで、僕はその人物と出くわした。
見知った顔、というほど顔を合わせているわけではなく、ある意味では文字通り見知った程度の関係。
年はおそらく二十歳か、それをひとつかふたつ越えたくらい。眠そうな半眼のまぶたが特徴的だが、よく見れば意外と目の光は強い。まるで擬態だ。
「君は確か、僕の店に何度かきてくれた……」
槙坂先輩と待ち合わせをしているカフェ、『天使の演習』の店長だ。
「ええ。今日もこれから行こうと。もしかして定休日ですか？」
この人が店を離れてここにいるということはそうなのだろう。だとしたら無駄足だったな。先に行っているはずの槙坂先輩はどうしたのだろう。
「いえ、やってますよ」
と、彼。ならばなぜこんなところにいる。
「店にお客が少なかったし、ちょうど僕の奥さんも帰ってきましたからね。彼女に店を任せて買い出しにきました」
「奥様はどこかに出かけられていたのですか？」
「彼女の本業は大学生ですから」
気がつけば僕らは並んで歩いていた。
「それにしても少し余裕を持ちすぎなのでは？」
あの店はお世辞にも盛況とは言えない気がする。おかげでいつも静かで雰囲気はいいのだが、それでは先行きが不安だ。店は僕も気に入っている。だからこそ、潰れてしまうようなことがあっては勿

体ないと思う。
「僕としてはそうでもないつもりなんですけどね」
彼は苦笑する。
「あの店はね、父の遺産として僕が受け継いだものなんです。だからと言って、決して道楽でやっていけるものでもなく、ちゃんと守り立てていかないといけません。君、何かいいアイデアはありませんか？」
「……」
素人の僕に聞くかよ。
「コーヒーハウスをご存知ですか？」
「そういう言い方をするところを見ると、単純に喫茶店に類するものというわけではなさそうですね」
「ええ」
コーヒーハウスとは、１６５０年のオックスフォードに端を発する、図書室を持つカフェのことだ。図書や雑誌など多数の蔵書を持ち、客はただそれを読むだけではなく、特には読書会を開いたり、討論を繰り広げたりもしたのだそうだ。
「かのアイザック・ニュートンもそこで毎日のように常連客と討論し、『プリンキピア』を書き上げるに至ったそうです」
１８世紀初頭には２０００件にまで増え、その後、半世紀に渡ってコーヒーハウスの人気は続いた。
「君はなかなか博学ですね。それに面白そうなアイデアです」
僕の趣味全開の案に、彼は興味を示したようだった。
「店内に書架を置いて、自由に読める本を並べてみても面白いかもしれませんね。気に入って何度も足を運んでくれる人もいそうです」
店長と話しながら僕らは住宅街の中を歩き、やがて店へと辿り着いた。『天使の演習』だ。
店の前にはお勧めメニュー（コーヒーとサンドイッチのセットだ）が書かれたチョークアートのウェルカムボードが置いてあった。前にきたときはなかったように思う。

「どうぞ」
店長が僕のためにドアを開けてくれた。定番のドアベルが鳴る。
「どうも」と軽く頭を下げてから、僕は店内へと踏み入った。
「いらっしゃいませ」
涼やかな声。軽快な足取りでこちらにくるのは店長の奥さんだ。
彼女は一度だけ僕の後ろ――店長を見た。
「おひとりですか？」
「あ、いや……」
僕は店の中を見回した。片手で数えられる程度の客。その中に槙坂涼はいた。窓際の陽当たりのいい席に座っている。
「彼女と待ち合わせを」
「ああ」
店長夫人は目を細めて納得。
「ごゆっくり」
とても嬉しそうにそう言われた。この人の目には僕たちはどう映ったのだろうか。
それから彼女は、店長に「おかえりなさい」。その声はどこか幼く聞こえ、振り返り際に見えた表情も、少女のように無邪気だった。
槙坂先輩がいるテーブルへと着くと、僕はもう一度店長たちに目をやった。ふたりはもうカウンタの中に入っていた。
「ああいう女性が好み？　でも、マスターの奥さんよ？」
「わかってるよ」
言うことはいきなりそれか。
僕は彼女の向かいに座った。槙坂先輩は今日は僕より1時間早く下校し、家も近いはずなのにまだ制服姿だった。何か本でも読んで待っていたのだろうか。
「大学生らしい」
「ええ、そのようね」
知っていたのか。
「何度か話したことがあるわ。かわいらしい方よ。高校を卒業と同

時に籍を入れたんですって」
「ふうん」
と、そこにさっそく店長がお冷やを持ってきた。
「決まりましたか？」
「じゃあ、ブレンドを」
奥方の話をしていたの聞かれただろうか。陰口ではないので、そこは見逃してもらいたいところだ。
僕は改めて槙坂先輩と向き合った。
「楽しそうだな」
「わたし、藤間くんと一緒のときはいつもと感じが違うんですって。自分でもその自覚はあるわ」
「自分を知ることはいいことだ」
世の中には己の気持ちを謀(たばか)るようなやつもいるからな。
「さて、何の話からはじめる？」
僕は自ら口火を切る。
「わたしたちの出会いと再会について」
「……いつだ？」
「とぼけて」
くすくすと笑う槙坂先輩。
勿論、僕はとぼけてはいない。予想通りだ。彼女の昼間の言動からして、この話題しかないと思っていた。
「あれは去年の4月だったわ。前期にとる授業も決めて、学生課に履修届を出そうとしたときに呼び止められたの。新入生の男の子よ。先輩はどの授業を取られるんですか。よかったら履修届を見せてくださいって」
「……」
「勇気がある子だと思ったわ。普通そんなふうに堂々と聞いてこないもの。だから、思わず見せてあげたの。……覚えてる？」
「もちろん。むしろそれはこっちの台詞さ。覚えてたのか」
「忘れるわけがないわ」

あれは自分でも失敗したと思った。
最大の失敗だ。
「でも、後でわたしは腹が立ったの」
彼女はむっとした調子で言う。
「なぜ？」
「それっきりだったからよ」
「……」
黙り込む僕のところに、店長がブレンドコーヒーを運んできた。
「お待たせしました。……どうぞごゆっくり」
僕はさっそくミルクピッチャーからミルクを適量垂らし、ひと口飲んだ。美味い。これで値段もほどほどなのだから、こんなに得なことはない。
向かいでも槙坂先輩が、まだ残っていた自分のコーヒーに口をつけ――先を続けた。
「少し楽しみにしていたのよ？　また声をかけてくれると思ってたのに、結局それっきり。授業だって一緒なのは週に2回だけ。少し腹が立ったわ」
小さくかわいらしく鼻を鳴らして一拍。
「でも、わたしはそのころから藤間くんに興味をもっていたわ」
そして、懐かしむような口調でそう言う。
「だから、よくあなたを見ていた」
「え？」
「気がつかなかったでしょう？　悪いけど、そこはわたしのほうが一枚上手よ」
槙坂先輩は勝ち誇るわけでもなく、いたずらっぽく笑う。
「藤間くんが気がつかないうちに、わたしは気がついた。何を？
それはわたしがあなたを見ているように、あなたもわたしを見ているということ。藤間くんはあの日たまたま声をかけてきたわけじゃ

ない。最初からわたしに興味があった。違う？」
「自惚れだな」
「自信よ」
それこそ自信たっぷりに言い切る。
結局、僕は質問に答えていない。
しかし、この場合、それは即ち肯定であるともとれる。
あのとき僕は、授業云々は槙坂涼に接触するために丁度いい口実だと思ったのだ。それを話題にして彼女に接触し、その反応を見るのが目的だった。だが、まさか彼女が前述の如くそこまで不可侵だとは予想外だった。たかだか履修科目の話なのに。それとも傍若無人な美沙希先輩のそばにいるせいで、僕の感覚が狂っていたのだろうか。
結果、それは思いがけず印象に残る行動となってしまい、以後、僕は彼女が忘れてくれることを期待して、できるだけ目立たないようにしてきた。
「それなのにあなたは、わたしなんかに興味がないと言ったわ。そんなはずないくせに」
浮田と話していたあのときだな。やはり聞こえていたのか。
「それで僕に近寄ってきたのか？」
「ええ」
彼女は笑顔で首肯する。
「忘れているみたいだから思い出させてあげようと思ったの。あなたはこの明慧にきたときから、わたしに興味をもっていたのよって。ちょっとしたゲームをしながら、ね」
あのときのことを覚えていない振りをして近づき、言葉の端々で覚えていることを匂わせる。まるで追い詰めるようにして。
そんなお遊び（ゲーム）。
「どう？　これでもまだ認めない気？」
「……」
「……」

しばらく根競べのように見つめ合った後、僕は深く息を吐いた。
「わかった。認めよう。僕は最初から槙坂涼という人間に興味があった」
それくらいなら認めるさ。
「それで――こうしてあなたの思惑通りに認めてしまったわけだが、この後はどうする？　まさしくお遊びは終わり、だ」
思い出されるのは、昼間授業中に居眠りをしたときに見た夢。
Ｇａｍｅ ｉｓ ｏｖｅｒ.
ゲームが終われば……。
僕は彼女の返事を待つ。
「そんなの決まってるわ」

「遊びが終わったら、本気の恋愛をするだけよ」

「だって、わたしはあなたのことが好きで、あなたはわたしが好き。――でしょう？」
「自惚れだな」
「自信よ」
またもきっぱりと言い切る。
「わたしは槙坂涼だもの」
確かに自信だ。
「そこまで言われたら僕の負けだな」
僕は肩をすくめ、苦笑した。
どこかほっとしている自分がいる。
それも二重の安堵だ。
僕の負け？　いえ、残念ですが槙坂先輩、どうやら状況は僕の望むものであるようですよ。
やはりあなたは覚えていなかった――。

僕たちは会っている。去年ではなく、もっと前に。勿論、僕としては忘れてくれていて好都合だった。なにせそのときの僕は少々格好悪い姿をしていたのだから。

槙坂先輩の思惑通り僕は、その言葉の端々から彼女が少なからず前のことを覚えていると気づき、確信した。それなら仕方がない。結局のところ最大の問題は、それがどの時点からなのか、だった。槙坂先輩から近づいてきて思いがけず親しくなって　記憶を呼び覚ますきっかけになりそうな場面もあった。だが、それでも彼女は僕たちの本当のはじまりを思い出さなかった。

僕は悟られないよう密かに胸を撫で下ろす。向かいでは槙坂先輩が相変わらず微笑を浮かべていた。

が、そこで気づく。

いつの間にかその笑みの質が変わっていることに。

例の天使の顔をした彼女の、悪魔の笑みだ。

僕がそれに気づいたのを読み取った槙坂涼は、その笑みのままゆっくりと両肘をテーブルに突き、組んだ指に顎を乗せて言葉を紡ぐ。

「わたしたちの再会の話はこれでお終い。じゃあ、改めてわたしたちの出会いの話をしましょう？」

まるでファウストが契約書にサインをした後で、「ああ、そうそう」と言葉をつけ加えるメフィストフェレスだ。

すべては彼女の思い描いた通りの流れ。

勝利の確信は一瞬にして無残に飛び散った。

槙坂先輩を見る僕はかなり間の抜けた顔をしていたに違いない。

そして、そんな僕に視線を返す彼女は、仕掛けた最大のいたずらが成功して満面の笑みだった。

ああ、これはあれだ。携帯電話に入っているのと同じ。

あの日、見た瞬間に僕を魅了した小悪魔の笑みだ――。

その1

『槙坂涼』。
この学校でその名前を知らない生徒はいない。
明慧学院大学附属高校はじまって以来の成績優秀者で、いつも微笑みを絶やさない大人びた美貌は、男女問わず誰もが憧れ、どこへ行っても注目を浴びる。
そんな完璧人間。
それが――『槙坂涼』。

おかげでわたし、槙坂涼の毎日はとても退屈で、だからこそいつも何かを探していた。

さて、何から話そう。
やっぱり去年の春のことから話すのがいいように思う。

この学校は単位制を導入していて、必修科目以外は好きに授業を選択できる。よって、わたしたち生徒の新年度最初の仕事は、受けたい授業を決めて、期日までに学生課に履修届を出すこと。
ところがこの履修届の書き方が少しばかり複雑で、新入生泣かせなのは当然のこと、期間中は2年生3年生でも頭を突き合わせて大騒ぎしている光景が校内のあちこちで見られる。毎年恒例の風景らしい。
幸い、去年のわたしは一年生で初見ながらいち早く理解し、友人たちにおしえる立場に回った。後期にも書き方を忘れてしまった子におしえていた。今年もそう。……それはいいのだけど、毎回おしえている子の顔ぶれが同じなのはどういうことだろう。半年に一回しかやらないことだから身につかないのはわかるけど、少しは覚え

る努力をしてほしいと思う。
そうしながら数日かけて履修届を書き終え、何人かの友達と一緒に学生課に出しに行こうとしたときのことだった。
わたしは学生課の窓口の前で呼び止められた。
「槙坂先輩ですよね？」
声のしたほうを見れば、そこに男の子がひとりいた。
「ええ。あなたは新入生？」
ネクタイの色を見ればそれはすぐにわかる。
同時に、わたしは少しうんざりしていた。どうやらもう『槙坂涼』の名前は新入生に知られているらしい。
「先輩はどんな授業をとられたんですか？　よかったら履修届を見せてもらえますか？」
が、その発言を聞いて、一転、思わず感心した。
『槙坂涼』は高嶺の花であり、ましてや一年生にとっては不可侵。誰もが同じ教室で一緒に授業を受けたいと思うけど、直接本人にどんな授業をとるのか聞くことはできない。してはいけない。
にも拘らず、この子は声をかけてきた。
なかなかの度胸だと思う。
「どうぞ」
急に彼に興味を持ったわたしは、持っていた履修届を快く差し出した。隣では「ちょ、ちょっと涼さん！？」と友達が慌てていたけれど。
誰もが喉から手が出るほど欲しがるその一枚の紙を、彼は仔細に見る。
間、わたしはその彼を改めて観察した。この勇気ある行動に相応しい、物怖じしないどこか薄情そうな面立ちだ。
「書き方はわかる？」
「難しいですね。でも、実物を見せてもらってわかりました。ここの欄は上が科目の名前で、下がコードなんですね」
そう言って浮かべる笑みは意外や意外、なかなかに人懐っこい。

私はそれを見てなぜか、上手な笑みだと思った（そう思った理由は後になって判るのだけれど）。
「ありがとうございます。『よくわかりました』」
履修届をわたしに返すと、彼は軽く頭を下げてから去っていった。

「見せちゃってよかったの？」
彼が離れると、すかさず友達がそう言ってきた。不満そうだ。きっと彼女にとって『槙坂涼』はそんなサービスをしてはいけないのだろう。
「いいんじゃない？」
あれくらい頼まれればいつだって見せるのだから。
少し楽しみだった。
もし”偶然”同じ授業が多かったら、今度はこちらから声をかけてあげようと思う。

そう、これが藤間くんだった。

やがて前期授業が正式にはじまった。
「最近の涼さん、なんかむすっとしてない？」
「え？　そ、そう？」
友達のその指摘にわたしは慌てる。
でも、確かにそうだろう。
履修する授業が確定した後、最初の授業はどこもわたしが現れた途端、教室中がおおいに沸いた。
「おっしゃー。槙坂さんと一緒だ！　これで半年この授業はがんばれる！」
「やっぱあっちはガセだったな。俺は賭けに勝った！」
みんな『槙坂涼』と一緒になって嬉しいらしい。
だけど、ほとんどの場合、その湧き上がる生徒の中に藤間くんは

いなかった。いてもいつも周りの興奮など我関せずとばかりに本を読んでいた。
結局、あけてみれば彼と同じ授業は週にふたつだけ。一年生も受けられる授業も多かったのに。
これでは本当に”偶然”だ。
わたしはなんだか裏切られたような気分だった。

「それにしても、今年の新入生はカッコいいコがいないよね」
不意に一緒にいた友達のひとりが愚痴のようにこぼした。
「そうなの？」
「そうそう。残念ながら不作ね」
わたしは気まぐれに教室を見回してみる。藤間くんがいた。そう言えばこの授業は彼と一緒だったのを思い出す。相変わらず本を読んでいて、そうしながらもちゃんと友達と話しているようだった。
（あれ……？）
ふと――気づいた。
藤間くんがよく見れば意外に端整な顔をしていることに。本を読む姿は知的美少年といったふう。この前は珍しさばかりが先に立って、そこに目がいかなかったらしい。
「ねぇ、本当にいない？」
「いないいない」
再度聞くと、彼女は掌をひらひら振ってそう答えた。
「ふん。そうなんだ……」
やはりそうだ。誰も気がついていない。いつもまるで気配を消して隠れるみたいにして本に視線を落としているからだろう。まだ誰も彼があんなにきれいな顔をしているのを知らないのだ。
気づいたのはわたしだけ。
思いがけず素敵な秘密を見つけてしまった。

本当は女の子なら誰もがほっておかないカッコいい男のコ。
それをわたしだけが知っている。
わたしだけの秘密。

その日を境にわたしはよく藤間くんを見るようになった。
けれど『槙坂涼』が誰かひとりの男の子を注視なんかしたら一大事だ。だからちょっとした小技を使う。視界の端で捉えるように見たり、鏡で前髪を整える振りをしながら見たり。
それは悪戯めいていて楽しかった。
彼に気づかれないように、友達にも気がつかれないように、こっそり彼を見る。
退屈な毎日の中で見つけた小さな楽しみだった。

ふたつわかった。
ひとつは彼がいつも退屈そうだということ。
藤間くんがもつ本来の笑みはとてもシニカルで、彼の端整な相貌によく似合っていたけれど、変わり映えのない日常に退屈しているように見えた。
そして、もうひとつ。
わたしが彼を見ているように、彼もまたわたしを見ているということ。
でも、それは入学してすぐにわたしに声をかけてきた大胆さとはちぐはぐなように思えた。
そして、これは錯覚と――少しばかりの希望が入っているかもしれないけれど、彼のわたしを見る目には、男子生徒なら誰もがもつ『槙坂涼』への憧れ以外の何かがあるような気がした。

ささやかな楽しみと優越感と、小さな謎とを胸に時間は流れ――、
それは暑さも一段落した初秋のある日のこと。
学生食堂で友達と一緒にお弁当を食べていると、藤間くんが何人かの友達と連れ立ってやってきた。わたしは視界の端で彼を見る。すでに”目立たない平凡な生徒”の立場をまんまと確立してしまった彼に注目するのは、きっとわたしくらいのものだろう。
ふと、彼が足を止めた。
学生食堂の一角にある自動販売機コーナーの前。そこで藤間くんは小さな動作で自販機を順番に指さしていく。いや、数をかぞえているようだ。その数６つ。
「おーい、藤間。何やってんの？」
「ああ、悪い」
短く答え、再び歩を進める。
いったい今の行動に何の意味があったのだろう。わたしがそれを知るのは翌日のことだった。

翌日。
朝からはじまった騒ぎは昼休みにピークを迎えた。
今日は朝からずっと自販機がぜんぶ故障中らしい。
わたしは『故障中』の貼り紙が貼られたそれを見ながら考える。昨日藤間くんが数をかぞえていた自販機が、今日にはこんなことになっている。これは偶然？
そこにその藤間くんがやってきた。
「今日は朝からこうなんだってよ」
「らしいな」
友達の言葉にまるで他人事のように答える。
が。
「浮田」
通り過ぎようとした彼は、昨日と同じように足を止め、友達を呼び止めた。

「これ、どこも異状ないんじゃないか？」
「え、まさか？」
浮田と呼ばれた彼は、半信半疑に自販機に近寄っていった。
「特にそれらしい表示はなし。売切中のランプもなし、か」
かくして、ギャラリィの見守る中、硬貨を入れてボタンを押すと、何の問題もなく商品が出てきた。場は騒然となり、少なくない生徒が自販機に詰めかけた。
結局、故障している機械はひとつもなかった。
「くそ、騙された」
「なんで誰も確かめなかったんだよ」
「誰だ、こんな悪戯したやつ」
わたしははっとして藤間くんを見る。
彼はいつも通りにシニカルな笑みで自販機コーナーの騒ぎを見ていた。
いつも通り？
いや……。
ああ、なるほど。そういうことか。
なんと面白い子だろう。
わたしはいっそう彼に興味を持った。

ひとつ確信があった。
それはきっと彼はほかにもまだ何かやっているという確信。
藤間くんはだいたいいつも同じ場所に座る。大教室だと後ろ半分の階段席の通路側。あるときわたしは思いついてその席を見にいったことがある。
……やっぱりあった。
机の上に落書きがひとつ。日本史のテストについての真偽不明の

情報だった。広まったら日本史を取っている生徒が右往左往しそうな、それでいて先生のひと言で鎮火しそうな情報。

わたしはそれを見て口許を緩める。

わたしと同じだ。

『槙坂涼』の毎日は退屈で、だからそれを面白くするためにいつしか『槙坂涼』で遊ぶことにした。

わたしもよく同じことをする。

例えば、『槙坂涼は医学部の大学生とつき合っている』。そんな落書きを机に書いておけば、意外なほどよく広まる。やがて誰かがことの真相を尋ねにくるけれど、わたしは「ごめんなさい。それはプライベートなことだから」「想像に任せるわ」と答えを曖昧にして反応を楽しむ。だけど、見ていればわかる。それはある意味ではとても『槙坂涼』らしい答えで、イエス・ノーをはっきりさせるよりも望まれているのだと。

彼も同じなのだろう。

他にもいくつかあったけど、そのうちのひとつ――4階の語学教室の窓の外側につけられた小人だか宇宙人だかの足跡を、試しに発覚前に消してみたことがある。だけど彼は特にそれを不思議と思う素振りもなく、改めて仕掛けることもなかった。成功に固執はしないらしい。

「ねぇ、あの足跡ってどうやってつけるの？」

ずいぶん後になって、わたしは藤間くんに聞いてみた。彼のマンションで食事をしているときだった。

「ああ、あれ？　あれは拳を握ってそれをこうやって――」

藤間くんは握り拳の小指側を、朝食が並べられたテーブルの上に

ゆっくりとスタンプするように置いた。
「後はその上に2つか3つ、親指で点をつけてやればできあがり。チョークの粉でもつけるか、埃の積もったところででもどうぞというところさ」
「なるほど。確かにそういうかたちになるわ」
わたしも同じようにやってみて、完成形をイメージしてみた。
「勘違いしないでくれよ。だからといって語学教室の件が僕の仕業だと言ってるわけじゃない」
彼はこの手の悪事に関しては、絶対に認める発言をしない。
さらに美沙希に聞いたところ、「あれな、中学んとき真と一緒に3階のぜんぶの教室につけてやった。次の日、学校中が大騒ぎになったな」と笑って言っていた。
彼女は彼女で悪びれた素振りもないのだから質が悪い。

早いもので気がつけばわたしも3年生に進級していた。
そしてまた半年に一回のイベント、今期の時間割りを決めるときがきた。その期間中――履修届提出の締め切りまでまだ十分に余裕のあるある日のこと、
「あ、あの、槙坂さん」
車椅子の唯子と一緒に歩いていたわたしに声をかけてきたのは、同じ授業のときに時々言葉を交わす程度の女子生徒ふたり組だった。その程度だから教室ではないこの場では、勇気を出して話しかけてきたふうだった。
「前期は芸術科目を中心に取るって聞いたんだけど本当？」
瞬間、わたしはこの発言が生まれるまでの経緯について考えを巡らせる。
『聞いた』。つまりは伝聞。けれど、わたしは芸術科目なんて取るつもりはないし、そもそも自分が何を履修しようと思っているか誰にも話していない。ということは、これは嘘の情報だ。

どうやら嘘の情報が出回っているらしい。
思えば昨年度の前期からこの手の出所不明の怪情報が行き交っていたように思う。人を惑わずデマゴギー。……なるほど。今度はこれなのね。
『槙坂涼』は微笑む。
「さぁ、どうしようかしら。まだ決めてないの。あけてみてのお楽しみね」
「えぇー」
そんなひらりとかわすような返事に、彼女たちはユニゾンで不満とも歓声ともつかない声を上げた。
「また一緒の授業があるといいわね」
そう言ってふたりと手を振りながら別れる。
と。
「さっきの話、本当なの？　あたしは演習科目と情報系だって聞いたけど？」
唯子がこちらを見上げながら訊いてきた。
そういう説も流れているらしい。こうやってみんなが振り回されているのを横目で見て、あのコは楽しんでいるのだろうか。
「どうかしら？　唯子の想像に任せるわ」
「涼さんはすぐそうやってはぐらかす」
唯子は怒ったような素振りもなく、むしろ笑う。
偽情報はこのままほうっておこうと思う。これからも彼女たちのようにある程度親しい生徒が、噂の真偽を確かめにくるだろうから。きっといろんな反応を見せてくれるに違いない。
利害の一致。
わたしの中の退屈という怪物を押し潰すピストルとして利用させてもらおう。

そうしてあの日がきた――。

藤間くんが一緒の授業のとき、わたしが教室に入ってまず最初にすることは彼を見つけること。そのときも教室中央の扉から入り、仲のいい友達と話しながら、横目で彼の姿を認めた。いつもの席に座り、本から顔を上げてこちらを見ている。いつもそう。冷めた様子で、シニカルなくせに誰よりもよくわたしを見ている。

わたしは大教室を前後に二分する大きな通路を通って席へと向かう。彼の目の前を横切る軌道。

定点と動点の最接近。

そこで彼の声が耳に入った。

「よって、僕はあの人に興味はないね」

結論するような口調の言葉。

きっと後になって彼は自分の迂闊さを呪ったに違いない。

そして、わたしも迂闊だった。

わたしは思わず目だけで彼を見、ほんの刹那、彼と視線が交錯した。

すぐに目を逸らす。

だけど、もう遅かった。すでにわたしの心には決意が芽生えていた。忘れたの、藤間くん？　去年、あなたはわたしに興味をもって声をかけてきたんだよ？　そう、忘れたのね。だったら思い出させてあげる。

そのとき、わたしはこの一年間我慢したのが不思議なほど、彼を知りたいと思った。

その2

わたしはすぐに藤間くんに近づくことを決めた。
でも、普通に「こんにちは」と声をかけるのはダメ。彼にはきっと『槙坂涼』のブランドは通用しない。もっと一瞬で惹きつけるような方法じゃないと。

学生食堂で偶然に目当ての人物を見つけ、わたしは一緒にいた友達に「ちょっとごめんなさい」と断ると、彼女に近づいていった。
「古河さん、少しいい？」
「あン？」
自販機に向かい、何を買おうか考えていたらしい彼女は、わたしの声で振り返った。
古河美沙希（こが・みさき）さん。
きれいなアーモンドのかたちをした目と、男っぽいウルフカットが特徴的な――そして、後にわたしの親友となる女の子だ。
「槙坂か。アタシみたいなのに何の用？」
「頼みたいことがあるの」
「ふうん」
彼女は興味深げににわたしを眺めると、
「いいよ。あっちで話そうか」
そうしてからわたしたちは、それぞれ飲みものを買ってから食堂の隅の席に移った。
さっそく古河さんは切り出してくる。
「それで、槙坂ともあろうものが何を知りたいんだ？」
「え、ええ」
少し緊張する。
彼女に頼みごとをするためには藤間くんの名前を出さなくてはい

けない。わたしの口から男子生徒の名前が出ることに古河さんはどう思うだろう。
「2年生の藤間くんっていう子のことなんだけど」
瞬間、ぐふっ、と喉を詰まらせ、飲んでいる最中だったコーヒーで咽た。
そして、「し……」と、何かを言いかけてそれを飲み込み（し？）、改めて口を開く。
「……藤間？」
「ええ」
と、答えておいてから――彼のことをすでに知っているふうな古河さんの口振りが気になった。
「ねぇ、もしかして藤間くんって、実は有名だったりする？」
「いや、そんなことないと思うぞ」
「そ、そうよね」
わたしはほっと胸を撫で下ろした。
よかった。本当はわたしが知らないだけで密かに人気があったりするのかと心配したけど、彼女がそう言うならそうなのだろう。彼が本当は女の子なら誰もがほうっておかない男の子だということは、わたしだけが気づいたわたしだけの秘密にしておきたい。
「本題に入ろうぜ。あいつの何が知りたいんだ？」
古河さんがまるでマフィアの取り引きのようにこう聞いてくるのにはわけがある。彼女は一部では有名な”情報屋”なのだという。頼めばこっそり知りたい情報を調べてくれるという話だ。
「彼の――藤間くんの電話番号なんだけど」
「電話番号？」
彼女はわずかに目を丸くしてから、「うーん……」と考え込みはじめた。
「やっぱり難しいかしら？」
「いんにゃ。そういうんじゃなくて、もっと別ンとこに問題が……。いや、ま、いっか。いいよ」

「本当？　助かるわ」
どうやら彼女が何でも調べてくれるというのは本当らしい。
喜ぶわたしの前で、古河さんは取り出したスマートフォンを操作する。
「何か書くものある？　メモとか紙とかのほう」
「ええ」
わたしは言われるままブレザーのポケットから、掌ほどの小さなメモ帳を取り出した。古河さんはそこから一枚切り離すと、ポケットに裸で突っ込んでいたらしいボールペンで何やら書きはじめ――それが終わると、人差し指と中指ではさんでこちらに差し出してきた。
「ほら」
「えっ？　これって……」
「そ。ご所望のものだよ」
確かに紙には携帯電話の番号らしき１１個の数字が並んでいる。てっきりこれから調べるのだと思っていた。つまり……。
「あなた、藤間くんの電話番号を知っていたの？」
「チョイと別件でね」
別件？　前に誰かが同じ依頼をしたということ？
「んで、それ何に使うんだ？」
「え？　それは……」
古河さんの問いに我に返り、口ごもる。
勿論、電話番号なんて電話をかける以外の使い道はない。そう、わたしは彼と接触するためのツールとして電話を選んだ。『槙坂涼』からのいきなりの電話に、彼はきっと驚くに違いない。
「ま、いいか」
しかし、彼女はあっさりと追求の手を引っ込めた。
「ところで、いちおー情報提供料をもらうことになってんだけど。日本銀行券以外の、商品券とかそんな感じのンでさ」
「そうね……」

財布の中に今何が入っているかを思い出してみる。
「今は使いかけの図書カードくらいしかないわ。ごめんなさい、明日必ず――」
「ああ、それでいいよ」
「え、でも」
確かもう残高はあまり残っていなかったはず。財布から抜き出して見てみれば案の定。
「やっぱり。１９０円しか残っていないわよ？」
「じゅーぶんじゅーぶん」
笑って言いながら、古河さんはわたしの手から文庫本の一冊も買えない図書カードをすっと引き抜いた。
「どうやらこれから面白いものが見れそうだしな。それでチャラにしとくよ」
「え、それはどういう……？」
「おっと、それはこっちの話。じゃあな」
そうして情報提供料としてもらったそれを指ではさんだままひらひら振って、テーブルを離れていった。
「……」
最後のひと言が気になるところだけれど、わたしの望むものを手に入れたことは確かだ。
ずいぶんと簡単に、安く手に入ったものだけど。

「ゼロ・ハチ・ゼロ、の……」
わたしは部屋の勉強机に両肘を突き、メモを目の高さに合わせて、そこに書いてある数字を口に出して読む。本当はメモなどなくてもそらで唱えられる。今日一日、人の目を盗むようにしながらずっとこれを眺めて過ごしていたので、すっかり覚えてしまった。
――結局、その日は電話をかけなかった。
これは魔法の道具。
三角をふたつ重ねて丸で囲んで……じゃないけれど、これを使え

ば藤間くんにつながる。きっと最初の一回は特別なものになるに違いない。だから、勿体なくてまだ使っていない。
そこでふと思った。今は夜。今電話をかければ、もしかしたら彼とゆっくり話ができるかもしれない。友達同士が――あるいは恋人同士が楽しくおしゃべりするように。
でも、わたしはそれをすぐに否定した。
これは大きなインパクトをもって藤間くんに接触するためのツール。彼と再会するためのステージはここじゃない。
本番は明日だ。

ところが、翌日。
中庭の木の下で電話をかけてみたら、期待に反して彼は出てくれなかった。知らない番号からの電話には出ない主義のよう。警戒心が強いのか、それとも面倒なことが嫌いなのか。
どちらにしても”突然の電話”作戦は失敗してしまった。
「さぁて、次はどうしようかしら？」
わたしは端末を折りたたみ、つぶやく。
どうしてだろう。まるで絶好のコンディションのときに得意科目の難問に挑んでいるみたいに楽しかった。

そして――。

今、わたしの手の中には彼の携帯電話があった。
勿論、無断借用してきたものだ。
これにわたしのアドレスを転送する。これで電話をかけてもわたしの名前が表示されることになり、正体不明でない相手なら藤間くんも応じるはずだ。後はこれを落しものとして学務課に届けて、彼に返すだけ。
途中、階段の踊り場で、気まぐれに彼の端末のカメラ機能を使っ

て自画撮りしてみた。撮れた写真を見てみれば、そこには自分でも驚くほどの笑顔の――まるでいたずらが成功した子どものように笑うわたしがいた。
いつも大人びた微笑を浮かべている『槙坂涼』も、こんな笑い方ができるらしい。
そう、これは最初にこれを見るであろう彼に向けられた笑顔だ。

『2年の藤間真さん。お伝えしたいことがありますので、学務課までお越しください。繰り返します――』
その放送が流れたのは昼休みになってすぐのこと。
いつもならさっきまでの授業を一緒に受けていた子たちと学生食堂にいくのだけど、
「ごめんなさい。今から人と約束があるの。たぶんお昼もその子と食べることになると思うから」
「あ、そうなんだ。じゃあ、また今度ね」
手を振って彼女たちと別れる。
わたしはゆっくりテキスト類をまとめてから教室を出た。頃合いを見計らい、また中庭の木の下で彼に電話をかけた。
『……もしもし』
警戒の色の濃い彼の声。
当然だろう。落として返ってきた自分の携帯電話のメモリィに、入れた覚えのないアドレスが入っていたのだから。だけどこれでようやく彼をステージに引っ張り出すことができる。
「よかった。今度はちゃんと出てくれたのね」
『……聞きたいことがあるのですが』
案の定、彼は喰いついてきた。
こうしてついにわたしは彼と再会を果たすことができた。

彼は思った通りの子だった。

頭の回転が速くて――。
『槙坂涼』の前でも動じなくて――。
去年の春に見せた人懐っこい笑顔などどこにもなくて――。
笑顔の仮面を脱いでもまだ韜晦してばかりで――。
すぐにわたしはそんな彼に興味以上のものを抱いた。

『わたしとつき合ってみる気はない？』
『ないね』

いや――、
まったくと言っていいほど思い通りにならない辺り、思った以上かもしれない。
嬉しい誤算。
わたしはまた難題を差し出され、わくわくしている。
彼との会話はとても刺激的だった。
思えば『槙坂涼』は会話をしていなかった。求められるのはいつも「その通りね」と頷いて同意するだけの聞き役か、皆を同意させる鶴のひと声。けれど彼は違っていた。年下のくせに敬語も使わない生意気な子だけど、同じ目線で話をしてくれた。
それに――わたしの周りで彼ほど知的な子もいなかった。

例えば、ある日のこと。
午前の授業が終わって昼休みに入り、お昼を一緒に食べようと藤間くんに電話をかけてみた。
『悪い。調べたいことがあって図書室に行く。他をあたってくれ』
あっさりと切られてしまった。
「もう。ぜんぜん懐かない猫みたいな子」
『槙坂涼』のお誘いを断るのは、きっと彼くらいのものだろう。でも、怒るよりも先に口もとが緩んでしまう。
藤間くんが何を調べているのか気になり、わたしも食堂ではなく

図書室へと足を向けた。
　図書室へ入って見回してみれば、彼は一般資料の書架ではなく参考図書のコーナーの大型本架のところにいた。
　大型本架は百科事典のような大きくて重い本を収める書架で、高さは1メートル強。上下に2段しかない。このように低く作られているのは重い本を高い場所から取り出す危険の回避と、閲覧席まで持っていかなくてもその場で読めるようにするため。よいものになると天板の部分に角度がついていて閲覧台になっている――というのは彼からの受け売りだ。
　藤間くんは大型本架を正しくその通りの使い方をしていた。どうやら百科事典を見ているらしかった。
「何を調べてるの？」
　横から声をかけると、彼は事典に目を落としたままわずかに意識だけをこちらに向け、答えた。
「ケッヘル番号。さっき読んでいた本にそういう単語があったんだ。本筋に関係ないものだから説明もなくさらっと流されていてね。気になったんだ」
「ケッヘル番号？　それなら――」
　幸いわたしはそれを知っていたのでおしえてあげようとしたら、彼はそれを手で制した。
「いい。自分で調べる」
「そう」
　それなら邪魔はしないでおこう。
　ふと見れば脇には使い込まれたふうのメモ帳が置いてあって、そこには『ケッヘル番号とは何か？』と書かれていた。
「せっかくだから問題を追加してあげましょうか？」
「うん？」
　藤間くんがようやく顔を上げた。端整でちょっと薄情そうな相貌がこちらを向く。
「ケッヘル番号K．525が指しているものは何でしょう？」

「……」
彼の目がわずかに知的好奇心に光り、
「わかった。それも調べてみよう」
そう言うと先ほどのメモに一文を書き加えた。『また、K．525は何を指すか？』。どうやら調べる問題は単語ではなく文章で表すことにしているらしい。
藤間くんは再び百科事典に目を戻した。
その目と横顔は真剣そのもので、なかなかヤラレてしまいそうな感じだった。
「世界大百科事典に『ケッヘル番号』の項目はなし。ただし『ケッヘル』の項目がある。ルートヴィヒ・フォン・ケッヘル……『<ケッヘル番号>で名を残したモーツァルト研究家』、か」
そこで一旦、調べた資料の名前やわかったことをメモにまとめ、百科事典を書架に戻した。
大型本架を離れ、次へ向かう。わたしも後をついていこうとすると、彼は不満そうにこちらを見た。「ついてくるのか」と言いたげな目。
「おかまいなく」
「……あなたがそばにいて平気な、そんな豪胆なやつがいたら見てみたいね」
と、踵を返して向かった先は、同じく参考図書のコーナーの芸術分野の書架だった。まずは『音楽用語事典』を手に取ってページをめくり、先ほどと同じように資料の名前とわかったことをメモ。次に『モーツァルト全作品事典』を取り出して、またも調査結果を書き留めた。
そうして藤間くんは改めてわたしに向き直る。
「K．525は、アイネ・クライネ・ナハトムジーク」
「ええ、その通りよ。正解」
よくできました。
ケッヘル番号は、モーツァルト研究家のルートヴィヒ・フォン・

ケッヘルが、膨大な量のモーツァルトの作品を時系列的に整理して、付与した番号のこと。K．xやKV．xで表される。その中でK．525は、あの有名なアイネ・クライネ・ナハトムジークに振られた番号だ。
「ご褒美は何がいい？　デートにでも行く？」
「……それはいったい何の罰ゲームだ」
「失礼ね」
さすがにこれには頬を膨らませる。
と、そこで藤間くんは何やら迷う様子を見せてから、
「僕はこれから学食に行くけど、どうする？」
「……」
わたしは思わずため息。
一緒に行くに決まってるでしょ。もっと素直に誘いなさい、天邪鬼さん。

「さっきみたいなことはよくするの？」
ピークを過ぎた学生食堂で、わたしたちは向かい合って昼食をとる。わたしはいつもの通りお弁当を、藤間くんは今日はカツカレーだった。
「まぁね。昔からわからないことがあると自分で調べないと気がすまない質なんだ」
道理で調べ慣れていると思った。
「特に百科事典は知識の宝庫さ」
後になってわたしは、彼の寝室で扉つきの書架に収められた日本大百科全書と世界大百科事典を見つけている。少し乱雑に並んでいる様が、よくそれを使っていることを示しているようだった。
「百科事典は革命だって起こすよ」
「どういうこと？　興味があるわ」
百科事典が革命を起こす？
「じゃあ、かいつまんで話そうか」

そう言うと藤間くんはカレーと一緒にトレイに乗っていた水を飲んだ。わたしも食べる手を休める。

「ことの発端は１７４６年、先に完成していたイギリスの百科事典に触発されるかたちで、フランスの出版業者ル・ブルトンが思想家で作家のディドロにフランス百科全書の作成を依頼したんだ。編集・編纂にあたって執筆者の対立や当局からの出版弾圧があったが、その辺りは端折るとして――完成した百科全書は１７５１年から２０年以上もかけて順次刊行されていった。書式は、今では珍しい大項目主義。各項目にはヴォルテールやモンテスキュー、ルソーといった、僕たちもよく知る思想家も寄稿している。知の集大成を目指したそれには当時の最先端の科学技術や絶対王政以外の政治形態、キリスト教以外の宗教についても触れられていた。つまり百科全書というのはある種の学術雑誌でもあり、啓蒙書でもあったわけだ。そして、１７８９年――」

「フランス革命ね」

「そう。ルソーら思想家が説いた社会契約論に影響を受けた知識人や、それに共感した市民により革命が勃発する。かくして王政と旧体制は倒され、フランスに民主主義の土台が築かれることとなった。この革命に発行部数４２５０部の百科全書が少なからず貢献していたと考えるのは、それほどむりがある話でもないと僕は思うね」

「それで”百科事典が革命を起こす”なのね？」

「そういうこと」

そう話を締めくくると、藤間くんは食事を再開した。

こんなふうに時折さらりと見せる彼の教養に、わたしは大きな魅力を感じる。周りにはいないタイプだ。

不意に彼の動きが鈍くなり――顔を上げた。何やら複雑な表情をしている。

「そうじっと見られると食べにくいんだが」

「あ、ごめんなさい」

気がついたらわたしは彼を見つめていた。

「何か言いたいことがあるならはっきり言ってくれ」
「素敵、抱いて」
「断る」
相変わらずの即答。
「あのね藤間くん、少しは考えましょうね。というか、この場合飛びつくべきじゃないかしら？」
「考える？　何を？」
彼はわざとらしく驚き、いちいち言葉を区切る。
「あなただってアルカンの名前くらい考えずに暗唱できるだろう？」
「メタン、エタン、プロパン、ブタン……。ええ、確かにそうね。そう。わたしの女の子としての価値は、それくらい考える必要がないということなのね」
わたしはにっこり笑い、彼も不敵な笑みでそれを受けた。
ちょうど近くを通りかかった生徒が、見つめ合って笑うわたしたちを二度見した後、これを見なかったことにして早足で遠ざかっていった。

その3

藤間くんには仲のいい女の子がふたりほどいるようだった。
どちらも本人から直接聞いた。
ひとりは今年度に入って急に一緒にいる場面をよく見かけるようになった。それもそのはず、彼女は一年生で、名前は三枝小枝（さえぐさ・さえだ）さん。小枝と書いて『さえだ』と読むのだという。藤間くんがよくちょっかいを出しては蹴られている。
もうひとりは、なんとあの古河（こが・みさき）美沙希さんだった。
思い返せば何度かふたりが言葉を交わしている場面を見たような覚えがあるけど、古河さんがああいうフレンドリィな性格で誰にでも同じようにしているせいか、気にも留めていなかった。まさか同じ中学の先輩後輩だったとは。藤間くんははっきりとは言わなかったけど、どうも彼は古河さんを追ってこの明慧大附属にきた節がある。
どちらとも特別な関係ではないと否定していたけど、知ってしまうと気になって仕方がなかった。

幸いふたりとはすぐに、しかも、同じ日に話す機会が巡ってきた。

ある日のある授業、そこにあるはずの藤間くんの姿がなかった。
いつも彼は休み時間の中ごろには教室に入っている。けれど、今日はもう間もなく始業のチャイムが鳴ろうとしているのに、未だに姿を見せていなかった。珍しいと思いつつ不安を覚える。やがて本当にチャイムが鳴り、先生がやってくるまでわたしは彼のことを気にしていたが、結局、藤間くんは現れなかった。
授業がはじまった。
わたしも彼も、座る場所はだいたいいつも同じ。わたしは前のほ

うで、彼は真ん中よりも少し後ろ。おかげで途中入室してきたとしてもわからない。もしかしたら遅刻してきて今ごろは空いている手近な席に座っているかもしれない――そう思うと授業中何度も後ろを振り返りたい衝動に駆られた。

長い長い授業が終わる。

改めて教室を見回してみるけど、やっぱり彼の姿はなかった。何かあったのだろうか。思い切って彼の友達だという子たちに聞いてみようと思ったとき、わたしの視界にとある女の子が映った。

三枝さんだ。

藤間くんが気に入っている、かわいがっているとはっきり言った子。

いい機会だし、ちょうど口実もあるので、わたしは彼女に声をかけてみることにした。

「ちょっといい？　三枝さん、よね？」

後ろから近づくようなかたちで声をかけると、三枝さんはテキスト類をまとめる手を止めて振り返った。

「うわ、槙坂さんだっ」

わたしの顔を見るなり驚いてイスから飛び上がり、体ごと向き直った。

間近で見る彼女は、ショートの髪を耳の上辺りでヘアピンで留めた、ちょっとおでこちゃんで愛らしい子だった。容姿も仕種も小動物を思わせる。藤間くんがこの子を気に入る気持ちもわからなくない。

「驚かせてしまってごめんなさい。藤間くんのことを聞きたいと思ってきたの」

「え、真？」

真？　呼び捨て？

「ええ。藤間くん、この授業に出てなかったみたいなんだけど、あなた何か聞いてない？」

「真だったら今日は風邪で休んでますよ。朝、電話がありましたか

ら」
「風邪？」
わたしが繰り返すと、「はい」と三枝さんはうなずいた。
ふとあることを思い出す。
「ねぇ、確か彼、ひとり暮らしって言ってなかった？」
「あ、そういえばそうですね。今ごろひとりでうんうん唸ってるかもしれませんね」
などと笑っているけど、ぜんぜん笑いごとじゃない気がする。そんな心配がわたしの顔にも出ていたらしい。
「嘘です。大丈夫だと思いますよ。電話の声を聞いた限りじゃ、そこまで辛そうじゃなかったし」
「そう」
それでも気がかりなことには変わりない。
「気になるんだったら、お見舞いにいってみたらいいんじゃないですか？」
「……」
じっとわたしを見る三枝さん。その視線がこちらの心の内を探るようであり、挑戦的にも感じたのは気のせいではないだろうと思う。
「そう、ね。でも、やめておくわ」
なぜだかそう答えていた。
この子に遠慮したのかもしれないし、自分から心の中を見せるようなことはしたくなかったのかもしれない。
本当はもうどうするか決めていたのに。

「古河さん」
昼休み、わたしは学生食堂へ向かう古河美沙希さんを見かけ、声をかけた。
「おう、槙坂か」
「今いい？」
わたしも彼女も、一緒にいた友達から離れ、ふたりで歩き出す。

「あなた、藤間くんと知り合いだったのね」
「おっと、もうバレたか」
古河さんは悪ガキのように苦笑いした。
種がわかってしまえば、彼女が藤間くんの存在や電話番号を知っていたのも納得できる。
「そ。真のやつとは同じ中学の先輩と後輩。ま、言わばアタシの舎弟だな。よく一緒にいろんなことやらかしながら遊び回ってたよ」
「ふうん」
努めてフラットに返事をする。それはそれで気になるところだけど、今は後回し。
「その藤間くん、今日は風邪で休んでるわ」
「ああ、そうらしいな。朝サエから聞いた」
サエ？　一瞬、誰だろうと首を傾げたけど、すぐに三枝さんのことだと思い至った。
「お見舞いに行こうと思うの。あの子ひとり暮らしでしょ？　困ってるんじゃないかしら」
「それでアタシにあいつがどこに住んでるか聞きにきたってわけだ」
古河さんはすぐにこちらの意図を察し、そう言い当てる。
「住所、ね。うーん……」
何やら考え込む彼女。
わたしたちの足は学務棟前の掲示板へと向かっていた。そこで新しい連絡事項や休講がないかを確認する。今は特になし。
そうしながら隣で同じように掲示板に目を向けていた古河さんに重ねて訊く。
「やっぱり個人情報はダメかしら？」
聞くところによると、彼女は知る人ぞ知る情報屋だけど、高度な個人情報は扱わない主義なのだという。前に藤間くんの電話番号をおしえてくれたのは、古河さんが彼と仲がよかった上に、その状況を面白がっての特例中の特例だったらしい。
「それもあるけど、真から言われてんだよな。槙坂には絶対におし

えるなって」
「……」
まったく、あの子は……。
「心配なのか？」
「……え、ええ」
今一瞬もうどうでもいいかと思いかけたけど。
「しゃーない。んじゃ、アタシが行くか」
「そうね。それしかないわね」
自分で行きたいところだけど、住んでいる場所がわからないのではどうしようもない。本当は藤間くんと古河さんが彼の家でふたりっきりというのも抵抗があった。でも、病気の彼がひとりきりよりはマシだ。それにふたりは何年も前から知り合いなのだから、今さらという気もする。
再び食堂方面に歩を進めた。
「じゃあ、藤間くんの様子がわかったらおしえてくれる？」
「あン？　なに言ってんだ？　槙坂も行くんだよ」
「え？」
「アタシが真のところに行く。槙坂は勝手にこっそりついてくる。アタシは別に何かをおしえたわけじゃないから、ま、これで義理は果たしてんだろ。頭いいな、アタシは。オンナ一休さんと呼んでくれ」
「……」
いいのだろうか、そんなことで。

放課後、掲示板前で古河さんと待ち合わせして、さっそく藤間くんの家に向かうことに。
「んじゃ、行くか」
「ちょっと待って。確かわたしがあなたに勝手についていくのよね？」
どう見ても肩を並べて一緒に歩き出す流れだ。

「あいつが見てるわけでもないのに、そこまでかたちに拘ったって仕方ないだろ。メンドくさいやつだな」
「……」
オンナ一休さんは細部のディテールは気にしないようだ。いよいよ藤間くんの頼みは聞く気がないらしい。とは言え、おかげでわたしは彼のお見舞いにいけるのだし、感謝しこそすれ文句を言うつもりはない。
そうして辿り着いたのは明慧の最寄り駅から電車でいくつかいったところの、複数の線が交差する大きなターミナル駅だった。
ここは一昨年からはじまった再開発で高級志向の商業施設や文化施設がまとめてつくられ、住宅地として人気が高い場所でもある。乗車客もこの辺りでは最多のはずだ。
ここからバスにでも乗るかと思ったら、どうやら徒歩でいける範囲らしい。
「ねぇ、中学のころの藤間くんってどんな子だったの？」
道中の雑談がてら聞いてみる。
「真？　かわいくないガキだったぞ。いったい何回ブン殴ったか」
「殴ろうと思ったじゃなくて、殴ったのね……」
どれほどかわいくない子だったのだろう。それとも彼女が単にスパルタだっただけか。そう言えば藤間くんは三枝さんにもよく蹴られている。もしかしてわざと自分からそうされにいっているのだろうか。だとしたら、わたしも隙があれば踏みつけるくらいしたほうがいいのかもしれない。冗談だけど。
「着いた。ここだ」
5分と歩かなかった。そこはようやく駅周辺の喧騒が遠くなったくらいのところで、
「え？」
目の前には高級感のあるエントランスを構えたマンションが聳え立っていた。確か駅のホームに降りたときから見えていた超高層のマンションだ。

「ここ、なの？」
「おう」
あまりに予想外で呆けているわたしを置いて、古河さんは先に進んでいく。慌てて後を追おうとすると、「槙坂はそこでストップ」と止められた。
エントランスは途中でガラスの壁に阻まれていて、その中央には自動ドアがあった。勿論、前に立てば開くようなものではなく、オートロックのドア。古河さんが脇にあるパネルに指を走らせると、インターホンチャイムが鳴った。
『はい』
機械を通したその声は、紛れもなく藤間くんのものだった。
「おう、アタシだ。風邪ひいたんだって？　サエから聞いた。見舞いにきたから開けてくれ」
そう言うと彼女は斜め上に顔を向ける。わたしもつられてそちらに目をやると、そこにはカメラが備えつけられていた。マンションの住人が来訪者の顔を確認するためのカメラのようだ。なるほど、わたしをここで待たせたのは、カメラに映らせないようにするためだったらしい。
『少し待ってください。……どうぞ』
音もなくドアが開いた。
中に這入ると、ふたつのシャンデリアがエントランス全体を照らしていた。光量は少なめだけど、暗いというよりは上品で神秘的な印象を受けた。床は大理石。閉じた空間だけあって、学校指定のローファーでも足音がよく響いた。わたしが毎日履いていた靴はこんなにもいい音が出せたのかと少し驚く。
２基あるエレベータのうち１基は地上階にあったので、ボタンを押すとすぐに開いた。
行き先階は２８階。寄り道もせずにそこまで一気に向かっているはずなのに、こんなに長くエレベータに乗っていたのは初めてだった。

「中に入ったらもっと驚くぞ」
「え、ええ……」
さっきからひと言も声を出せないでいるわたしを見て、古河さんはそんなことを言った。わたしはそれだけを返すのがやっとだった。
エレベータを降りて、また驚いた。足が沈み込む。床に絨毯が敷かれていたのだ。ここに入って以降、遊園地のホラーハウスよりも驚きっぱなしだ。高級ホテルと見まがうばかりの廊下に制服姿の女子高生は場違いな気がして仕方なかった。
やがてひとつのドアの前に辿り着き、古河さんは迷わずドアチャイムを鳴らした。
「はーい」
ドアの向こうから藤間くんの声。間をおかず出てきた彼を見て、わたしは思わず頬が緩んだ。濃紺のパジャマ姿だったのだ。
「パジャマの藤間くんもかわいいわね」
それを口にした直後、ドアが閉まった。鍵が下ろされ、ドアチェーンをかける音まで聞こえた。……なぜ？
「なんで閉めんだ。開けろ、真」
「すみません、先に着替えたいのですが。僕の予想が正しければ、その必要があるかと」
「待てるか、バカ。開けねーなら壊す。そして、その後お前も壊す」
そんなやり取りの後、ようやく部屋に上がった。
トイレやバスルームと思われるドアが並んだ短い廊下を抜けると、そこには畳に換算して２０畳はありそうなフローリングのリビングが広がっていた。脇にはカウンターダイニングとキッチン。２面ある壁には他の部屋へ続くドアがふたつとひとつで、間取りは３ＬＤＫのよう。ひとり暮らしの高校生には不釣合いな豪壮さ。彼はいったいどういう家柄の子なのだろう。
呆気にとられるわたしを見て、古河さんが「な、すごいだろ」と

言っていた。
その後、お昼を抜いたという藤間くんのために食事を作り――そして、わたしは今日、ここに泊まることになった。

藤間くんに怒られてまでわたしがそうしたいと強く主張したのは、当然、病気の彼を心配してのことだった。
だけど、同時に古河さんへの嫉妬心があったのも確かだ。
彼女の勝手知ったる他人の家と言わんばかりの様子は、過去に何度もここにきていることを如実に示していて、それが悔しかった。

彼は少し眠ると言って寝室へと入った。
その間にわたしもエネルギィの補給をしておこうと思う。キッチンのものは自由に使っていいと言ってくれているので、パスタと生野菜のサラダを作って簡単な食事にした。
それからお風呂の用意をする。
バスタブにお湯を溜め、その間、言われた通りに脱衣所の戸棚を見てみれば、そこに新品のタオルとトラベルセットがあった。トラベルセットは男性用と女性用がそれぞれふたつずつ。
「……いつでも女の子を泊められるように、じゃないでしょうね」
勝手な想像をして勝手に頬をふくらませる。
次に家へ電話。
母に友達の家に泊まると告げると、特に心配も咎められもしなかった。信用されているといえば聞こえはいいけど……。思わず苦笑。男の子の家だと言ったらどんな反応を示すのだろうか。
程なくお湯が満たされ――家にいるときよりも早い時間だけど、お風呂に入った。楽に足が伸ばせるほど広いバスタブで湯船に浸かり、ふとそれを口にする。
「不思議。ひとり暮らしの男の子の家でお風呂に入ってる……」

「……」
足を引き寄せ、両膝を抱える。
顔が熱い。あまり考えすぎて気持ちがのぼせてしまわないうちに上がろう。
お風呂から上がってまた同じものを着るのは抵抗があったけど、朝には家に帰るのでそれまでのことと思って我慢することにした。次にくるときはもっといろんな用意をしてこようと思う。
リビングに戻り、ホームシアターかと思うような大きな壁掛けの薄型テレビを点ける。ボリュームを絞ったのは寝室で藤間くんが寝ていることもあるけど、考えごとをしたいのもあった。
そう、考えごと。
実は藤間くんと積極的に関わるようになってから、わたしの心に引っかかっていることがある。
わたしは去年の春よりももっと前に、彼と会っているかもしれない――。
かろうじて耳に届くくらいのテレビの声を、さらに右から左に流しながら考える。
いつ？
どこで？
思い出そうとしても思い出せない。
最初は気のせいかとも思ったけど、日に日にその思いは強くなって、今では確信に変わっている。わたしと彼は絶対にどこかで会っている。
去年の春のこと、藤間くんが忘れているなら思い出させてあげる。わたしもちゃんと覚えていることを思い知らせてあげる――そう思って彼に近づいたのに、わたしのほうが埋もれている記憶に気づくことになるとは思いもよらなかった。
彼との本当の出会い。

わたしたちはいつどこで出会ったのだろう。早く思い出したかった。

ドア一枚隔てた電話での会話から2時間ほどが経って、藤間くんが起きてきた。

力の入っていない、ふらふらした足取りでリビングに出てきて、

「うわっ」

わたしの顔を見るや、また引っ込んでしまった。

「ちょっと藤間くん、どうして隠れるの？」

何かとてつもなく失礼な態度を見せられた気がする。少しの間があって、覚悟を決めたような様子で再度出てくる。

「いや、うっかり先輩がきてるのを忘れてたんだ。正直、着替えたい気分だ」

そういう彼はさっき一瞬だけ見たときに比べて、乱れていたパジャマも跳ねていた髪も心なしか整えられていた。ドアの向こうで慌てて直したのだろう。

藤間くんが向かいのソファに腰を下ろした。

「いいじゃない。かわいいわよ」

「……くそ、制服に着替えてくる」

そして、またすぐに立ち上がった。

「今から制服を着てどうするつもり。ごめんなさい。ちょっとからかいすぎたわ」

そう謝って彼を座らせ、入れ違いにわたしが立った。パジャマ姿がかわいいのと、その格好で不貞腐れたように肘掛けに肘を突いているのを見ていると、またからかいたくなりそうだった。

「コーヒーでも入れる？」

さっきキッチンを見たときにコーヒーメーカーもインスタントコーヒーも確認ずみだった。

「遠慮しておく。一日の半分を寝て過ごしたんだ。そんなもの飲んだら夜が寝られなくなりそうだ」

「そのときは朝までつき合うわよ。お話しでもそれ以外でも」
「そっちも遠慮」
それは残念。
「冷蔵庫にスポーツドリンクがあるはずだから、それを」
「わかったわ」
言われた通り冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出し、戸棚から出してきたグラスに注いだ。コースターも一緒にリビングにもっていき、彼の前に置く。
「どうぞ。……わたしも烏龍茶をもらうわね」
もう一度キッチンに戻り、今度は自分のための烏龍茶を用意した。
「まるで我が家だな」
「機能的なキッチンほど合理的に最適化されてるものよ。少し見ただけでものの配置はだいたいわかるわ」
特にこういう高級マンションだと、最初から使いやすさを追求しているのでわかりやすい。
「具合はどう？」
彼と向かい合って座り、尋ねる。
「おかげさまでずいぶんよくなった。明日には学校にいけると思う」
「むりはしないほうがいいわ。わたしのことは気にしないで。あなたが治るまで何日でも通うから」
「そんなこと言われたら這ってでも行きたくなる」
この子の天邪鬼は少々の風邪も関係ないらしい。
馬鹿な言い合いはここまでで、藤間くんの瞼が硬いこともあって、この後しばらくはふたりで他愛もない話をしていた。

「ねぇ、気になっているんだけど。あれは何？」
わたしが視線で示したのは、リビングの壁にかけてある額だった。
中には紙が一枚。英字新聞の見出しに使われるようなフォントのアルファベットらしき文字が並び、原色が多く使われた絵も添えられていた。古い本のように見える。

「ああ、それは装飾写本の１ページだ」
わたしの印象は正しかったらしい。
「たまたま手に入れたんだ」
「どういうものなの？」
「要するに、まだ印刷技術が安定的に確立されていなかった時代、よい書物を広めるために手書きで複製したものだと考えればいい」
そう言いながら藤間くんは額を壁から外し、わたしに手渡した。
「読めないわ。何が書かれてるの？」
「さぁ？」
と、彼。
「ラテン語だからね。僕だって読めないよ。ただ、写本が盛んだったのは１４〜１５世紀のキリスト教の世界。当時いちばん多く書き写されたのは聖書だから、たぶんそれもそのうちのひとつだろう。ベテランの写字生がふたりいれば、７日で１冊の聖書を書き写したそうだ」
少なくとも歴史がひっくり返るようなものではないだろう、と藤間くんは笑う。
「すごいと思わないか？　そんな古いものなのに字も絵も未だに鮮やかなままだ。今じゃ電子書籍なんていう質量ゼロの本が溢れ返ってるけど、これはその対極だ。一字一字、一色一色すべてが人の手で紙の上に乗せられていった。その紙だって大量生産できず貴重だっただろう。そう思えばここにあるこの質量は決して軽いものではないし、力そのものだと僕は思うね」
このときの藤間くんは、知識を披露するときのような淡々とした口調ではなく、もっと情熱的な語り口でとても印象的だった。後に彼は高校を卒業すると同時にアメリカに渡るのだけど、思えばこのときにはすでにその決意を固めつつあったのかもしれない。
やがて時計の針が２３時を回るころ。
「本当にそこでいいのか？」

寝室から来客用らしい毛布を一枚持ってきた藤間くんは、改めてわたしに確認した。
「ええ。さっきも言ったでしょ？　わたし案外どこでも寝られるのよ？」
「だからって僕がベッドに寝て、先輩がソファというのもな……」
でも、お互いの寝場所についてまだ納得していないらしく、毛布をなかなか寄越さない。
「シーツもカバーもぜんぶ取り替えるから、ベッドに寝てくれないか」
「だーめ」
こちらも梃子でも動かない決意で、さっきからソファに座ったままだ。わたしだって病人をソファに寝かせる趣味はない。彼のこういう口は悪いくせに紳士なところも好きだけど、こればかりは譲れない。
「そんなにわたしをベッドに寝かせたいなら、方法はなくもないわよ？」
「わかった。僕が悪かった。もうソファでも床でも好きなところに寝てくれ。因みに、僕のオススメはあなたの部屋にある使い慣れたベッドだ」
そう言うと藤間くんはようやく毛布を渡してくれた。が、まだ渋い顔でソファを見ている。
わたしは「あ」と何かを思い出したように発音し、
「スカートがしわになる困るから脱がないと」
ダメ押し。
藤間くんは突風のように寝室に逃げていった。

真夜中。
わたしはぱちりと目を開けた。
一瞬、なんでこんな時間に目が覚めたのだろうと思ったけど、す

ぐにここがどこかを理解して納得した。やっぱり人の家で、しかもソファで寝ていると眠りが浅かったようだった。
ソファから立ち上がり――向かったのは藤間くんの寝室だった。
ドアのレバーに触れると、それは軽く力を入れるだけで角度を変えた。鍵はかかっていないらしい。
（無用心よ、藤間くん）
静かにドアを開け、中に這入る。睡眠の妨げにならないように光量を絞り込まれた間接照明のおかげで、中の様子はすぐに把握できた。ダブルベッドと扉付きの書棚、それにライティングデスクがある。
わたしはゆっくりとベッドに歩み寄った。
彼が眠っている。穏やかで規則的な寝息で、特に苦しそうな様子はない。ほっと胸を撫で下ろす。夜中になって熱が上がったりはしていないようだ。
わたしは手を伸ばし、彼の額にかかっていた前髪を払った。その口から「ん……」と悩ましげな声がもれたけど、目を覚ます様子はない。
彼の寝顔をじっと見る。

「ねぇ。初めて会ったときのこと覚えてる？」

気がつけば我知らず問いかけていた。
「わたしはまだ思い出せないの」
あなたはそれを知っていてわたしに近づいてきたの……？

朝になって一緒に朝食を食べた後、わたしは早々に彼の部屋を出てきた。学校に行く前に一度家に帰らないと。着替えもしたいし、鞄の中は昨日の時間割りのままだ。
早朝のマンションの前で「うーん」と伸びをする。

「朝帰り。気持ちいい」
新鮮な気分だった。
ちょうど通りかかったサラリーマンらしき男の人がこちらを見てぎょっとしていたけど、わたしは笑顔で返しておいた。

その4

「槙坂」
休み時間、ロッカーから次の授業のテキストを取り出していると、横から声をかけられた。ここ数日で聞き馴染んだ、少しハスキィな女の子の声。そちらを見ればウルフカットにアーモンドアイをした古河美沙希さんが立っていた。
視界の隅では、同じくわたしに声をかけようとして古河さんに先を越されたらしい女の子ふたりが、戸惑い顔でこちらを見ていた。小さく手を振ってあげると、嬉しそうに手を振り返してから去っていった。
「昨日、あれからどうなった？」
「藤間くんならもう大丈夫みたいよ。朝には熱も下がっていたし、さっきの授業でも会ったわ」
「そうじゃなくてさ――」
と、そこでやや声のトーンを落として、
「ひと晩一緒にいたわけだし、何もなかったってことはないんだろ？」
「……」
気のせいか、とてつもなく期待を含んだ声だった。
「……わたしの記憶では何もしないって約束だったと思ったけど？」
「バッカ。そう言わないとあいつが納得しないだろ。建前だよ、建前」
どうやらわたしは彼女に大きな期待を背負わされて、あの場に残されたらしい。
ロッカーに鍵をかけ、古河さんとともに歩き出す。
「あ？　まさか本当に何もしなかったのか？」
「ええ、もちろんよ」
信じられないといった様子の古河さん。

「目の前に弱った真がいるのに、何も思わなかったのかよ？」
「それは……」
その質問を文面通りにとらえて、思うか思わないかで言えば思ったことは多い。彼のかわいらしいパジャマ姿や、あどけない寝顔とそのときの悩ましげな声は、わたしの心を掴んで離さない。しばらくは思い出して楽しめそうだ。
だからと言って、その場でどうこうしようとするほど本能的ではない。
「そもそも藤間くんがそんな状態だから何もしないって話だったはずよ？」
「やっぱああいうのってさ、女ががんばってもダメなもんなの？」
「……知らないわよ、そんなの」
我ながらひどい会話だ。しかも、内容に決定的な経験不足が透けて見える。
「そっちこそどうなの？」
いい機会だと思った。
「藤間くんってあなたがいるから明慧にきたんでしょ？」
「はぁ？　あいつがそんなこと言ったのか？　アタシは初耳だぞ」
「え？　それは……」
どうだっただろう？　今にして思えば、とある先輩を追ってきたとは確かに言ったけど、それが古河さんだとは明言しなかったように思う。むしろ言いにくそうな様子だった。
ふと、まさか――と思った。
（わたし？）
まさかそのとある先輩というのはわたしのことなのだろうか。
それは単なる自惚れか自意識過剰、発想の飛躍かもしれない。
でも、入学早々に声をかけてきたことや、以前どこかで会っているかもというわたしの中の曖昧な記憶のことを考えれば、あながち見当違いでもないような気がする。
ロッカーのある校舎を出たところで立ち止まる。

「ねぇ、藤間くんが入学前からわたしのことを知っていた可能性はあると思う？」
「あんじゃないの？　ていうか、知ってるはず」
「え？」
瞬間、わたしの心臓が大きく跳ねた。
「前に訊かれたんだよ。明慧にびっくりするほどの美人はいるかって。だから槙坂ってのがいるって言っておいた」
「……それ、だけ？」
残念ながら肩透かしだった。その程度ならただの先輩後輩の世間話だ。わたしも中学生のとき、先に卒業した先輩に格好いい男の人はいましたかなどと聞いている。
一瞬期待したのだけど。
埋もれた記憶はまだ姿を見せない。
古河さんとは次に受ける授業も講義棟も違うので、ここで別れた。

『天使の演習』というカフェがある。
駅を降りて我が家とは反対方向にある住宅地の角に店をかまえていて、ふらっと散歩に出たときに見つけたものだ。こんな店があるなんてつい最近まで知らなかった。
カフェにはいつも眠そうな顔の男の人と、おしとやかに見えてどこか快活なものを秘めた女の人が切り盛りしていた。ふたりともわたしといくつも年が変わらないように見えて、最初はアルバイトだろうと思っていた。だけど、すぐにこのふたりこそがここのマスター夫婦だとわかった。
今、わたしはこの『天使の演習』にひとりできていた。
店内はちょっと心配になるほど静かで雰囲気がいいので、落ち着きたいときにはちょうどいい。コーヒーの味も好みだった。表の通りに面したテーブル席に座れば外の様子が窺えるけれど、道行く人は少なくて景色にあまり変化はない。

「考えごとですか？」
その声にはっと我に返り、自分が思考に没頭していたことに気づいた。顔を上げるとマスターの奥さんが立っていた。小柄だけど意外にスタイルがよく、立ち姿がきれいだ。
目だけで店内を見回してみると、客はおろかマスターの姿までなかった。今は彼女ひとりらしい。だから話しかけてきたのだろう。この店には制服といったものはなく、彼女もデニムのロングパンツにトレーナーといった普段着にエプロンをつけているだけ。そういう家庭的なスタイルもここを気に入っている理由のひとつだ。
「あ、彼ならお店がこんなだから買いものに出かけましたよ。わたしに店番押しつけて。ひどいですよね」
わたしの目と心の動きに気づき、彼女は小さく拗ねたようにそう説明した。
どうやらこの人は誰とでも友達になってしまうらしい。――そういう才能はとても羨ましく思う。わたしもここに足を運ぶようになってすぐに親しくなった。聞けば彼女は大学生でもあるとのことで、軽食、特にサンドイッチのセットに曜日限定メニューがあるのは、担当である彼女が学校に行っていて店にいる時間が限られているからのようだ。
「考えていたのは男の子のことでしょう？」
「え？」
心を見透かされたようで、どきっとする。
「あ、もしかして当たりでした？」
彼女はいたずらっぽい微笑みを浮かべた。年上には見えない、幼さが見え隠れする笑みだ。
「ええ、まぁ。よくわかりましたね」
確かにわたしはいつも藤間くんのことを考えている。でも、このところ考えても進展はないので、今はいつの間にかコーヒーを口に運びながらただぼんやりとしていた。
「女の子が悩むことなんてたいてい男の子のことですから」

その言い方に占い師の手口に通じるものを感じた。曰く「あなたが悩んでいるのは人間関係についてですね？」。人間誰でも人とつながって生きているのだから、ほとんどの悩みは人間関係に起因するものだ。
「槙坂さんならやっぱり男の子に言い寄られて困ってるってところかな？」
「ううん、逆です。わたしが追いかけて、逃げられてばかり」
「あー……」
わたしの返事を聞いて、彼女はばつの悪そうな苦笑をもらした。
「でも、わかる気がするな。槙坂さん美人だから、相手の男の子が後込みしちゃうんですよ」
「そうでしょうか」
あまりそういう感じには見えないのだけど。でも、少し勝手な印象を言わせてもらえば、わたしは藤間くんに嫌われてはいないと思う。それどころか古河さんを別格にすれば、どんな女の子よりも彼の近くにいる自信がある。だけど、それでも彼を捕まえられない。捕まえさせてくれない。
「わたしも追いかけるほうで大変だったなぁ」
と、彼女は懐かしむように言うのだけど……。
「ん？　あれ？　もしかしてわたし、遠回しに自慢した？」
「……たぶん」
でも、年上の女性をつかまえてこういう表現もどうかと思うけど、彼女が類稀な美少女であることは間違いない。高校ではきっと男の子がほうっておかなかっただろうし、今の大学でも彼女が既婚者だと知って数多くの男子学生が肩を落としたことだろう。
「あ、そうだ。思い切ってデートに誘ってみたらどうですか？」
「デート、ですか？」
それは今までのわたしとは縁のない単語と発想だった。そんなこと考えもしなかった。たぶんわたしは彼と学校で会えるだけで満足していたのだと思う。学校に行って、同じ授業で顔を合わせる。食

堂で彼の姿を探す。教室の移動中にばったり会う。『槙坂涼』はそんなことをしたことがなかったから、それだけで楽しかった。
でも――学校の外での彼。それを思った瞬間、急に興味がわいてきた。それに――それくらいしないといけないのかもしれない。
そのとき、店の入り口でドアベルが鳴った。お客がきたらしい。
「いらっしゃいませ。お好きなところにどうぞ」
マスターの奥さんはそちらに向かって応対の声を投げる。
「今度うちにつれてきてくださいね。槙坂さんが気になってる男の子、一度見てみたいです」
それからわたしにはそう言って邪気のないかわいらしい笑顔を見せてから、テーブルを離れていった。
「……」
デートか。
そんなこと一度もしたことがないな。
せっかくのアドバイスだし。
「誘ってみようかな。もう少し揺さぶるために」

かくして、わたしは藤間くんをデートに誘うことに成功した。
それはいいのだけど。
「なんか涼さん、落ち込んでない？」
「ていうか、悶えてる？」
「……いいの。なんでもないから」
休み時間、わたしは一緒にいた友達にそう言われ、両肘を突いて額を押さえ頭痛でも堪えているかのような構造から顔を上げた。
昨日、確かに彼にデートの約束を取りつけた。
でも、その過程でわたしは壮絶に恥ずかしい失敗をやらかしてしまった。思い出しただけで顔から火が出そうになる。
（自分でスカートをたくし上げて見せる女って……）
さすがにサービス過剰だと思う。

どれだけ見えただろう？　もともとそんなつもりはなかったから、そんなには見えていないはず。でも、階段だったから、もしかしたら自分で思っている以上に……。
（わざわざ階段の上に立ってって。あぁぁ……）
考えれば考えるほど深みにはまる。
わたしが失態の代わりに得たのは、興味と禁忌の間で葛藤する彼の表情。あの瞬間、確かにわたしは彼を征服していた。そう思えばあのときの彼の表情には、わたしの体の中心を騒がせるものがあった。
「最近の涼さんってちょっとヘンだよね」
「そ、そう？」
最近？　今に限って言えば、ともすればそれこそ悶えそうになるので、傍目には悩みでもあるように見えるかもしれないけれど。でも、最近とはどういうことだろう。
「ほら、急に2年の男の子と仲良くなったりしてるし」
「……」
そういうことか。それを『変』の範疇に入れられるのは少し心外だった。
いや、やっぱり変なのだろう。普通の女の子が普通にしていることも、彼女たちの目に映る『槙坂涼』にとっては。

わたしは時々思う。
『槙坂涼』とは何ものなのだろうか、と。
ひとつ仮説があった。それは、『槙坂涼』は人の願いが生んだ存在である、というものだ。
誰もが憧れる美貌の少女に与えられた役目はとてもシンプルだった。即ち、「その通りね」「今あなたが思っている通りのことをすればいいと思うわ」とうなずいてあげること。人間誰でも肯定されたいという願望をもっていて、それを満たすのに『槙坂涼』は丁度いいのだろう。万人が認めるカリスマに同意されることほど安心で

きるものはない。
幸か不幸か、わたしは『槙坂涼』が担うべき役割に気がついてしまった。
でも、もしその順序が逆だったら？
肯定されたいという願いが『槙坂涼』というシステムを生み出したのだとしたら？
ふとした瞬間に、わたしは自分がとても希薄だと感じる。
もし『槙坂涼』が他者を否定する言葉を口にすれば、そんな『槙坂涼』は必要ないと逆に否定し返され、そうしてやがていつか誰にも望まれなくなったとき、『槙坂涼』という存在は消えてしまうのではないだろうか。
それはばかばかしい妄想。
それでも不安に思う。
部屋でひとり勉強しているときや朝目覚める前の微睡（まどろみ）の中で、そんなかたちのない不安が鎌首をもたげる。
誰にも望まれなくなったとき、そこに何が残るのだろう。

ずいぶん後になって、それを藤間くんに話したことがある。
そのときは朝の浅い眠りの中でそれを考えてしまった。不安を抱えたまま目を覚ましたわたしは、そこにいた彼にそれを話し、最後に聞いてみた。
「わたしってちゃんと生きてる？」
対する彼の答えは単純だった。
「少なくとも僕はあなたが生身の人間であることを知ってる」
確かにそうだった。
彼なら知っている。わたしには触れることのできる体があることも、痛みに血と涙を流すことも。
その言葉に安心し――そして、そこで初めて気がついた。
わたしも誰かに肯定されたかったのだと。

「涼さん。今度みんなで遊びに行かない？」
そう切り出してきたのは伏見唯子だった。
彼女はスポーツ少女を絵に描いたような女の子だけど、足が不自由で車椅子の生活を余儀なくされている。中学生のときに遭った事故の後遺症なのだという。授業前の今は車椅子から通路側の席に移っていた。
「いつ？」
「次ー、じゃなくて、そのまた次の日曜」
この週末なら藤間くんとのデートだけど、来週なら特に予定は入っていなかった。彼女のお誘いを受けようと思ったとき、彼女の次の言葉を聞いてわたしは発音を飲み込んだ。
「定番だけどね、遊園地に行こうと思うんだ」
「……」
遊園地なら日は違えどわたしたちと同じだ。そして、遊園地といえばこの辺りではひとつしかない。
わたしは素早く考えを巡らせ、すぐに答えを変えた。
「ごめんなさい。その日はもう予定が入ってるの」
「え、どうしよう。違うの日だったら大丈夫？」
「わたしのことは気にしないで。また次の機会に一緒させてもらうから」
微笑みとともにやんわりと断った。
わたしに合わせてくれるのは嬉しいけど、それでは困る。わたしたちのデートの日を彼女たちに合わせるのだから。
『槙坂涼』が男の子とデートしているところを見つかってしまう――なかなか面白そうシチュエーションだと思う。
後で藤間くんに日にちを変えてもらわないと。
「……」
後で……？
いや、やっぱり明日にしよう。
今日はまだ、その、ちょっと顔を合わせるのが恥ずかしいから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7930q/

その女、小悪魔につき――。

2011年11月23日21時05分発行